

東方日常日記

sameragi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の少年が、テンプレ通りに幻想郷へと転生。平凡に日常を送っていかうとする……なんて非凡で非日常的な物語。

目次

82

平凡を求める迷子

どこにでもあるプロローグ

人は常に迷ってるよ……人生という道

プロローグ、テンプレ、普通はじまりっ

に、な

てそういうもんじゃん？

死亡フラグとは普通なのか？

落ちてきて森だったら？身の危険以外

アイテムゲット！君の心もゲットだけ

なにを感じる

！

八雲流日常編

普通過ぎる番外編

スキマさんと 出逢い

別れ、そして新たな出会い！……な

突撃！隣の八雲家！

んか終わりたいだな。

こんな八雲家の日常、どうでしょう？

『妖怪の山』ってネーミングだけで近づき

たくないよね

偶には世間話でも。

お値段異常な河童物語。

日常……だよな？そうだよな？

67

56

38

26

18

1

167

151

146

127

110

97

鴉天狗と普通の少年。

|

181

物欲には好物を。

|

196

小猫と小耳と迷った小物。

|

208

普通っぽい番外編

|

232

椀舞うとき鐘は止む。

|

252

どこにでもあるプロローグ

プロローグ、テンプレ、普通はじまりつてそういうもん
じゃない？

気がついた時、白い空間に独りで居たらどうする？

まずは……驚くだろう。それから、その場所のことを調べようとしたり、突然のことへの恐怖で、叫び声を上げたり、泣き喚いたりするかもしれない。俗に言う、人夫々つてやつだ。

だが、そんなことは普通起こらない。現実でそんなことは起こりえない。

それが普通というものだ。

そんな奇特な出来事は、ゲームやアニメなんかの、物語の中だけで十分だ。多くの人
がそういった奇特な出来事を夢見ながら、そんなことは起こりえない。というか実際に起

こつたら困る——そう考えることだろうと思う。

俺だったらそう思うね、非日常は必要ないってな。

さて、何故俺が、冒頭からこんな意味無き例え話をしているかというところ——

気がついたら独りで白い空間にいました。

way? 一体、何がどうなっているんだ? 何故、こんなところに俺は居る? さつきも言ったが、普通に日常を送っていけば、こんなことは起こらない。有り得ない筈、なんだ。

考えろ、考えるんだ。

非常識で、非凡で、非日常的なこの現状。

現状という、結界を破壊する為には、考え、理解し、解答を導き出すことだ。

まず、一に——

俺は自分の頬を思い切り強く抓った。

「痛え!」

痛い、だと……

ということとはつまり、だ。

「第一の可能性、『夢オチ』が潰れたか……」

誰が言ったか知らないが、夢の中では頬を掴つても痛みを感じないらしい。

本当かなんて、知るわけがないが……とりあえず、現実というところで話を進めていこう。

だが待て。実際、夢だと思ってたからもう考えとかねえよ。

OK。GAME OVERだ。電源ボタンはどこだ？ない？そりや大変だ。

——じゃねえよ!?

待て待て待て、夢じゃないとしたらここはどこだよ、おい!!! 現実にこんな場所があるわけねえだろうが!

うん分かった、落ち着け俺、一旦クールダウンだ……この状況をどうにかする名案を考えるんだ。

そ、そうだ! 記憶を辿ればここがどこだか分かるかもしれないっ!

えっと、俺は普通の高校二年生だった。よし、ここまではOK。

友達も多くもなく、だが少なくともなく、普通の家庭に誕生し、普通に生活してきた。何の変哲もない。ああ、平々凡々な環境だ。

それで確か俺は今日は……朝七時起床。朝飯はトースト。銜えて登校したりは、してないが。で、学校で教師から強力な睡眠呪文を受け、時間が過ぎて——えー、で？あつ、とそう。昼は購買のカツサンド——ってどうでもいいよ！

んで、そつから帰宅部の幽霊部員である俺は、一人で帰宅していき、家に……え？家に——帰ったか？俺、家に帰ったつけ？待て、ここだ。記憶が曖昧だ。よく、思い出せ？

俺は一人で帰宅して——その、途中で——

その時だった。俺の脳裏に一つの、ハッキリとした映像が流れ込んできた。

横断歩道がある。小学生低学年くらいか？少女が渡ろうとしている。

ビニール袋を持っているし、おつかいかな？微笑ましいもんだ。

ん？あれは——大型のトラックが突っ込んできた。ふと、トラックの運転席を見ると

——居眠り運転?! マズイ、このままだと、あの子が！

そう思った瞬間、少女の所に一人の男が……

あれは……俺……？

そう、その毎朝顔を洗うときに見る、見慣れた顔は……正しく俺だった。男、いや俺は少女を突き飛ばし、歩道へと逃がした。

少女は助かった。トラックに轢かれず、無事のようだった。いきなり突き飛ばされて、驚いてはいるが。

安心したのも束の間、少女を突き飛ばした俺は……

女の子の身代わりとして、トラックに潰された。

無残にも、惨めにも、滑稽にも——

とても、呆気なく、潰れた。

トラックが、横断歩道が、全てが赤に染まったところに、やっと運転手が降りて来た——

と、そこで映像は終わる。

「なんだったんだ、今のは……？」

自分が、トラックに潰される映像。

自分が——死ぬ瞬間。

「今のは、あなたの最後のきおくです」

俺が呟くと同時に、突然後方から綺麗な声が聞こえた……

振り向くとそこには女性というにはまだ若すぎる……少女が立っていた。いや下手したらまだ、幼女という年齢かもしれない。顔立ちはとても整っていた……胸は、ないが。つて、初対面で！しかも幼女とも言えるくらいの子に！なんてことを思ってたやがるんだ、俺は！変態か？いや変態だよ！多数決とつたら、満場一致で犯罪者だよ！自重しろ、落ち着け、俺。

と、とりあえずだ。

「君はだ「すいませんでしたっ！」

セリフを被らせてきた。

まあ、俺も大人だ。高校生だが。こんなことで幼女に怒ったりしない。じゃ、気を取り直して。

「すいませんつてい「本当にすいませんでしたっ！」

……またかよ。

「いやだか「本当に申し訳ありませんっ！」いい加減にしてくれ!!」「ヒッ！」

流石に怒るよ？そんなに被らせてきたら。大人？んなもん知るか。

幼女は俺が突然叫んだのに驚き、またすいません、すいませんと謝っている。

「いや、大声出して悪かった……なあ、なんでさっきから謝ってるの？」

そう聞くと、幼女は少し俯いてしまう。なんとなく、言いにくいことだというのは分かった。

「あの……さっきの映像はあなたのきおくだって言いましたよね」

「ああ……そんなこと言ってたね」

でもあの映像が俺の記憶なら、俺はトラックに潰されたはずだ。でも今の俺は無傷。それと、ここがどこかの説明が欲しいところだが……

ん？でももし本当にさっきのが俺の記憶なら、一つだけ、この現状も、この空間も、この常識外の全てにも、常識を当てられる選択肢が在る。

だがそれは、BADEND突入用の、ただ一つの、どうしようもない選択肢だった。

「……あなたは……もう死んでいるんです……」

北斗神拳の使い手みたいなセリフだな、なんて場違いで空気に合わないことを思った。

で、なんだって？俺が死んでる？ああ、つてことは、ここは死後の世界かなんかなのかね？

「つて、ちよつと待って！」

幼女はビクツと肩を振るわせた。怖がっているのだろうか、普段の俺ならちよつとは

気遣えたかもしれないが、今は頭に血がのぼっていて他人を気にしてはいられなかった。この図、客観的に見たら危ない図だな。

「俺が死んでいる？ 本当にか？」

「……はい、すいません……」

どうやら俺の耳が怪電波を拾ったわけじゃあないらしい。俺はもう一度、頬を抓るがやはり痛かった。だが普通こんなこと直ぐ「はいそうですか」なんて信じられるわけもない。生憎のところ、そんな凄まじい適応力は持ち合わせていない。

「ここは、死後の世界なのか？」

天国？ 地獄？

それとも、それ以外の『どこか』か？

「いえ、ここは死んだもののタマシイのゆくすえを決める場所です」

成程、じゃあこれから天国か地獄なんかに入れて行かれるのか……

「あの……すいませんっ！ あなたが死んでしまったのは、私のミスなんですっ！」

「え？ 君の……ミス？」

どういうことだろう？ 普通な俺は状況に全く付いて来れていないので、分かるように教えていただきたい。

できれば、短い文章に纏めていただけると、大変分かりやすくいいですが。

「はい……本当は、あそこであのあなたが救った女の子が死ぬはずだったんです。でも私
がしっかりと注意していなかったせいで、あなたがあの少女の運命に介入してしまった
……」

「……………」

「それで、本当はもつと生きるはずだったあなたを死なせてしまった……すいません
……」

俺があの子の運命を変えて救った？有難う。簡単で分かりやすい説明だ。まあ
状況は把握したさ。

実際はまだ全然把握できていないが、そんなに小難しく考えても、こんなこと、一般
高校生レベルである俺の頭が答えを導き出せるとはとても思わない。考えるだけ無
駄、つてやつだ。

「それは良かった」

「……………え？」

非難の言葉を又は、困惑や疑念といった感情を、予想していたのだろうか。
少女は心底不思議そうな顔をした。これがマンガとかだったら頭上に『？』マークが
飛び交っていることだろう。

「だってさ、結果的にその少女を救えたわけだろ？なら良かったじゃないか」

「でも、それで、あなたが……」

「何言ってるんだ。テンプレ通りじゃないか。誰かを救って最期を飾る。最高じゃないか。誰もが一度くらいは憧れたことがあるんじゃないか？普通に。だけど俺がそれをやったと思うと、嬉しいもんだ。最高に「ハイ！」ってやつだアアアアアハハハハハハハハハハーツ、流石にWRYYYYYとは言わないが」

「は、はあ……で、でも」

「ノンノンノートルダム。でもじゃなくてさ。いいんじゃないか、自分を責めなくて。そんなことしてたら、精神的に参っちゃうだろ？普通に樂觀的に簡単に「相手がそういうならいいか！」とか考えることも大事だと思うぜ？」

「……は、はあ……？」

「分からないか？んーまあ、俺も全く意味が分からん」

「……ぷつ、な、なんですかそれ……」

「いやあ、なんだろうか、俺が聞きたいくらいだつて」

「ふふ、アハツ、アハハハハ！」

幼女は笑った。思い切り、笑った。笑壺に入ったらしい。なかなかどうして。良い笑顔をするじゃないか。女の子は笑顔が一番だ。一番の化粧は笑顔って言うし。……まあ、悟ったような台詞を言つて格好つけたが、実際俺は今も焦っている。というか、こ

の状況下で焦らない奴は普通いないと思うが。これから、俺はどうなるんだろう。天国に行けるよな？

「とうか、君はなんなんだ？」

「あつ、私は神の下つ端をやらせてもらってます、ランジエと言いますつ」

「ふうん……神の下つ端ねえ……」

神に下つ端とかいるのか？いや本人が言っているのだからいるのだろうが。

あれ、神の数え方は人でいいのだろうか。見た目人間だけど。

「あんまり驚かないんですね？」

「普通に考えてこんなところに一般人がいるわけないからな。そんなところだろう」

幼女、元いランジエは、俺の答えに驚いたように眉を顰めながらも、納得していた。

「で？これから俺はどうなるんだ？天国には行けるのか？」

「いえ、あなたには転生してもらいます」

その言葉に、少し無気力状態だった俺は敏感に反応する。

「転生……？次の、体にか？」

「いえ、記憶と体をそのままの状態で転生させます。こちらのミスですから」

「いや待てよ。俺は死んだことになってるんだろ？そこはどうするんだよ」

「はい、ですから本当にすいませんが……元の世界には戻せません」

元の……世界？

また、話がややこしくなってきた。

普通たる俺に、もっと優しくしてくれ。

「あなたはアニメとかゲームとかって見たりします？」

「ああ、割と好きな方だが……？」

「そういう物語の世界が、本当にあつたら……とは考えたことありませんか？」

「普通は誰もが一度は考える道だな」

断言は……出来ないが、考えたことが有る人は多いのではないかと思う。

一般人代表みたいな俺が言ってるんだ。そんなもんじゃないか？

「あるんですよ」

「え？」

一体なんだ。何が有るんだ？

「物語の世界は、あるんです」

「え？あれは人間の考えたフィクションだろ？」

「はい、そのフィクションの世界があるんです」

「……マジで？」

「マジです」

即答か。

「……でジマ？」

「でジマです」

やはり即答か。

あーもういい。今更だ。ここまで来たら、もう大抵のことには驚かない自信が有る。

「えーじゃあ。俺はその物語の世界に行くってことでいいの？」

「はい、さつきもですけど、やけに冷静ですね」

「そんなことはない。困惑してる。格好つけだから、表に出さないだけだ」

それに面倒でもある。

後、その感じの設定は所謂『テンプレ』だからな。

「ところで、どこに行くんだ？」

出来れば、知っているものがいいが。

「えっと・・・東方Projectっていう世界です」

「ふうん、東方かあ……」

東方というものは俺も知っている。確か弾幕シューティングゲーム、だっけか。友人が話していた。

その東方の世界に行くのか……ちゃんと生きていけるのか？ 実に心配だ。今からも

う、胃が痛むぜ。

「では、転生するにあたって、なにか能力を授けます」

所謂、特殊能力？東方だったら「〴〵程度の」ってのか。

「うん、別にいらねえ」

「ここは素直に断っておこう。」

「えっ！なんでですか？」

あからさまに驚愕の色を顔に浮べるランジエ。さつきから思っていたが、結構子供っ

ぽい………というか、顔に出やすいやつだな。

「だってそんな能力とかあったら普通に生活していけなそうじゃないか」

「普通、ですか？」

「そう、俺は普通に平凡に常識的に一般的に平和的な日常を送ることを信条としてるんだよ」

「な、なるほど………でももらってくれないと私が怒られちゃいます。困ります」

「そうか？じゃ、適当に付けといてくれ」

「て、適当って………私が決めちゃっていいんですか!？」

「OK、OK、大丈夫だ、問題ない」

「いいのかなあ………?」

うんうん、無問題。モイマンタイ

「大丈夫、大丈夫。あ、後そんなに強くなっていいから、普通でいいよ、普通で」
関係ないけど『大丈夫』って便利な言葉だよな。

「普通……ですか。分かりました」

そう言い、ランジエはにっこりと微笑んだ。

「どうやらやはり、最高の化粧は『笑顔』というのは本当のようだ。

「じゃあ、頑張ってきてください」

「ああ分かったよ。まあ楽しんでくる。飽くまで、普通にな」

「『普通』、ですか」

「そう普通。俺の一番好きな、いや大切な言葉だ」

普通で、平凡で——

飽くまで常識的に、飽くまで一般的に——

俺は、それが、そんなのが一番いいと思う。

「えつと後……本当にすみませんでした……」

「どうしたまた？」

「いえ、やっぱり……」

「やっぱり気にしないのは難しい、ってか？」

「……はい」

「ランジエ。御免で済んだら警察はいらない」

「え？」

「謝ることは大切だが、相手の気持ちを押し切ってまでの無理矢理な謝罪は、有難迷惑ですらないぞ？なら、その行動に意味なんて有るか？OK、答えは『無い』だ。文字通り、答えは無い。だってそんなの価値観だし。だが、少なくとも俺はそう思ってる。だから

———
今回のところは、俺ルールで。

「気にすんな」

俺はそう言い、ニヤリ、と口端を吊り上げた。

「それじゃ、もう……」

「はい、転生させます」

「……今度は、俺が先読みされたか」

そんな会話をしながら、なんとなく頭をかいた。

「じゃあ……さようなら」

「いやいやランジエ。別れっていうのはさ」

ランジエは首を傾げる。まあ多分俺がランジエの立場でもそうなる。誰だってそー

する。俺だつてそーする。

「またな」

「……はい！また！」

ちよつと、格好つけちやつたか？まあ、今までもだけど。年頃だから仕方がないよな。ランジエが笑顔でそう言った瞬間、俺の立ってたところに穴が開いて、俺は落ちていった。

……え？

「……う、うわあああああ!!!」

こういうところもテンプレかよつ!!!格好つけたのに!

こうして、俺の普通の転生ライフが幕を開けた……大丈夫!……なのか？

落ちてきて森だったら?身の危険以外なにを感じる

「痛え……」

どうも、転生者です。

前回はテンプレ的に落とされたわけだが……痛い。当然ながら、落ちたら痛いよ。痛い。で済んで良かったのかもしれないが、もう少し一般人である俺にも優しくしていただきたい。

「というか、……どこだ……?」

落とされた先は鬱蒼とした『森』

風が強く、少し肌寒い。風で落ちた葉が辺りに舞う様子は正に『幻想的』で、見惚れてしまいそうだったが、直ぐに今現在の自分の状況を見直し、溜息を吐いた。

「こんなところもテンプレ通り、か……」

神様や運命というものは、とことんテンプレが好きらしい。だが、実際森の中に落とされるなんて、堪ったもんじやない。下手したら死ぬぞ。転生直後に。

それがテンプレ、というものなのだが……如何せん納得出来ない。

というか、今はいつだ?何時代だ?人間もいないとか、止めてくれよ、おい。

「安心してください。人はちゃんといますから」

「HEY!?! な、なんだ?」

突然、背後から声が聞こえた。さつきまで、風の音、葉が擦れる音なんてものしかしていなかったのに。心臓に悪いってレベルじゃねーぞ!

ん……あれ?、今の声はもしかして……

「ランジエ、か?」

声のした方に体を向けるとやはりというか、そこにいたのは先程の件で異様に見慣れてしまった幼女の顔だった。

「はい、正解です!」

「なんだ、いやあ驚いた……」

素でビビりました。

「ああ、すいません。おどろかすつもりはなかったんですが……」

ランジエが申し訳なさそうに項垂れる。さつきもそうだったが、感情の変化が激しいやつである。

「いや大丈夫だ。突然だったから、少し驚いただけだ……で、どうしたんだ?」

「ここにいて、つてことは何かしら俺に用件が有るんだろう。出来れば、時代や場所のことも教えてくれると有り難い。」

「あーそうでした！あなたのいる場所と能力について説明しにきたんですっ！」

やはりそんなところか。そういうえば俺、能力手に入れたんだっけ。ついさっきの事だが……興味が無き過ぎて忘れていた。

「あなたは今、幻想郷にいます」

ふむ、成程。では今の時代は少なくとも幻想郷が出来た後ってことか……ま、大昔に行くよりはいいけどな。普通に面倒だし、やっていける自信ないし。

「ですが、幻想郷といっても、まだ、東方の主人公である、博麗霊夢さんなどが生まれるより前になっています」

ふーん。まあいいけどね、そんなの。原作キャラと関わったら俺の日常壊れそうだから関わる気ないし。もう壊れているかもしれないが。

とりあえず、こちらから干渉しなければどうともなるだろ。

「つぎに能力の説明です」

問題はこれだな。能力しだいでは物凄く有名になってしまったり、直ぐに妖怪とかに殺されたりするかもしれないしな。

俺が頼んだのは飽くまで『普通』の能力だから……大丈夫、だよな？

「あなたの能力は……」

おい、そこで溜めるって何だよ、どんな拷問だよ。生憎俺は、焦らしプレイには興味

がないんだが？こんなにも気になってるんだから、というか不安なんだから早く言っちゃってくださいよランジエさん。某クイズ番組の司会者じゃないんだからさ。普通、溜められると余計に早く聞きたくなっちゃうもの何だが？

「あなたの能力は……………」

「もういいよ早く言えよ」

そろそろ精神ももたなそうだ。俺は普通に豆腐メンタルなんでね。悪いが、突っ込ませてもらおう。

「あなたの能力は、普通にする程度の能力です!!!」

そんなドヤ顔で、発表されても、普通に反応に困る。そんな自信満々し言われても困る。なんだ俺は、どうすればいいんだ。「キャー！すっごーい！」とか言えばいいのか？「で、なんだ？普通にする程度の能力って？」

変な能力だ。何をどう、普通にするんだよ。普通の考え方なんて、地域、人によつて全然違うし。

「この能力を使うと、まわりのものをあなたの思う普通の状態にすることができるとす！」

「俺の思う普通の状態?」

なんだそれ?と思った俺は多分普通だと思うな。

「たとえばですね、病気になった時とか、普通自分の病気はすぐなおる。とか言えば、そのとおり早く早く病気が完治したりするんですっ!」

ふ〜ん……なるほどな。自分が普通だと思えばそれが普通に……つて、え?

「なあ、その能力つて、たとえば普通自分はもつと身体能力が高いと思つたら、身体能力が上がったり、普通相手の攻撃が弱いものだと思つたら、相手の攻撃が弱くなつたりするの?」

「はいっ!あなたがそれを普通だと思えば、なんでも実現しますよっ!」

ランジエがとてもいい笑顔でそう言った。笑顔は一番の化粧?前言撤回。発言によつては、笑顔は笑顔でも、悪魔の笑顔になることが判明した。

純粋な気持ちで言っているで有ろうということが、想像できるのも精神的にきつい。

で、出来ちやうんですか……ああそうですか、はいそうですか……

「チートじゃねえかああああ!!」

「ヒツ、いきなり大声だしてどうしました?」

「いや、どうしましたでもこうしましたでもねえよ!それ、チートじゃねえか!最強じゃん!普通相手が俺に負ける、とか思つたら絶対に勝てるじゃん!!!」

俺が最も恐れていたチートじゃないすか！やだー！

「はい！あなたに言われたとおり、普通の能力にしておきました！」

いやいやいやいや、ランジエさん？普通の意味が違いますから。チート能力なんか知らない、って言ったら、有り得ないチートが来ちゃいましたから！

そんな俺の考えも知らず、ランジエはとても純粹無垢な笑みをこちらに向けている

……

「ハアツ……」

「どうしました？」

「いや……なんでもない……」

もう諦めた。もういいよ、俺はこのチートで普通に生きていってやるよ！チートとしてではなく、飽くまで普通にな！

「そうですか？では、能力については終わりで、最後に名前はどうします？」

「は、名前？……今までの名前じゃ駄目なのか？」

俺は普通にそのつもりだったんだが……

「はい。転生する時は、もとのなまえは使えない決まりなんです」

「ふん。変な決まりだな、誰が決めたんだよ……そっちがそう言うなら従うが……名前、か」

当然だが、全く、全然、考えていなかった。どうするかなあ？

普通に常識的に平和的な日常を送っていくための名前……普通に日常を生きる為の……ん？そうだ。

「じゃ、日常生にちじゅうせいようで。日常を生きる、と書いて日常生だ。」

ぶつちやけ、即興で考えた。なんとなくだ。語呂も悪いし、つくづく変な名前だと思う。

だが、思いついたんだから、仕方が無い。

ランジエはふつつ、と微笑み、俺を見上げた。

「日常を生きる、ですか。あなたらしいですね」

「まあ、な」

軽く返したが、その言葉は誉められているのだろうか、貶されているのだろうか。

多分、どちらでもないのだろう。

「それじゃあ、その名前で。私はもういきます」

そう呟つぶやいた瞬間、ランジエの体が薄くなっていた。

「そっか。もう失敗しないようにしろよ」

「はい！それじゃあ、第二の人生、楽しんでください！」

「おお、また、な！」

そう言つて消えようとするランジエを見送る……つて、ちよつと待て。

「おい、ランジエ！この森はなんだ！」

まだ肝心の詳しい場所を聞いていなかった。

「ああ、ここは『魔法の森』です。しばらくいると瘴気で『死ぬ』ので気をつけて！それじゃまた！」

……行つた、か。また失敗してこの世界に新たな転生者が来るとか、勘弁だぜ？

「……つて瘴気で死ぬ!？」

なんでそんな大事なこと早く言わないの!？それじゃ、最終手段『野宿』も出来ねえじゃん！

「と、とりあえず……歩く！」

そう言つて俺は、足早に森を進んで行つた……大丈夫、じゃねえよ！

八雲流日常編

スキマさんと —出逢い—

やあ、皆！俺だぜ、日常生だぜっ！

……うん、なんかごめん。あれだ、ノリでやった……反省はしているが、後悔もしている。

いやだが、こっちは今、パニック状態なんだ。だつてさ。

「全ツ然、出られねえ……」

瘴気にやられる前に、早く森から出ようと、歩き回り、時には走り、頑張っていたのだが……

出られなかった。それどころか、助けを求めたくても、人の気配もしない……歩けど、歩けど、森ばかりである。

ここ暫く、ずっと思っている様な気がするが、何故こんなにも転生者に対して優しくないシステムなのだろうか。神様達を呼んで、小一時間講義したい。が、今は悠長に来るはずがないことを考えている場合ではない。

「ハアツ……疲れた」

どれだけ歩いただろう。10キロくらいか？ 実際測ったわけじゃないから分らないが……自慢じゃないが、俺は運動が得意ではない。本当に自慢じゃないな。だからこんなにも疲れているが、本当はまだ1キロも歩いていないのかもしれない。流石にそれは無い！と断言出来ない自分が悲しい……

『普通』この程度歩いただけじゃ疲れないものなんだろうが……」

そう呟いた、瞬間だった。

スツと、魔法でも使ったかのように体の疲れが取れた。どうなってるんだ？ ラッキーだが。

歩きながら、考えていると俺は1つの結論に辿り着いた。

「もしかして……能力の効果か？」

いや、もしかしなくてもそうなのだろう。さつき普通疲れない、とか言ったから普通の状態、つまり疲れていない状態になったって感じだろう。

そう考えると、本当にチートじゃないか……普通なら喜ぶべきなのかもしれないが、俺はどうにも喜べなかった。何故だろうか、俺にも分からん。考えるのは面倒なので止めておこう。

まあ、もらったものを有効活用しないのもあれだから、出来るだけ役立てていきたい

ものだが。

それから俺は、歩く、疲れる、能力。歩く、疲れる、能力。歩く、疲れる、能力……と繰り返して、進んでいったが……

やはりというかなんというか、森から出ることは出来なかった。

体力面をどうにかしても、瘴気が体を蝕んでいくのには変わりがない。

「ハアツ……少し座るか……」

と、近くの岩に腰を下ろす。

本当はこんなこととしていない場合ではないし。疲れは取れるのだから、ドンドン歩いていけば良いのだが……体力が回復しようが、精神は回復しない。このままだと俺の豆腐メンタルがヤヴァイ、ヤバイではなく、ヤヴァイ。

これから、どうするかなあ……そんなことを考えていると、後ろからなにかの気配を感じた気がした。

ん？なんだ？……って、もしやこれは死亡フラグ!?

夜で一人で後ろから気配……普通この状況下はどう考えても死亡フラグだよな？

よくよく考えれば、ここは東方の世界。妖怪なんて普通にいるだろう。逆によく今まで遭遇しなかったものだとも思える。

待て、落ち着け、冷静になれ。こんな時、普通はどうするべきだ？

普通Lvしかない俺の脳をフル回転させる。そりやもう、脳壊れちゃうってレベルで。ごめん嘘だ、そこまで考えてない。

考えた結果。俺が辿り着いた答えは……

「誰だー」

普通に振り向くことでした。

いやだつて俺、普通の高二ですよ？ いや、元高二の方が正しいのか？ いや、どっちでもいいが。

普通に振り向いた先には、金髪の女性が空間の裂け目のようなものから覗いていた。つてあれは……

「あら？ ごめんなさい、驚かせてしまったかしら？」

こ、こいつは確か東方キャラの八雲紫じゃねーか!!! なんているんだよ、おかしいだろ!!! …… いや取り乱した。謝罪する。

だが、実際に東方キャラを見ると、思うことがあるもんだ。

八雲紫を見て、胸でかいなあ……とか思った俺は普通だと思う。誰がなんと言おうと、一般人を通すぞ。

というか、原作キャラには関わらない、とか言ってたのに、もう関わっちゃった…… ああ、俺の平和が崩れない間に、こいつとは離れ、さっさと脱出した方がいいかもし

れん。

「どうかしたの?」

「え? ああ、いえ、何でもありません」

「そう? それならいいのだけれど……」

「それより、貴女は何者ですか?」

一 一応初対面設定だからな、普通はこういう反応だろう。いや、実際的にこつちが一方的知ってるだけであり、初対面ではあるのだが……

「人に名を聞くときは、普通自分から名乗るものじゃない?」

一 一瞬、いやお前は妖怪だろ。と、突っ込みそうになつたが、頑張つて堪えた。だが、俺は普通という言葉には弱いんだ。ここは平凡に名乗つてやろう。

「それは失礼しました。俺は日常生、と言います。以後、お見知り置きを」

俺だつて、一応初対面の相手には畏まる。というか、それが普通だろう。え、ランジエ? ああ、あの時はパニックだったし、見た目がどうにも幼かつたからな……つい、つてやつだ。

「私はこの幻想郷の管理者である、妖怪の八雲紫よ。よろしくね」

自己紹介ありがとう。知ってます。とは言えなかつた。話がややこしくなるだけである。

「これはご丁寧にもどうも」

「あまり驚かないのね？ 私は妖怪よ？」

「いえ、見た目と……気配がどうにも人間離れしていたので、そんなところだと」

いやだから既に知っていることを聞いて驚くわけないだろ。なんて台詞はやはり言えない。というか言わない。

だが、気配の事は本当だ。妖力つてやつだろうか？ 何か、怪しげで強い力が紫から漏れ出しているように感じた。

「ふふ、でも私が実は猫をかぶっていて、いきなり貴方を食べちゃうかもしれないわよ？」

「その時は、そういう運命だったんだと、普通に受け入れますよ」

「ふふ、貴方、面白いわね」

「褒め言葉だと受け取って置きます」

「ええ……そうして頂戴」

「というか、貴女は僕に危害を加える気なんてないでしょう？」

「あら？ どうしてそう思うの？」

紫は、少し嬉しそうに口端を吊り上げる。ランジエの笑顔とは違い、紫の微笑はとても胡散臭かった。

「危害を加えるだけなら、こんな雑談する必要ありませんし……それに、さつきから漏れている『力』わざと、でしよう？俺を怯ませる為かは分かりませんが。貴女ほどの妖怪が、不用意に、力を漏らすなんて考え辛いですしね」

もしかしたら俺は、試されていたのかもしれない。俺が「危害を加える気はないだろう」と質問した時、普通ならば少しくらい雰囲気や怪訝的で警戒的なものに変わるだろうが、紫は寧ろ嬉しそうだった。言い当てるのを待っていたように。

「ふふっ……貴方、本当に面白いわねえ。そして『変わってる』」

紫は扇子を口の前まで持っていていき、本当に可笑しそうに微笑んだ。

「有難うございます。ですが俺は、別にな変わってなどいけませんよ。極々普通の、人間です」

「……まあいいわ。それより私は世間話をしにきたわけじゃないのよ」

普通の世間話をしていたとは、とても言えないがな。

「さつきも言ったけど、私はここの管理者なのよ。貴方、ここに来たばかりでしょう？」
「おや、ストーキングですか？貴女のような美しい方に興味を持つていただけるとは光栄です」

「ストーキング、じゃないわよ？私が管理しているんだから、変化が起きたりしたら分かるわ。まあ貴方に興味が有るっていうのは、間違つてないけどね」

「成程、失礼しました」

まあ、良く考えれば、俺が大妖怪にストーカーされる理由なんて、どこにもない。

「それで、ここがどこかは分かってる？」

「幻想郷でしょう？」

「あら？ここにきてから私に会うまで誰とも会っていないなかったのに、どうして知っているのかしら？」

ミスった！選択肢をミスしました。やり直しを要求する！だが現実是非情である。無理なものは無理だ。

「おや、貴女と出逢ったのはここが初めての筈ですが……何故そんなことを知っているんですか？」

やっぱりストーカー？

「貴方を、つけていたからねえ」

「それは一般的にはストーキングと言うんですよ」

少し溜息を吐いた。俺は間違ったこと言っていないよな？

「だから違うわよ。それより貴方を元の世界に……」

「待ってください！この小説終わっちゃいますから！」

「何の話？」

「いえ、失礼しました。俺の脳が怪電波を受信してしまったようです
作者からのな。」

「貴方戻りたくないの？」

今更戻っても俺死んでるし、転生直後に元の世界に帰るとか聞いたことがない。

「そうですね。観光でもしようかと」

というか、戻っても行くところ無いし。

「そう、じゃあもう終わりでいいわ」

え？早くね？あつまりOK出しすぎじゃね？

「もう、宜しいんですか？」

「ええ、貴方、悪い人には見えないしね」

褒められているのだろうが、随分と適当な人、いや妖怪だ。管理者がこんなので大丈夫なのか？

まあ、俺としては長々と面倒くさい話をするよりは全然いいが。

「それよりも、貴方、住むところはあるの？」

「いいえ、これから探そうと思っていたところですが……」

その前に瘴気の事もあるし、早く森から出なければならぬわけだが。

「そう。じゃあ、私の家に来ない？」

「え?……貴女の家にも、ですか?」

「ええ、貴方気に入ったわ。それに、外は危険な妖怪も多いわよ?」

確かに、妖怪に襲われるのは勘弁だしな。それにそろそろ、瘴気で正気がなくなりそうだ。

なにより大妖怪の家。平和的な日常を送るためにはいいかもしれない。

「貴女が良いと仰るのでしたら、俺としては飛びつきたいような話ですなえ」

「交渉成立ね」

「交渉と言ってるんですか?今のは」

「それより、その敬語、止めてくれないかしら?」

「ええつと……宜しいんですか?」

「これから家にも招くつていうのに、いつまでもそんなんじや参っちゃうわ」

それは、こちらとしても有り難い。いつまでも敬語なんて普通に疲れるからな。

「じゃあよろしくな、八雲さん」

「紫」

「え?」

「紫でいいわ」

まあ、その方が呼びやすいかな。俺的には。

「じゃあ、俺の事も呼び捨てでいいよ。よろしくな紫」

「ええ、よろしくね生……というか貴方、雰囲気少し変わったわね？そつちが素なのかしら」

「ああ、こつちが素だよ」

「ふうん……」

紫は、何か考えるように顎に手を置いた。

瞬間だった――

いきなり俺の立っていた地面に穴が開いた

「うおおおおお!!?」

そう叫んで俺は眼が沢山浮いた、異様な空間に落ちていった。へえ、スキマの中ってこんな感じなのか。

ああ、俺、一日の間に二回も落ちてるってなんだよ。普通こんな体験しねえよ。

いや、転生した時点で普通じゃないんだが……

「つて暢気に考えてる場合じゃねえええ!!」

だが、俺の叫び声は、スキマの中に虚しく消えていった――

一方その頃、俺が落ちた場所では。

「ふふっ、よろしくね。生」

一人のスキマ妖怪が不敵な笑みを浮かべていたという……もう大丈夫からはかけ離れたな。

突撃!隣の八雲家!

「ん、ううん……」

何かゲームの世界に転生するとかいう意味が分からない夢を見ていた気がする。

中々に、面白い夢だったが……夢は夢だ。現実とは違う。

流石に俺は、そんなことも分からない程に、普段から夢見がちな純粋少年というわけではない。

俺は普通の少年だからな。

今日もいつもと変わらぬ日常が始まる——ことはなかった。

「目が、覚めましたか?」

「へ?」

横から女の声が聞こえた。

どういうことだ?俺の母さんと妹はこんな声ではないぞ?まさか——父さん!?……いやいやないない。うん、分かつてる。というかもし仮に父さんが俺が起きるまで

横にいて、こんな声を出していた——なんてことが発覚したら家庭崩壊つてレベルじゃない。

待てよ、じゃあ今の声は誰の声だ？

考える。考える。考える。

よし、分らん。

俺は普通の人間だぞ？

起きた直後に聞こえた、聞きなれぬ声の主が誰か？そんなことが分かるわけがない。

ならば——

普通に声が聞こえた方を向こうか。

なんて、結局どうしようもなく普通な結論に至ってしまった。これが最善の策だということは、もう随分も前に分かっていたことだと言うのに。俺は回りくどく考えるのが好きらしい。

俺は極普通に寝返りをして横を見る。

そこには、いた。

何が？何かがだ。

一瞬、理解が出来なかった。

そこにいたのが見知らぬ女だということは理解が出来た。

だが――

「なんで……尻尾!？」

その女には、尻尾があつた。

いや普通尻尾つて動物に付いてるものじゃないの?。

俺にはない。皆無い……筈。

一体、何の尻尾だ?俺の脳内バンクに検索をかける。

出てきたのは……狐、かな?

多分、狐。尻尾は。

あんれー?俺さつきまで「純粹少年じゃない」なんてこと言ってたけど、実は夢見が

ちだった?

いやいや、そんな筈はない。俺はいたって正常だ。

つまり、目に映っている光景だけが、真実だ。

「どうか、されましたか?」

「へっ!?!ああ、いや、えっと」

我ながら、どもりすぎだ。

「……どちらさまでしょうか？」

見知らぬ人とは、まず自己紹介をしよう。

普通な世界の、常識だ。

この常識が『見知らぬ狐みたいな人』にも適用されるかは分からないが。

この場合もつと気にすることがあるだろうが……うん、置いておこう。

いやいやいや、あんたらね？置いておく、諦める。そんなことも大事なんですよ？

だから俺は、面倒事はとりあえず投げ捨てていく。

「ああ、申し訳ありません。私は、八雲紫様の式神で、藍と申します。」

「藍……さん？」

「呼び捨てで構いません」

「そ、そうですか？じゃあ、藍で」

へえ、この人（みたいな）は藍というのか、覚えておこう。人の名前を覚えるとい

うことは、社会的常識だからな。

「ん？待って下さい。八雲……紫？」

「はい、私は紫様の式神です」

八雲、紫。八雲紫。ゆかりん……じゃなくて、紫？

「あ、ああ何か……思い出してきた」

八雲紫。東方Projectに登場するスキマ妖怪……俺は、そいつに出会って、それで、泊めてもらえることになって……ん、ん?

「ああ!!!」

「え?」

「……夢じゃ、ない?」

夢じゃなかった。現実だった。俺、死んでランジエに転生させてもらったんじゃない!

「貴女は、八雲藍、ですか?」

「え?あ、ああ、はい」

藍は戸惑っているようだった。当然だ。俺だつて目の前でいきなり変な男が叫んで

「……夢じゃ、ない?」なんて言っていたら、黄色い救急車を呼ぶだろう。普通の反応だ。

誰だつてそーする。

俺だつてそーする。

だが、普通夢だと思っちゃうだろ?あんなの。

「え、つてかちよつと待つて下さい、ここ八雲紫の家」

「はい」

「ああ、さいですか……」

道理で……見覚えがないと思った。俺の部屋、和室じゃないし。

いやーうつかり、うつかり。

もつと前に気がついて置くべきだったが。

「あ！待ってくれ、藍！」

「え、え、はい？」

付いて来れていないようだな。だが俺にはやるべきことがある！さつきまで使っていた敬語を忘れる程には、緊急的な。

「……八雲家なんだよな？」

「は、はい」

「俺、ここに入るの、初めてだよな？」

「えつと、はい」

「あー……ちよつともう一回させてくれないか」

「え？」

「最初の……俺が目を覚ますところから」

「ええ？」

「じゃ、俺寝るから」

「は、はあ……」

俺はもう一度布団に潜る。

察しの良い人なら、気がついていられるかもしれない。
分かるわけない? まあ、そうか。

いやなに、俺は普通にやりたいことがあったんだ。

それじゃあ……テイク2!

「ん、ううん……」

俺は目を覚ます。

体が、少し重かった。

「ここは……」

「知らない天「目が覚めましたか?」……台詞、被っちゃった」

折角、折角、人生の中で言いたい台詞ベスト5に入るかな、くらいのこの台詞を言えると思ったのに……

「ハアツ……」

「あの……」

「ん? ああ、すまん。付き合わせて」

流石に、もう一度リベンジ! なんてする気にはなれなかった。

俺は諦めが悪いが、諦めはいい方なんだ。

ま、要するに……普通なんだ。

「もう、宜しいんですか？」

「ああ、よろしいですよー。よろしすぎて困っちゃうね」

「困ってるんですか？」

「え？あ、ああ……いや別に」

しまった。藍にはどうやら、冗談が通じないらしい。

だが、そういう人を見ると、なんか冗談を言いたくなるのが、一般人の性！ロマンシング！そっちじゃない！

「なあ、藍」

「はい？」

「アルミ缶の上にあるミカン!!!」

「………？」

なん……だと……

そ、そんな、俺の渾身のギャグにピクリともしないなんて……

「あの、申し訳ありません、『アルミ缶』とは、なんででしょうか？」

「へ？」

へ?!

「あ、ああ、そつか、アルミ缶知らないか……」

そ、そうか!アルミ缶が知らないんじゃない、仕方がないよな!

「それじゃ、次こそ!」

「は、はい……」

「猫がねころぶ!」

「……?」

「同じ反応!」

そ、そんな……

俺の渾身の一撃が、効かない!?

「あの、どういう意味でしょう?」

「ガハッ!」

痛恨の一撃!生に9999のダメージ!

「クッ、やるな……藍」

「え？」

「次だ！……お金はおつかねえ！」

「お金がないと生きていけませんか？」

「ある日のアヒル！」

「この辺りにアヒルはいませんが……」

「惰性はダセー！」

「働いているほうがいいですね」

「イルカは要るか？」

「要りません」

「猿が去る！」

「さようなら」

「専用にはせんよ！」

「私のことは、遊びだったんですね！」

「苦心の屈伸！」

「運動しないから……」

「椅子はいいです！」

「私は座布団派です」

「漫画は我慢!」

「漫画の代わりにこの小説を読みましょう!」

「停電してんでえ!」

「ブレーカーが落ちました」

「出口で愚痴る!」

「迷惑ってレベルじゃないですね」

「コンニャクは今夜食う!」

「コンニャクご飯、コンニャクサラダ、コンニャクの炒め物 e t c . . .」

「アラスカを荒らすか!」

「アラスカ避難警報です!」

「ハリウツドで針売るど!」

「どなたか針、針は要りませんか!」

「カレーは辛え!」

「水!水プリーズ!」

「象だぞう!」

「狐だぞー」

「妖怪に用かい!」

「はい、何の御用でしょう」

*

「お隣、に、お泊……り……は、はあつ、はあつ……」

全然、効かない……

一体どれだけポーカーフェイスなんだ。おかしいだろ。

普通の人間の面白さは、式神には通じないのか？

「んう……ど、どうすれば……このままじゃショックで失踪しそう、んむう……仏像をぶつぞう！いや駄目だ。クツ、どうすれば藍を笑わせることが出来るんだ!!!」

俺が1人ブツブツと念仏の様にギャグを考えていると突然、藍が下を向いた。

「……藍？」

「ふふっ、ふふふ……」

藍は、笑っていた。

だが何故だ？さつきまで鉄壁の表情だった藍が……俺、なんもしてないぞ？

「す、すいません。日常さんが必死になってるのが、面白くて……」

「そんなのが、か?」

でも、藍は笑った。俺は何かしたつもりはないが。

「じゃ、俺の勝ちだな!」

「これ、勝負だったんですか?」

「……さあ?」

「ふつ、ふふ……アハハハハ!」

「ハハ、随分と大声で笑ってくれるな……」

何故皆、俺の意図しないことで笑うんだ? 不思議で仕方がない。

「も、申し訳ありません」

「いや、いいよ。楽でいい。話し方も、無理に敬語じゃなくてもいいぞ?」

「ですが、日常さんは大事なお客様と……」

「俺は普通の人間だ。大したもんじゃないよ」

「はあ……」

「それに……」

「それに?」

「俺はここに泊まるわけだ。そこで一緒にいる奴から、敬語で話されるとかどんな拷問だよ」

「拷問？」

「だって、普通じゃないだろ？そういう堅苦しいの」

「普通、ですか？」

そう、普通。俺が、最も好きな言葉。

「俺は普通に平凡に常識的に一般的に平和的な日常を送ることを信条としてるんだよ」

「ふふっ、そうなんですか」

「笑わないでくれよ。結構真面目に言ってるんだ。後、敬語じゃなくていいって」

「ああ、申し訳、いや……すまない」

結構、凛々しい喋り方だった。

八雲藍ってこんな喋り方なのか。

「どうした？」

「いや、なんでもない」

「そうか……じゃあ、改めてよろしく、生」

「よろしく、藍」

絆っほいものが、出来たのかもしれない。

「なあ、そういえば……紫は、どこだ？」

「ん？ああ紫様なら違う部屋だが……」

「そうか、じゃあ案内してくれよ、挨拶する」

「分かった、こつちだ」

「ああ……そうだ、藍」

「ん？」

「喋り方、そつちの方がいいと思うぞ？」

仕上げに格好つけとこう。

*

「——あら？生、気がついたのね」

「お蔭様でな」

「いや、いきなり気を失うんだもの、死んだかと思ったわよ」

「死んでないが……そうか、心配を……ん？」

待てよ？俺は何故気絶してたんだっけ？

確か、紫と出会って、泊めて貰うことになって、家に連れて……ん？記憶が曖昧だ。

「だって貴方、スキマに落ちた程度で気を失うんだから！」

瞬間。俺は固まった。

否——幻想郷、全ての時が止まったようだった。

そんな能力を持つ奴がいるのだろうか？

それは凄く気になるが、今はその話ではない。

思い出した。全てだ。

そう、俺はこいつに……紫に突然、スキマに落とされたのだ。

非常識にも、非凡にも、俺は、普通から逸脱した行為をされた。

落とされる。

人間のすることじゃねえ。

いや、妖怪か。

妖怪は皆、こんななのか？

何か、理不尽なことへの怒りが込み上げてきた。

この怒り、どうすればいいんだ。

よし、こういう時は普通に——

「なあ、紫。突然落とすなんて酷くないか？」

本人に、言ってる。

「ん〜そうかしら?」

のらりくらり、とかわすつもりだな。だが、甘い。

「いや、酷い」

「そんなこと」「お仕置きを受けてもらいたいくらいだな」……お仕置き?へえ……どんな?
?」

食いついた。

針に食いついた魚は逃がしたくない。いや、逃がさない。

それが、普通だ。

「そうだな……『普通』自分がしたことをそのまま返されるだろう?」

「そ、え?キ、キヤアアアアアアアア
!!!!」

落ちた。

八雲紫は、落ちた。

どこに?

自分の下に突如発生した、スキマにだ。

何かしたら、返される。

これぞ——普通。

「ゆ、紫様!?!生、今のは」

「藍」

「え?」

「これは、俺の能力だ」

「や、やりすぎでは」

「藍……」

「え?」

「これは、自業自得だ」

俺はそう言っつて、ニヤリ、と笑った。

分。さあ、今日から八雲家での楽しい楽しい新生活だ。ん?ああ紫なら大丈夫だろ……多

こんな八雲家の日常、どうでしょう？

「生、今日の御夕食は何かしら？」

「今日はカレーを作ろうと思ってる。晩飯の定番だろ？」

「カレー？なあ、カレーとはなんだ？」

「ああ……まあ食べれば分かる。ちやつちやと作るからそれまで待つてくれ」

「分かったわ。楽しみにしてるわね♪」

「じゃあ、私は掃除の方をしておくよ。紫様、部屋まで」

「おう、そんじゃ後でな」

八雲家に住み始めてから約一週間が経った。

今ではもう紫とも藍とも、随分と打ち解けたものだ。

……まあ、紫は最初から異様に馴れ馴れしかったような気もするが……

それは置いといて、いやむしろもう思い出さないようにどこかに捨てる勢いで。

ここに住み始めて直ぐ、「居候なんだからなにか家事でもやらせてくれ」と申し込んで、俺はとりあえず料理係に任命された。

任命された——のだが、俺はいざキッチンに行つて絶句した。

ここは幻想郷。炊飯器もオーブンも無く、全て歴史の教科書にでも出てきそうな釜戸なんかしか無かった。

当然、俺はこんなもので料理をしたことは無い。

だが、自分からやると言ったのだから何とかしないとイケない。というか、何とか出来なければ滅茶苦茶格好悪い。

といつても、どうしようも出来ない。悲しきかな、それが現実である。

どこをどう見ても、使い方など分かるはずも無く、そもそも考えることもそんなになかった。無駄だと思ったから。

恥を忍んで、藍とかに聞くか？ いや、だがそれは……

そんなことを考え、無駄すぎる時間を消費しながらなんとなく、

『普通』、炊飯器くらいあるだろ……

と半分冗談でぼやくと、俺の目の前に炊飯器が出てきた。

……え？ 一瞬状況が理解できなかった。だが少しして、一つの結論に辿りつく。その間、32秒。

「あ、能力が発動したのか！」

俺の能力は『普通にする程度の能力』世界を自分の思う普通、常識に作り変える能力だ。

そうか、今の眩きが現実になったんだ。というか、この能力無意識で発動することが多い気がする。便利のような不便なような……微妙な感じだ。

本当にチートだなあ、とりあえずランジエに感謝して置こう。なんて思いながら俺はそこにあつた食材で料理をはじめた。

その日、得意料理であるハンバーグを作つて出したら二人（妖怪とその式神だが）はハンバーグを知らなかったらしく、食べたらとても美味しいと言われた。

それから、俺は美味しい料理を知っているということ、正式にちゃんとした料理係に任命された。

と、回想終えて現在――

「ふんふん♪」

俺は鼻唄を奏でながら、サクサクとカレーを作つていく。

転生前でも、家の料理を担当していたからこのぐらいは余裕だ。

いや、カレーぐらいなら普通に誰でも作れるが。

「よしっ！そろそろ完成だな」

キッチンにはカレーのいい匂いがただよっていた。

スパイスの香りとは、実に空腹を増加させるものだ。俺は思わず、唾を飲み込んだ。

「おお、いい香りだ」

突然の声に振り返ると、そこには藍が笑顔で立っていた。

「よ、藍、掃除は終わったのか？」

「まあね。それにしてもおなかが空いてきたな」

「後少しだから、待っててくれ」

そう言つて、俺はカレーをよそつて口に入れる。

「よし！いい味だ！」

「あら、いい香り。もう夕食はできたの？」

そこには、カレーの匂いに釣られてきたのか、紫が居た。

「ああ、完成だ。二人とも皿を持ってこい」

二人は頷くと自分用の皿を持って俺のもとへとやってくる。

その皿にカレーを装ってやると、二人は目を輝かせていた。

子供みたいだなあ、そんな風に思った。でも実際は有り得ないくらいに俺の方が年下
なんだけだな。

俺はそんな二人を見て、苦笑しながら自分の分をよそつて椅子に座る。

「お前ら、ちゃんと手は洗ったか？」

「洗った」

「失礼ね、ちゃんと洗ったわよ」

「OK、じゃ、手を合わせて」

三人同時に手を合わせる。パチン、といい音がなった。

「「いただきます」」

その言葉と、ほぼ同時に皆が食べ始める。お腹が空いていたんだろう。さつきも言ったが、スパイスの匂いを空腹を増加させるしな。

カレーを一口頬張る。

おお、自分で言うのもなんだが、結構うまい。

色々なスパイスを使ったのが良かったのだろう。心地よいとも言える絶妙の辛さが口の中に広がる。

「どうだ？二人とも」

どうだ？というのは味の感想だ。二人は始めてのカレーらしいから、口に合うといいのだが……

二人は俯いていた、口に合わなかったか……

そう思った瞬間、二人がハツ、と顔を上げた。

「うತ್ತುまい……！芳醇な香りが口の中に入れた途端に広がってくる」

「スパイスの香りか？」

「ウンまあ〜いっ！こっこれは〜っ！この味わあ〜っ！ハーモニーっつーんですかあ

く、味の調和つつーんですか〜っ！」

「で、結局？」

「美味しい!!!」

「……そりゃ、良かったよ」

確かにカレーは美味しかった、が。こいつらと食べたからかもつと美味しく感じた……誰かとの食事は良いものだ。疲れたけど。物凄く疲れたけど。

*

「平和だなあ〜……」

食事も終わり、縁側で夜空を眺めながら、のんびりとお茶を啜る。

東方の世界に行く、って時はどうなるかと思つたが、随分と平和的な日常を過ごしている。

「そうねえ。平和だわ……でも、その感じちよつとおじさんはいわよ?」

横にいる紫がいきなり話しかけてきた。ってか、一人でお茶飲んでたはずなのにいつのまに隣にいたんだ? 全く気づかなかつた。

「いつから居たんだお前は。ってか俺をおじさんというならまず自分を見な」何か言っ

た？」「いや何も言ってます。すいません」

物凄いきれ気が隣から伝わってきた。うわあ、凄く、凄く笑顔だよ紫さん。笑顔が一番怖いみたいなきことを聞いたことがあるけど本当だったんだな……

「それにしても、少し平和すぎてつまらないわ」

「いいじゃないか。平和な日常ってものは何よりもいいものだぞ？」

特に俺はそう思うね。一度死んだ身だしな。

「貴方はそれがいいでしょうけど、刺激が全く無いのもつまらないものよ？」

刺激、ねえ……確かに刺激を求めることは人として普通のことだろう。俺だって少しぐらいいは変わったことが有った方がいい。

「そうか、刺激かあ……」

少しでもいい、なんかいい感じのことは無いだろうか？

そうやって考えていると、掃除が終わったのか藍が縁側にやってくる。

「おお、藍いいところにきてくれた」

「何やってるんですか？」

「まあ、座りなさいよ藍」

「あ、はい。それじゃあ失礼します」

と、藍が俺の横に座る。それによって俺は必然的に両手に花状態になってしまう。

「こんな美少女二人に挟まれて嬉しいかしら？生」

「お前、美少女って、少女とか「何かしら？」イエ、トテモウレシイデス」

「片言になってるぞ……」

藍が呆れ顔でこちらを見てくる。だって！殺気ヤバイんですよ！俺はまだこの年で死にたくない！ってか、せつかく転生したんだし！

「そ、それよりだ、藍。突然だが、何か刺激的なこととか、暇じゃなくなることは無いかな？」

「ん？刺激的で暇潰しになること……ううん……何か遊び道具でも用意する？」

「遊び道具なんてあったかしら？」

「それは……無いですね」

「いや、無いのかよ」

ハアツ、と溜息を吐く。遊び道具……前の世界では暇だったらゲームとかがあったんだが……こっちはそんなもの無いからなあ……

「ん？あ、そうだ！」

俺は一つの選択肢を思いつく。これが漫画だったら俺の頭の上にはピコーン！と『！』マークが出ていることだろうと思う。

「えっと、『普通』一家庭に一つくらいゲーム機とか、有るんじゃないか」

そう言うと、突然出現するゲーム機。機種はP〇2だ。うん、これぞチートの有効活用。物がいきなり出現するのは普通なのか？なんてのは無粋な突っ込みだ。

「凄いわね……で、これどうやってやるの？」

「ん、まずはテレビを……いやテレビねーじゃん！」

「どうするのよ……」

「ううむ……じゃ、もう一回。今度は携帯ゲーム機でも……」

そう思い、さっきの台詞をもう一度言うが……

「あれ？出ない」

どういふことだ？

「生、さっき一家庭に一つって言ってたじゃないか」

「え!?だからなの？もうP〇2が有るから、出してくれないってことか!？」

何このチート！融通が利かないんですけど！

「どうするのよ!」

紫はさつきと同じ台詞を、今度は呆れ気味ではなく、怒り気味に言う。

「ううー……そ、そうだ!『普通』一家庭にゲームくらい有るだろ!」

そう叫ぶと、目の前にカードの束が出現した。

「……トランプ?」

「あれ、知ってるのか？藍」

「ああ、まあ見たことくらいはある」

「これは意外。トランプは有るのか、幻想郷。」

「でも、なんで出てきたの？」

紫が首を傾げる。まあ、これは俺も賭けだった。

「さつきはゲーム『機』って言ったからな。電子ゲームじゃなければ出せるだろうと」

「成程、ね……だからトランプ。ま、そんなのはいいわ。早くやりましょう」

「OK、まずは、紫抜き、ならぬババ抜きでも——」

*

「どうして勝てないんだ！」

あれから一時間。

勝てない。

藍にも、紫にも。

「なんかイカサマとかしてるだろ、おい！」

「あら？してないわよお？ねえ、藍」

「はい」

二人は飽くまでそれ以上を口にしない。

「つ、次だ！普通に初めてやる奴に負けるとか、プライドが許さん！」

「いいわよ、やりましょうか」

「手加減無用だ！いくぞ！」

ババ抜き神経衰弱七並ベポーカーブラックジャックダウト大富豪etc…

*

鳥の鳴き声が聞こえる。

朝日が異様に眩しかった。

先程まで悪魔のように見えていた二人の顔も、眠っていると、天使のように見える。

あれから続けた結果——

241敗2勝。

俺はもう、暫くトランプはしないと誓った——大丈夫な、わけがなかった。

偶には世間話でも。

「いい、天気だな……」

縁側でお茶を啜りながら呟く。

とても、晴れ晴れとした空だったのだ。

そんな空を見ていると、無意識に、綺麗だと思ってしまう。

「隣、いいか？」

突然、背後から声がした。

落ち着きの有る、綺麗な声。

「おお、大歓迎だ」

「有難う」

藍は、少し頭を下げ、俺の直ぐ横に腰掛ける。

「……そういや、紫は？」

「朝早くに出かけた」

朝早くから、ねえ……

変な事してなければいいが。

まあ、紫の行動に対し、一々心配などしていたら、精神が磨り減るだけだ。それは、この一週間程の間に、痛いほど思い知らされている。

元の世界で初めて紫を見た時は、もつと大人びているキャラだと思っただが……実際、大人びた、悟ったような時もある、見た目にも、実年齢にも反した、子供っぽい時もある。

要するに、面倒な奴だ。

もつと普通に平凡に、俺の様になつてくれないかねえ。

……無理だな。紫と俺の知る常識が相容れる様には、とても思えん。

「平和つて、いいよな……」

「そう、だな」

藍のことを、元の世界で初めて見た時は、従者、厳密には式神か。そんな設定や、狐という動物のイメージから、小動物系の愛らしいキャラだと思っただが、実際は、凛々しく、頼もしい奴だった。

だが、一つだけ俺の予想通り。ピツタリだったところは、可愛らしい、というところだろうか。

そんなことを考えながら、横目で藍を見る。妙にお茶を飲む姿が合っていた。

だが、「ふう……」と、息を漏らす姿はやはり、女の子らしいものに見えた。

そこでふと、思う。

俺って、東方のこと何にも知らなかったんだな……

ランジェから聞いた時は、知っている作品だと、安堵したものが……

「どうした？」

俺が少し真剣な顔付きになったのを感じたのだろうか。藍が、少し心配げに、不思議そうに訊ねてくる。

「いや……やっぱり、平和っていいなーと思ってさ」

嘘ではない。素直な気持ちだ。

平和的な日常——いつもどこかには有るけど、中々、感じられるものではない。

それが、普通ってやつだ。

「……そうか」

それ以上、藍が聞いてくることはなかった。

それは、俺にとってはとても有り難いことだった。

「なあ、何かしないか？」

俺はタイミングを見計らって、そんなことを言う。

「トランプでもするか？」

藍は意地の悪い顔で、微笑む。からかっているのだろう。

「人のトラウマを……」

不満な顔で返すと「ははっ」と笑われた。トラウマになっている、というのは本当だが……なんとなく、釣られて笑みを零す。

藍が笑うと、変な形の帽子が揺れた。

つくづく思っていたのだが、なんであんな変な形なのだろう。

東方キャラの帽子はどの画像なんかで見ても変な帽子を被っているやつが多かった気がする。

少し気になるが……「なんでその帽子変な形なの？」なんて非常識なことを訊ねるわけにもいかないので、胸の中に潜めて置く事にしよう。

疑問を振り払うため、帽子から視線を外して下を見ると、こんどは揺れる尻尾が目に入った。

「……………くっ」

生唾を、飲み込む。

「どうした？生」

そんな俺に、藍が怪訝そうな瞳でこちらを見つめた。

「いや……怒らないか？」

「言わないと怒る」

「なんとも、意地悪な返し方だ。」

俺は少し考える素振りした後、観念したように項垂れ、口を開ける。

「その……お前の、藍の、尻尾さあ……」

「尻尾がどうかしたのか？」

藍は不思議そうに自分の尻尾に目を向ける。が、特に異常はない。

「その、尻尾を、さあ……」

「尻尾を？」

「尻尾を——もふもふさせてくれないか！」

「……は？」

藍が呆けたような声を出す。

「いやだから！もふもふさせてくれないか！その柔らかそうな、ふわふわな尻尾を！前々からずっと思っていたことだ。」

「この度、思い切ってしまった。」

「いや、だがそれは……」

「頼む！一生のお願いだ！」

俺は土下座をして頼み込む。

「一生のお願い安すぎるだろ！絶対こんなところで使うものではない！」

「お願いします、藍様！」

「プライドというものはないのか!？」

「無い!!!」

「即答?!酷すぎる!」

そのくらいに触りたいんだ、撫でたいんだ、もふりたいんだよ!

「お願いだ!この通り!」

俺が何度も頭を下げていると、今度は藍が、諦めたように項垂れた。

「……顔を上げろ」

「もふらせてくれるまで上げない!」

「その……やらせてやるから、上げろと言ってるんだ」

「本当ですか!藍様!」

「その話し方止めろ、気持ち悪い」

罵られてしまった。生憎俺にマゾヒストの気はないので、言われたままに、止める事

にしよう。

「あ、あんまり痛くするなよ?」

「勿論！丁寧に扱う！扱っちゃう！そ、それじゃいただきます！」
パンツ、と手を合わせ感謝の気持ちを表す。

藍は頬を朱に染めながら、尻尾をこちらに向ける。

俺はまず、優しく尻尾を撫でる。

「ひ、ひうつ」

「あ、悪い。強いかな？」

「い、いや。ちよつと緊張してしまっただけだ……別に、もつと強くても大丈夫だ」

「そ、そうか……じゃ、失礼して……」

今度は根元の方から、ゆっくりと撫でていく。

「ひゅつ、ひつ……ひゃあん！」

藍がそんな声を上げると、なんとなく、気持ちが昂った。

少し調子に乗って、力を込める。

「きやつ、ちよ、ちよつと生……」

「い、いめん」

藍の声を聞き、また力を弱め、撫でていく。

根元から、先端まで、しっかりと撫で回す。

「じゃ、じゃあ……揉むぞ？もふるぞ？」

「あ、ああ……来い！」

もふっ、とても、柔らかかった。

その柔らかさは、まるで、親の母乳を飲んでいる時の赤ん坊の様な感覚にさせた。その温かさは、まるで、母親のお腹の中にいるような、母性を、愛を感じさせた。その感覚は、病み付きになるもので……俺はつつい、力を強めてしまふ。

「しよ、生……きやつ、つ、強いつて……はあん！」

俺は両手を使い、優しくもふもふしていく。

藍の声を、心地よいBGMの様に思い、余計にヒートアップしていくのを感じる。「うっ、ひゅうん！きやつ、あつ、あつ」

藍はもう、言葉を返すことも、きつそうなくらいになつていた。

だが、この機会に楽しまなければ、次がいつになるかは分からない。

一生のお願いに、土下座まで使ったんだ。とことんやってやる。

「ああつ、生、生！強い、強い」

「両手をつ、使つてるからな！」

何故かこちららも、息が荒くなり、体が熱くなる。

「あつ、あつ生！生！」

「ど、どんだんいくぞ！藍！」

「ひゃあん！そんなに強くしたら、む、無理！」
息を荒げる。

手の力を強くし、全てを感じる為にスパートをかける。

「い、いくぞ、藍！」

「あ、あつ！む、無理！ひゃうん！あ、あああああん!!!」

藍の叫びが、八雲家に響いた。

*

「すいませんでしたー!!!」

本日二度目の、土下座。

俺の前では、藍が仁王立ちしている。

「た、確かに……私もいいと言ったが」

「はい」

「だが、限度と、遠慮つてもものが有る」

「仰るとおりでございます」

「強い、とも言ったが、止めなかったよな？」

「反論の余地もございません」

説教。

とことん説教。

確かに、あれはやりすぎた……反省しよう。

自分でも、普通からは逸脱した行為だと思う。

「分かったか？」

「はい」

聞いてなかったけど。

「反省は？」

「そりやもう物凄くしてます」

「……後悔は」

「していない」

「ハアツ……とても素直だな」

だって、もふもふ出来たし、反省はしても後悔する要素なんてミクロンもない。

話が一通り終了し、また俺達は隣通しに座る。

だが、先程までとは違い、二人の間に微妙に気まずい雰囲気が出る。

沈黙が俺と藍を蝕む。

それを破ったのは、藍だった。

「話、でもしようか」

「そ、そうだな」

その言葉は凄く曖昧なもので、何を話していいものか迷ってしまう。

「なあ……?」

「どうした、藍?」

「今度は私が、聞いていいか?」

「お、おう! どんどん聞いてくれ! お詫びってわけじゃないが、俺に出来ることなら何でもするし!」

その言葉を聞いて、藍はふつつ、と微笑む。

そして、また少し沈黙の時間が流れ——タイミングを見計らい、藍がこちらを見る。

「なんだ?」

「生って、外人なんだよね」

「んーまあ、少し違うけど……そんなところだ」

「外って、どんな感じ?」

「どんな感じ、か……」

これはまた、曖昧で、難しい質問が来たもんだ。藍なりに空気を破ろうとしてくれた

んだらうが、考えれば考える程、難しい。

俺は少し考えるように、顎に手を置く。

「……普通、かな」

「……その言葉、好きだなあ」

「ああ、大好きだ」

「でも、普通って、どういう意味だ？」

「だから、なんていうか普通なんだよ。弱い人もいれば、強い人もいる。金持ちがいれば、貧乏な人もいる。平和な所があれば、殺伐とした所もある。そんな感じ」

藍は、良く分からない。といった表情をする。そりやそうだ。俺だって分からん。普通なんて基準や、思い込みや、設定でしかない。俺は自分が普通だと思いついて、信じているが、別に普通なわけではないだろう。俺が勝手に、そう言っているんだ。普通なんてそんなものだ。

「……楽しいところか？」

藍は突然聞いてくる。やっと出てきた言葉がそれ、か。だが、大事なこともある。

「賑やかな、ところかな？」

楽しいとは、言えなかった。

楽しいと断言出来ないところが、俺の弱いところなんだろう。

外……いや、元の世界は争いが絶えない。

平和も絶えない。笑顔が絶えないが、涙も——絶えない。

それを考えると、幻想郷の方がいいのかも、なんて考えて、直ぐに浅はかな考えだと否定する。

「外は……人間だけなんだろう？」

「動物もいるが……人間と会話が成立するのは人間だけだな」

「それは……平和なのか？」

「知らん」

「知らん、か」

知るわけない。

幻想郷で、妖怪が人間一人喰らっている間に——

あっちでは、人間が人間一人殺しているんだ。

馬鹿みたいだな、と思った。

「馬鹿みたいに——」

「馬鹿みたいに、普通ね」

背後からの声。

誰と言わずも分かるだろう。この全てを見下し、悟り、愛したような——胡散臭い声。

「紫……帰ったのか」

「少し前にね」

「どこからだ？」

「貴方が藍の尻尾を触らせてくれと土下座してるところから」

ほぼ、最初からじゃねえか。

「駄目よお？人の式神に——私の藍に手を出しちゃ」

紫は悪戯つぽく微笑むと、藍の隣に座り、尻尾を撫でる。

「ひうつ！ゆ、紫様？」

「あら？私には触らせてくれないの？」

わざとらしく、哀しげな雰囲気を出す紫。

藍は「い、いえ」と言つて尻尾を差し出す。

紫はとても嬉しそうに、尻尾を揉んでいた。

微笑ましいな、と思つた。

とてもとても。

平和だと感じた。

少なくとも今は。

少なくとも俺は。

「馬鹿みたいに——普通だねえ」

そう呟いて、とても晴れ晴れとした空を見上げた。

今日も幻想郷は異常だらけに異常なしの様だ。大丈夫では——ないんだろうが。

日常……だよね?そうだよね?

「刺激が——足りないわ」

昼食を食べ終わり、皿洗いをしている時の事だった。

「……またか」

俺は皿を洗う手を止めずに、足をバタバタと子供の様に揺らす紫を横目で一瞥した。

「トランプはやらないぞ」

紫が言い出す前に釘を刺す。

高がトランプに負けた程度で、何をいつまでも引き摺っているのだと思うかもしれない。というか、思うだろう。

だが、考えてみてくれ。

初めてトランプをやる相手に、トランプは慣れている自分が相手をし、241回も敗北した。という事実が、どれだけ重いことかということ。

……な、悔しいだろ?リベンジする気も失せるくらいに。

「トランプはもう飽きたわ」

ああそうかい。

「刺激、ねえ……」

洗い終わった皿をしまい、手をゆっくりと拭いてから、紫の方へ向きなおす。

因みに、藍は今ここにはいない。今の時間だったら、この家の掃除をしている頃だろう。

「どっか行つて来れば？」

息を漏らしながら、紫の前に座り提案する。

「どこへ？」

「知るか」

考える気もない。何故他人が刺激を求める為に出かける場所を、俺が決めなくてはならぬのだ。

「無責任ねえ」

「無責任だろうが無根拠だろうが構わん」

というか、俺は別に悪くないよな？

「生の能力で何か出来ないの？」

無茶言つてんじゃないねえ。俺の能力は暇潰し用じゃないんだ。

「普通に生きるのに、普通以外いらんんだよ」

「でも、刺激が何も無いところで、ただ平凡に生きるなんて、虚しいだけでしょ？」

中々に、真理を突いたことを言ってきたやがる。成程、これが年の功ってやつか。

「いいんだよ、普通なら普通で。普通という刺激が有るだろう?」

平凡は、退屈ではない。

日常は、無ではない。

だからこそ、普通が一番なんだ。

「つまらないわねえ……」

「畳の目でも数えてろ」

冗談の様にそう言うと、紫は本当に数え始める。

俺は驚き半分呆れ半分といった表情になり、ポーツ、と空を見上げる。

「飽きたわ」

「いくつまで数えた?」

「16」

「どういうことだ」

飽き性でも面倒臭がりでも、もうちよつと数えるぞ。まあ、数えないのが一番普通なんだが。

「他は?」

「他?……素数でも数えてろ」

ぶつきらぼうにそう言つて、俺はお茶を淹れに行く。

少して、渋いお茶を片手に戻つてくると同時に、紫が俺を睨む。

「飽きたわ」

「……いくつまで数えた？」

「13」

「6桁目じゃねえか」

もつと頑張れよ大妖怪。

「他には？」

「もう無い、勝手にしてくれ」

俺は、不満そうな紫の視線を無視して座り、お茶を啜る。

何故、平和な日常の中、空を見ながら飲むお茶というのは、ここまで美味しく感じるのだろうか？

恐らく、雰囲氣的なものだろう。祭りで食べるわたがしや、海の家焼きそばと同じである。

お茶の湯気をまたボーツ、と眺めていると、黙っていた紫が唐突に口を開ける。

「刺激が足りないわ」

「……」

無視。

こういう面倒な奴は無視に限る。

「生、おっさん臭いわよ?」

「お前には言われ——何でもありません」

少女的な見た目に反した大妖怪の怖すぎる笑みに、俺は言葉を改める。

「そんなに、刺激が欲しいのか?」

「欲しいんじゃないの。求めてるのよ」

あつそ。

「あー、霊夢のところにも行ったらどうだ?」

投げやりに、紫の友人であろう人物の名を上げる。

「れいむ……?」

だが、紫はまるでそんな名は初めて聞いた、とでもいうように首を傾げる。

あ、やば!霊夢はまだいないんだったか!

大分前、ランジエに聞いた言葉を思い出し、自分の失言を後悔する。

「ねえ生。霊夢って「何でも無い。怪電波を拾っただけだ。気にするな」……そう?」

あ、危なかった……これからは、軽率な発言は控えなければいけないな。まあ、実際問題バレたらどうなる、とかは無いと思うが。

「まあ、生が怪電波を拾うのはいつものことね」

「おい待て。お前の中で俺はどんなキャラ設定にされているんだ？」

俺がジト目で紫を睨む。紫はホホ、と優雅に笑い扇子で口元を隠す。クソツ……かわされた。

「……ハアツ」

俺は諦めたように溜息を吐くと、いつの間にか空になった湯呑を卓袱台に置き、立ち上がる。

「生？」

紫が怪訝そうな瞳で俺を見る。

「じゃ、何か——するか！」

*

ここからは、天の声がお届けします

「と、いう訳で」

辺り一面、鬱蒼と生い茂るここは——『魔法の森』である。

そこに生達はいた。

「どういう訳?」

紫の無粋な突っ込みを無視して、生は手を広げる。

「第一回!チキチキきのこ狩り大会ー!!」

ドンドンパフパフ、なんて陽気な効果音が欲しくなる勢いで叫ぶ。

「きのこ狩り?」

「ルールは簡単!俺と紫で別々に、今夜の晩飯のおかず『きのこ』を採るだけ!採ったきのこ一つ、一ポイント!実際食べてみて美味しかったら、更にプラスポイント!毒きのこを採ってきてしまった場合はマイナスポイントだー!!!」

「美味しかったらって……誰がどうやって判断するのよ」

まあ、当然の疑問だ。だが、生は怪しくニヤリ、と微笑を浮べる。こいつ、絶対普通じゃない。

「そこは、きのこ評論家として名高い、私八雲藍が勤めさせていただきます!」

どこからともなく現れた藍が手を上げ説明する。

「いつから私の式神はきのこ評論家になったの!？」

「いやあ、藍さん。今日は忙しい中、有難うございます!」

「いえいえ、そこにきのこが有れば——どこへでも、ね」

「なんか良く分からないけど格好良いわ、藍！」

「美味しいきのこ、バンバン採ってきますので！」

「実はそんなにきのこ好きじゃない」

「きこの評論家として最悪のカミングアウトしてるわよ!? さっきの発言台無し！」

「成程、『きのこ』とは、愛』ですか！ 深いお言葉、有難うございます！」

「ええ!? そんなこと微塵も言っただけ!?」

「紫さんも、やる気まんまんすけ、ってことで！」

「今の発言のどこからやる気を感じ取ったの!? 後、ギャグが異様に寒いわ！」

「ああ……? ギャグが寒い、だと?」

「そこに怒るの!? 絶対今のスルーするところ！」

「……ハアツ。全く、我儘も程々にしてくださいよ、紫さん……貴女も、大人でしょう?」

「私の今までの突っ込みに、そこまで言われる程の悪いところ有ったかしら!?」

「誰が、平成の親父ギャグ製造マシーンだ!!」

「そんなこと言っただけ!」

「有難うございます」

「え!? 褒め言葉として捉えてたの? 『平成の親父ギャグ製造マシーン』、貴方にとつての

褒め言葉なの!」

「焼肉食べたい」

「ちよつと!きのこ評論家のやる気が皆無なんだけど!というか、せめてきのこ食べた
いって言いなさいよ!」

「いや、きのこ焼肉だったら……ねえ?」

「『ねえ?』じゃないでしょ!というか藍?キャラが完全崩壊してるけど!」

「『きのこ』とは、人生』ですか。深い言葉です」

「だから言っただいよ!」

「頑張ってください」

「もう評論家、完全に投げやり状態!」

「ではでは、位置について、よーい——」

「え、始めるの?こんなグダグダ状態で?」

「よーい——きのこ!!!」

「語呂悪っ!」

かくして、第一回チキチキきのこ狩り大会は、幕を開けたのだった。

「ああ、もういいわ!とりあえずきのこを……」

紫は辺りを見回す。すると、視界に入ったのは見るからに毒々しい、色鮮やかなきのこ。
い。

「あ、ラッキー！綺麗なきのこ発見！さっそく持つていきましよう！」

だが、常識が乏しい紫は、まるで気にせずきのこを採取。

『色鮮やかなきのこ』を手に入れた！

どこかで、ファンファーレが鳴った気がした。

「ん？あれは……」

次に紫が見つけたのは、茶色い傘のきのこ——松茸だった。

貴重な松茸を、こんなに簡単に見つけられたのは、紫の大妖怪としての、桁外れの運の良さだろう。

紫は、松茸を手に取り、暫し凝視してから……

「あんまり美味しそうじゃないわね」

ポイツ、と投げ捨ててしまった。おいおい。もったいないってレベルじゃねーぞ！

「おい紫、それ松茸じゃないか？」

そこにやってきたのは、自称常識的な少年。日常生だった。

「そうだ、読者も忘れていくかも知れないが、これは生と紫の勝負なのだ。当然、生もきのこ狩りをしている。」

「まつ……たけ?」

「超貴重なきのこ。人によるけど、物凄く旨い」

「本当!?じゃ、採取しとかなきゃ!」

紫は掌を返したようにバツ、と先程自らが投げ捨てたきのこを拾い、頬ずりをする。正直気持ち悪い。

「後、お前がさつき採った色鮮やかなきのこ、あれ毒きのこだぞ?」

生が紫の籠の中に有る禍々しいきのこを指差しながら言う。紫は慌ててそれを捨てる。勝負といっても、どうやら生に勝つ気は無いようだ。

「ふふつ、甘いわね生!敵に情けをかけるなんて!」

尤も、紫の方は勝負に勝つ気満々らしいが。

「あ、おい!ちよつと待て!」

颯爽と立ち去ろうとする紫を生が静止する。

「何?命乞い?」

命をかけたきのこ狩りってなんだ。

「命をかけたきのこ狩りってなんだ」

しまった、生と被ってしまった。

「お前、何かほつとくと毒きのこばつか採りそうだから……これ、使え」

生は何も無い掌を差し出す。

「……つて何も無いじゃない!」

「『普通』きのこ狩りにはこれが付き物だ」

生がそう呟くと、生の掌の上に、一冊の本が現れる。

本の表紙には大きな文字で、『写真付き きのこ大百科』と書かれていた。

「いいの?」

「おうよ!」

生は無理矢理に大百科を紫に渡す。紳士的というよりは、これが当然の行動だ。

「勝負つていうか、とりあえず、刺激的に、そして飽くまで普通に、楽しもうぜ?」

飽くまで普通に、という文の必要性は有るのだろうか。恐らく、ない。

紫は大百科を受け取り、ふふつ、と笑い声を零す。

「そうね……楽しむましょう?」

二人、微笑みあう。性格には一人と一妖か?

ここがもつと雰囲気なある場所だったら良かったかもしれないが、如何せん、ここは怪しげな匂いがプンプンするような森の中である。

「じゃ、俺はあっち探すよ」

「じゃあ、私はあっちを」

二人は別々に歩いていく。紫は、戦意こそ喪失しているようだが、その分、楽しもうという気持ちで埋め尽くされたのか、満足そうな顔をしていた。

*

夕焼けが眩しい。

一体どれだけの間、きのご狩りをしていただろう。

「ん?あれは……」

森の中、延々と待たされていた、自称きのご評論家、八雲藍が見る森の先には、人影。

「藍!お待たせ!」

籠一杯のきのごを持った、紫がいた。

「そろそろ、時間でしょう?」

「ええ……それにしても、よくこんなに採りましたね」

暫くはきのごオンパレードのご飯だろうなあ……などと考え、藍は苦笑しながら紫を見る。

紫はまるで子供のように胸張っていた。その姿に、思わず藍は微笑んでしまう。

そこで、タイマーが鳴り響いた。この第一回チキチキのこ狩り大会、終了の合図である。

森中全てに響くのではないかという程の大きな音だった。

普通なら、妖怪が気づくかも知れないが……ここにいるのは大妖怪、八雲紫である。

そうそう近づく馬鹿な者もない。

「そろそろ生も戻ってくるかしら?」

「そうですね……待ちましようか」

二人はブーツ、と、今日の献立の想像をしながら生を待つ。美味しそうなきのこ料理を思い、思わず、唾を飲み込んでしまう。

「食はずぎちやいそうねえ……」

「食べ過ぎて、お腹壊したりしないてくださいいよ?」

「大丈夫よお——」

一方その頃、生はというと——

「……迷った」

とても大丈夫な状況では——なかった。

平凡を求める迷子

人は常に迷つてるよ……人生という道に、な

ここは、『魔法の森』

鬱蒼とした森からは、人の気配どころか、モノの気配すら感じさせない。

見えないが、感覚でハッキリと分かる、禍々しく、怪しい雰囲気……これが、瘴気というものだろう。

まるで、全てを喰らわんとする様な瘴気に、俺は身震いする。

今はまだいいが……暫くすれば、瘴気が体に充満し、正気を失うだろう。因みに今のは洒落である。

そんな深い、深い森の中心に俺はいた。

「どっだよ、(ノノ)……」

意図してここにいるわけではない。

意図せずでここで、迷っていた。

何故だ——

どうして、こんなことに——

戻ったら紫に散々文句を言ってやろうと思つた。

だからこそ、こんなところで力尽きるわけにはいかない。

俺は、生き延びなければならない。

一度捨てた命を、再度手に入れるなどということは、本来、生への侮辱でしかない。

俺は今、全ての命を、生を、侮辱しながら生きてるのである。

まだ、手に入れてから一ヶ月すら経過していない人生。

手放すわけにはいかない。そう決意し、俺は深い森をただ歩いた。

「あれ？……さつきも通つたような……」

森というのは、余り景色が変化しないのが普通だ。

ここが普通の森ではなく、魔法の森であつたとしても、その最低限の森としての常識はあるようだ。

自分がどこにいるのか分からない——

同じところで、足踏みをしているだけのような錯覚に陥る。

そんな筈はない。確かに進んでいる筈だ。それは分かっている。理解しているのだが……

焦っているのかもしれない。

こういつた時に、最も恐れなくてはならないのは、冷静さや、判断力の欠如である。

分からなければ、考えればいいのだ。それが普通の発想というものだ。

だが、そんな普通を、除外してしまう。恐怖から、焦りから、淋しさから……

それは、駄目だ。飽くまで普通にいろ。常識を信じろ。平凡に向かえ。

大丈夫だ、紫達も、俺がいつまでも戻ってこなければ、何か有ったのではと思うだろう。

あいつらなら、俺をきつと見つけてくれる。

だからそれまで俺がすべき事は――

「絶対的に死なないことだ」

生きるとは、随分と大変なことかもしれない。

だが死なないのは、案外簡単に単純なものだ。

生きるためには、生きなければならぬ。

だが、死にたくなければ、死ななければいいのだ。

どんなに逃げ惑おうが、無様になろうが、不必要なことをしようが、嘘を吐こうが――

死ななければ、安いものだ。

「飽くまで普通に」

深呼吸をする。

空気を吸うという行為が、こんなに気持ちの良いものだと感じたのは、恐らく、この危機的状况を味わえたお蔭だ。

どんなに非凡で、現実離れた状況でも、心はいつでも平凡に。

それさえ忘れなければ、それから逃げなければ、大丈夫だ。

「まずは……森からの脱出が先決だな」

紫達と、いつ遭遇出来るかは分からない。

もう少し待てば遭遇出来るならいい。が、確信が持てない以上、こんな瘴気に塗れた空間にいるのは大変危険である。

闇雲に歩くのが危険ではないのか、といえば嘘になるが……ここでじつとしているよりは、幾分マシである。

俺はとりあえず、歩くという選択を選ぶことにした。

もう、空も暗くなってきたな……

*

「ハアツ……」

溜息を吐くと、人の幸せというのは何故だか逃げていくらしい。

幸福というモノは、溜息が大嫌いなのだろうか。というか、今なんとなく思ったが、このルール妖怪にも適用されるものなのだろうか？

「行けども行けども森ばかり……」

当然である、まだ森の中なんだから。

そんな暢気なことを考えながらも俺は随分と焦っているのだ。

だって、息苦しい。気持ちが悪い。

もう長い間この状態だ。冷や汗は頬をつたり、苔の生えた地面に落ちる。

本気で、ヤバイかも。そう思った。

ここは普通の一般的男子高校生が、居ていい場所ではない。

「月が綺麗だな……」

暢気過ぎるだろう！という突っ込みは分かる。すまない、ただの現実逃避だ。もう諦め

たくなってきた。

もう、死のうかな。死んで閻魔様にでも逢ってこようかな……

ああいかん、完全なマイナス思考になっている。

駄目だ駄目だ、紫達なら、きつと助けに来てくれる。それまで、精神が持ちますよう

に……

*

「——紫様、やはりおかしいです」

私は八雲紫。周りにはスキマ妖怪と呼ばれたりしている。

私は今、式神である藍と共に、『魔法の森』という場所にいる。

普段なら、こんなところに用事はないし、藍という理由も無い。

だけど今日は、同居人の日常生の要望で、ここにいる。

生の要望というか……私の我儘なのだけれど。

私の暇潰しを求める要望に対し、生が『きのご狩り』という案を出したのだ。

初めは余り乗気ではなかったけれど……

やってみると、中々楽しかった。

私は、満足していた。だから生にお礼を言おうと思っていたのだけれど……

「そうね、余りにも……遅すぎる」

肝心の生が帰ってこない。

偶然などと言うには……時間が掛かりすぎている。

「もしや、何か有ったのでは……」

その可能性は十二分に有る。

この魔法の森にも、少なからず妖怪がいる。

私も細心の注意をしていたけれど……

私の妖気を捉えぬ、身の程知らずな者がいる可能性も零^{ゼロ}ではない。

「紫様」

藍が焦ったように私に声をかける。

そうだ、暢気に考案なんてしている場合ではない。

私は、手を翳し、瞬時にスキマを――

「――!?!」

驚愕する。

「ど、どうしたのですか?紫様」

藍が心配したような声をかけてくる。

「開かないの……」

「え?」

「スキマが、開かない……!」

スキマが開かなかった。

「え!?!それでは帰ることすら――」

「違うわ」

スキマが開けなくなった。というのは少し違った。

「生のところへだけ、スキマが開かないの……」

それどころか。

「生がどこにいるのか、それを探知することさえ——出来ない」

初めての、ことだった。私は完全に驚愕していた。

「生に能力が通じない——!?!」

それは、紛れもない、最強の能力を持つてしても分からない——

現実だった。

*

「ハアツ……クツ」

体が、とてつもなく重い。

早く、早く、早く——

最早、助けを待つなどという、悠長な選択肢は完全に除外された。

一刻も早く、森から出なくてはならない……

重い現実。

受け止められるかではなく、受け止めなければならぬ状況だった――

「寒、……」

確かに、風は冷たいものだが……この寒さは、そんなものではない。

紛れもない、悪寒。

それは、体が衰弱していつているということを、分からせた。

疲れは能力で除外している為、感じることはない。

悪寒も取り除きたいのは山々だが、瘴気というのは自然現象的な『普通』であり、この悪寒も、それから来た普通のことなのだ。

俺の能力は、普通にし、普通から逃げさせない能力ではあるが……普通を操り、普通を拒む能力ではない。

依って、疲れ以外を取ることとは出来ていなかった。

呼吸が、荒くなる。

深呼吸を歩きながら繰り返し返した。

大丈夫だ、冷静に、平静に。

どれだけ、歩いただろう。

もう限界点を突破したのか、不思議ときつきよりも楽な気がする。

だがそれは、どう考えても良いものではなく、寧ろ根性だけで歩いているような状態——つまり、やばいです。

ただ右足と左足を交互に出すだけの、簡単な作業を続けていると、不意にどこからともなく、音が聞こえた。

風の音や、葉の擦れる音といった、自然の音ではない。

明らかに人為的というか……これは……

「足音!」

足音。つまり近くに人がいるという事。

ここでその人を逃がせば、俺の二度目の人生はゲームオーバー確定。

俺は考えるより早く、その足音のする方に向かった。

「いた……!」

視界に入ったのは、独りの少女。

とても綺麗な紅のリボンで、金髪を結び、服装はまるで闇に紛れるかのような黒。

「……ん?」

見覚えがあった。

逢った覚えはない、が——見覚えはあった。

前の世界ならば、転生なんてことをしていなければ、偶然だと思ったであろう。単純

な思考。

だが俺には、偶然だとは思えない根拠を持っていた。

幻想郷という、根拠を。

俺は反射的に、頭に浮かんだ言葉を発する。

「——ルーミア!!!」

少し掠れた声だった。体調の不具合が、声に混じっていた。

数拍の間……沈黙が、二人の間を駆け抜けた。

沈黙を破ったのは——

「……ん?」

少女、ルーミアだった。

「私のこと、呼んだかしら?」

ルーミア。

俺の知る、東方Projectのキャラクターの一人。いや妖怪だが。

「そーなのかー」と、良く言っていた気がした。良く笑うような、元気な妖怪少女、というイメージだった。

俺のイメージが正しいのか、正しくないのかは分からないが、一つだけ、確信を持って言える、とても大事なことが有る。

「貴方は——」

ルーミアは——

「貴方は、食べてもいい人類？」

人を喰う。

危ない。普通たる俺すら、直感で分かる。そのくらいの殺気。大きな殺気か、小さな殺気か……言わなくても分かるよな？

普段の俺なら、恐怖で失神してしまってもおかしくはないかもしれない——
だが。

「今の俺は、死ぬことは出来ない……」

そう決めたのだ。諦めかけていたが。

「何か言ったかしら？」

ルーミアが、首を傾げる。

俺はルーミアの目をじっと見てから、スウツと息を吸って……

「いえ、何も言っていないですよ」

と言つて、わざとらしく肩を竦めた。

「そう——で、食べてもいいの？」

ルーミアは目を細めた。

その姿は、仇気ない子供そのものだが、その表情は獲物に狙いを定めた、獣の様に感じた。

「いやあ、困りましたねえ」

死ななければいい。

俺が今すべきはただ、それだけである。

俺は体をスツ、と立たせ、口端を吊り上げた。

大丈夫だ、飽くまで普通に——そう思つて。

死亡フラグとは普通なのか？

深い森の奥――

「いやぁ困りましたねえ」

森の中、人喰いと対峙しながら、俺は笑っていた。

「お腹が、空いていらつしやるのですか？」

俺はまた、わざとらしく訊ねた。

「ええ、とつてもね……もう面倒だから、食べてもいい？」

子供が夕食の味見をしてもいいか、親に訊ねる。

彼女からしたら、それと何ら変わらない行為なのだろう。

俺の背筋に冷や汗が垂れた。

それは、体調的なものと、精神的なもの。どちらももの所為だ。

要するに俺は今、身体と精神のWパンチを喰らっている様なもの――それと同義である。ああ、なんという非情。

「お腹が空いていらつしやるというのならば……自らを捧げたいのは山々というか、直

ぐにでもそうしたいのですが……」

「あらそう？じやあまらず右腕からね？」

怖い怖い怖い。雰囲気恐怖過ぎる！

というか、俺が知る「なのかー」口調のルーミアは何処へ!? 「そーなのかー」とか、一回も言ってくれないじゃん! どういうことだよ!

「いえいえ、そうしたいのですが——」

俺は眼前に手を翳す。そしてそのまま「やれやれ困った」といったような、芝居がかった動き。

「それをしてしまうと、貴女が困ってしまう」

「私が困る? 寧ろ私は喜ぶのだけれど?」

当然の反応だ。

「唐突ですがルーミアさん……境界、つてご存知ですか?」

俺は手でチャックを開けるような、何かを開くような動きをしながら、ルーミアに問う。

「境界つて……境界?」

「そう『境界』です」

「言葉は分かるわよ」

ルーミアは、だからどうした、といった表情だ。妖怪でも、反応は人間と変わらないな。

「境界とは実に曖昧で恐ろしいものですよねえ……」

「そーかもねー」

おいしい、ちよつと違う。

「そんな境界を操れるなら、実に愉快なことでしょう。ですがそんなことは……おや、一人だけいました」

「ここまで言えば、いくら察しが悪くても気づくだろう。」

「八雲紫のことね？」

「おおそうでした！私の『友人』の紫さん」

友人をわざと強調しながら言う。

その言葉を聞き逃さなかった、ルーミアが質問してくる。

「友人？貴方、八雲紫と知り合いなの？」

「ええ、そうなんですよ。彼女とは昔からの結構な仲でしてねえ」

約一週間程の昔からな。

「今でも俺が呼べば、来てくれるくらいにはねえ」

嘘だ。そんなことが出来たなら、すぐに帰っている。

「…………え!？」

ルーミアが、表情を歪ませる。

「もし俺に何かあれば、駆けつけてくれるかもしれません」

「八雲紫が、駆けつけて…………？」

ルーミアの表情は、困惑や疑念が入り混じったものだ。

まあ普通に考えて、極平凡な人間である俺と、大妖怪が友人なんてことを信じろと言われ、信じるかというところである。

「ええ。ですから、貴女には考えて頂きたいです。よく、ね」

俺はルーミアを指差しながら言う。自分のことながら、よくペラペラと言葉が出てくるものだ。

「…………」

「沈黙は反抗と見なしますが？」

「…………どうせ、ハツタリだわ」

うんうん、当たってる当たってる。

「貴女がそう思うならそうなんだろう、貴女ん中ではね」

居心地の悪い沈黙が俺とルーミアを包む。

あーヤバイ。何がヤバイって、主に体調的にヤバイ。

「これは——忠告なんですよ？」

「忠告？」

「そう、貴女への最後の忠告」

選択肢は二択なのだ。後は決めるだけ。

ゲームのように待ってれば、時間で正解の選択肢が出てくるなんてことは、ない。

「あんまり、嘗めないで」

「いえいえ、嘗めているなんて。そんな」

俺は飽くまで道化を演じる。

今は、相手から疑念を取り払うなんて無謀なことを考える時ではない。

自身の、態度で、不安を作れ。

「まあ、じっくり決めてください。最後なんですからね」

俺はそう呟いて、姿勢を崩す。

「そういう態度が嘗めてるっていうの！」

姿勢を崩した隙をルーミアが一気に俺に詰め寄る。

ハアツ……結局そういう選択か。

俺はスツ、と左手を掲げる。

そのまま不敵に笑顔を作る。

「この指を俺が鳴らした瞬間。八雲紫が現れる」

「!?!」

俺の眼前でルーミアが止まる。

その間は、僅か数センチ。状況が状況なら、とてもドキドキする距離だが、今はそういう雰囲気ではない。

「おや? 止まるんですか? まあこちらとしてはどうでもいいのですが」

神経を逆撫でするように言う。

「どうしますか?」

「……戯言ね」

皮肉っぽく言い放つルーミア。

声色や表情から察するに、俺の言葉にはまだ半信半疑といったところか。

「いいですよ」

「え?」

「いいですよ。貴女が戯言と、ハツタリと、嘘と認識しようが——俺は嘘などいつていない。そう断言するだけですから。自信を持ってね」

俺は自信まんまんまんのすけ、という表情でルーミアに目を向ける。

「最期の忠告です」

最期の忠告。

『『最後』ではなく、『最期』』

「……………」

「俺を——喰らいますか？」

重みの有る、低い声で告げる。

『最期』の忠告。

実に意地悪な言葉である。

俺は今、選べとっているのだ。

『死ぬ』か『生きる』か。

普通に考えれば、五分五分か。

俺が紫を呼べるか、呼べないか。結論的には呼べないのだが。

甘めに、鼻肩目に、偶然も考慮しながら、ルーミアが紫に勝てる確立を、可能性を考
える。

これは、限りなく0に近い。

俺が紫を呼べた場合、俺が賭けに勝利した場合、ルーミアは命を失う。

何よりも重い結果だ。

では、ルーミアが賭けに勝利した場合は？俺が嘘を吐いていた場合。

ルーミアが獲られるものは、一人の人間。食料でしかない人間。それだけなのだ。

簡単に言えば、『晩飯を我慢』するか、『死ぬ』か選べ。である。

そんな選択肢を突きつけられた者は、どちらを選ぶ？

賭けに出る者も、勿論いるだろう。

根拠が有る者と、馬鹿である。

ルーミアが俺を睨む。

俺は覇気も邪気もない、嘘偽りのない笑顔をルーミアへ向ける。

実際的には、俺が紫を呼べるかと言われると、呼べないであると考えるものだ。

だが、0じゃない。

もし呼べたら、そう考えれば、考えてしまえば、根拠がなければ、自信に騙されれば

——次の台詞は、決まる。

「私は……」

「貴女は？」

「——諦めるわ」

それは極普通の、当たり前過ぎる判断だ。

「頭のいい人で、よかったですよ」

知能がなければ、話し合いなんて出来なかつたし。

知能を使いこなせていない⑨なら、こうはいかなかつた。

馬鹿は深追いするから後悔をする。

ルーミアは、遠くに逃げすぎた獲物を諦めることが出来るようによかつた。

「あんなに自信有り気な顔を見せられれば、信じざるを得ない」

「ええ、信じてください。それでも俺は嘘を吐いたことがないんです」

その台詞が嘘だ。

人は生きていれば必ず嘘を吐く生き物である。それは普通のことだ。

一生、嘘を吐かない人間がいるとするならそれは——ただの化物だ。

だが俺にはまだ問題が残っている、体調的に考えて。

「ああ！困つた！」

「!?」

「ああ、どうしよう……」

「ど、どうした?」

「ああ! 聞いてくださいルーミアさん! 俺今、この森から出たいんですよ!」

「そーなのかー」

「! ル、ルーミアさん!」

「え?」

「今の台詞もう一回言ってくれませんか?」

「え? そ、そーなのかー」

静かな森に、機械独特のイントネーションで『録音しました』という音が響く。

「録音!」

「うわっ、感激! 着信音にしよう、誰からもかかってこないけど」

俺はケータイを握り締める。

何故ケータイを持っていいのかという突っ込みは、携帯だから携帯している。と答えよう。誰からもかかってこないけど、なんとなく携帯しておくと落ち着く。え? よく分からぬ? 貴方も転生したら分かるさ。

「あ、すいません」

「い、いや」

「で、困ってるんですよ！誰か優しい人が案内してくれないかなあ？人じゃなくてもいいんだけど！」

「じゃ、私はこの辺で……」

「そんな優しい人が、いたら『友人』に話そう！きつとそんな人はあいつも気に入るよね！」

また、友人を強調する。

「……！」

「あーでも、そんな優しい人はいないかあ……」

わざとらしい落胆。胡散臭い胡散臭い。紫のが移ったか？

「八雲紫に恩が売れるなら……」

「え？何か言いましたか、ルーミアさん」

「……私が、案内するわ」

「え、本当ですか！」

「ええ、気前がいいのよ、これでもね」

「それは、有難いです」

「……貴方、八雲紫と結構な仲というのは本当なんでしょう？」

「ええ、彼女には良くしてもらっています」

「そう。いいわ……行きましょう」

「有難うございます！お礼もキッチンと用意しますので」

「楽しみにしてる」

結構素直だな。

「ではでは、行きましょう」

俺とルーミアはゆっくり歩き始めた。

あ、もうちよつと速く歩いてくれないかな、ちよつと気分が……

*

「——着いた」

歩くこと——

「3分!?!」

徒歩3分。カップラーメンが作れる時間である。3分と聞いてカップラーメンを想像してしまうのは、日本人としての性か……5分待つものも有るが。

「で」

「で？」

「お礼は？」

直球ドストレート。

あーそういう言いえましたねそんなこと。

「おやおや、ルーミアさん。確かに俺はお礼を『用意する』とは言いましたが、お礼を『する』なんて一言も言っていないよ？それに、お礼をいつ用意するかも指定はしていません」

二年後か、三年後か……はたまた十年後か。用意すれば、嘘は吐いていない。

ルーミアは口を開けて呆然としている。俺悪いこと言ったか？まあいいが。

「ハアツ……もういい」

まあ、今日のごとは家に帰って、きちんと紫に話すことにしよう。

夕飯時にでも……ん？

「家？」

「どうしたの？」

「家？家家家……」

んー。なんか違和感が……

「あー!!!家ー!」

「どつ、どうした」

「あれ、まだいたの」

「酷い言い様!?!」

「いやね、何でもないんですけど……」

紫が来ない。何故来ないんだ？スキマ使えよ……何か有ったのか？

確認したい、が。する方法がない。

ということとはとりあえず、今日は帰れないことを考えなければいかん。

まだ完全に体調が治ったわけじゃない。そんなわけないが……

「野宿は覚悟か……」

「ねえ、どうしたの?」

「ああ、もう用ないから、帰っていいよ」

「いくらなんでも!……ああ、もういいや。じゃ私はもう行くから……」

「んじゃー」

軽く手を振る。敬語?今そんな場合じゃないよ。

「バイバイ」

あー、どうするかなあ?人里とか行けば宿が……金がない。そもそも人里ってどこだよ。

「んー……ああー！」

俺は唐突に有ることを思い、ルーミアを追いかける。

「おーいルーミアさん！」

「んー？」

運良く、遠くには行っていないかった。飛んだりしてなくてよかった。

「やっぱり、感謝を示したいから、お礼渡しますよ」

「ん？なに？」

俺は徐にルーミアの手を取る。

そして、ギュツ、と握手をした。

妖怪とは言うが、体温は極普通のものだった。

「……なに？」

「俺と仲良くなる権利をあげます！」

「え？」

「だから俺と仲良くしてください」

「押し付けじゃない！」

「いいじゃないですか。別に悪い話ではないでしょう？」
「そうだけど……」

おー戸惑ってる戸惑ってる。反撃が来ないと分かっている相手を弄ぶのはとても楽しいものだが、今は止めて置こう。

「じゃ、決まりな！敬語もめんど……堅苦しいからやめる！」

「今、面倒って言わなかった？」

「言つてない言つてない」

言いかけたけど。

「まあ、分かった。それじゃ……」

ルーミアは疲れたように去ろうとする。

「ちよい待ち！」

「今度はなに？」

「友達の誼で——この辺の建物とか人がいるところ教えてくれ！」

*

「……か……」

ルーミアに連れてきてもらったところは、先程の場所から徒歩1分。カップラーメンで例えると、硬い。

そこは、雑貨屋か古道具屋のような雰囲気のお店だった。確かにここなら人がいそう
だ。

看板のようなものを見ると、そこに書かれていた文字は。

「香霖堂……？」

どこかで聞いたことがある名前だと思った。

いるのは普通の人だよな？大丈夫だよな？

アイテムゲット！君の心もゲットだぜ！

「香霖堂……？」

それは、森の入口に、ひっそりと建っていた――

こんな所に、態々来る物好きはいるのだろうか？いや、幻想郷の住人の価値観は俺が思う一般的価値観ではないかもしれないので、一概にどうだ、とは言えないが。

俺がここに来た理由は一つ。寝床を調達する為だ。

野宿するのは最終手段。紫が来るのを信じて、人がいそうな場所で泊めてもらおうって魂胆だ。

「それはいいが、本当に中に人がいるのか？」

外から見える明かりは、点いているのか、いないのか。それすらも微妙なくらいしか漏れておらず、辺りの静けさが、何故か店を不気味に見せる。

中にいるのが、人ならざるもの……なんてオチは、求めてないぞ？

「と、とりあえず……」

俺は古風な扉に手を掛ける。

店だよな？勝手に入っても大丈夫だよな？

「すみませーん」

返事がない。ただの留守中のようだ。

「つて、凄いい散らかりようだな……」

本やら家具やら、なんでも揃っている。これ全て売り物だろうか？

用途の分からない奇妙な道具をぐるっと見回す。

「ん、これは……?」

俺は一つのものに目を止める。

「パソコン!」

なんでそんなもんが幻想郷に!?

「あれ?これは……同人誌にブルマ!?!……つてこれは、せが○いじり!」

同人誌とブルマも気になるが、何故せがれい○りが……プレ○テは!!……ないじゃないか!!?どういうことだよ!

「まあ有つても出来ないしな……それより、何故こんなものが有るんだ?」

眩いた瞬間、不意に背後から気配を感じた。

「——誰だ!」

「誰つて……香霖堂の、店主だけど?」

「へ?」

変な声が出てしまった。

というか、店主？人の気配は感じなかったけど……

「ん？……アツー!!!」

俺の目の前にいたのは、眼鏡を掛けた銀か白のような髪色の若い男性――

「か、数少ない男性キャラ！」

「……？」

変なものを見る目で見られた。酷い。

だが、俺はそんなことは気にしなかった。何故ならそのキャラ、今俺の目の前にいるこの男性の名前を思い出すことに必死だったからだ。

「えっと、確か、こ、こーりん！……さん？」

「僕は森近霖之助だけど？」

「による？」

また変な声が……っておい待てちよつと待て。今のは変な声ってレベルじゃなかったぞ。

「あ、ああ……森近、さんでしたか。すいません知り合いと似ていたもので……」
嘘じゃない、嘘じゃないぞ。

画面の中で知り合ったんだよ。その時とちよつと雰囲気が違うけど。

「いや、別に構わないけど……お客さんかな?」

「あ、まあ……客です」

「そうか。出てくるのが遅くてすまなかったね」

「い、いえいえ!」

ヤバイ、この人礼儀正しい!いや、店でお客とタメ口って時点で、外、いや元の世界では駄目だけど。

だが!こつちの人でこんなに礼儀正しい人に逢ったの初めてじゃないか?男性に逢ったのも。

「そ、それで……ちよつと聞きたいことがあります……」

忘れていた。俺の目的はなんだ?答えは簡単、寢床の調達だ。

その為には……

「すみませんが、道に迷ってしまいました……泊めてもらえませんか?」

直球に相手に言う。これ大事。これ真理。

「ああ、ごめん。そういうことは……」

おやなにかが建築されようとしているぞ?なんだろう、これは……

断られるフ・ラ・グ!

「くっ、ハアツ、ハツ……」

「ど、どうしたんだい？」

「す、すみません……さつき森で吸った瘴気が体に侵蝕し始めた、ようです……」
いきなり過ぎる展開だ。せめて伏線くらい用意しておけよ。

「え……本当かい？」

ヤバイ、信じていない！

クツ、このままではいかん。使いたくはなかったが、最終手段だ！

『普通』一瞬で疲れが取れるなんて有り得ない」

「え？今なんて」

森近さんの言葉を聞き終えぬまま、俺はゆっくりと曲線を描くように倒れていく。

「え、だ、大丈夫——」

フツ、と。蠟燭の火が消えるように、簡単に——

俺の意識が途絶えた。

*

「——ん、んうん」

目を開ける。体がだるい。

そこは見慣れない場所だった。

「ハッ」

そ、そうだ。こんな時は。

「知らない天「目が覚めた?」なんで皆、妨害するのっ!?!」

ランジエは非情である。どうしても俺にこの台詞を言わせない気だな。

どこからか、「私のせいじゃありません!」なんて怪電波を受信した気がしたが——無視した。

「いきなり、倒れたから驚いたよ」

安堵したような表情でそこにいたのは、香霖堂店主、森近霖之助さんである。

どうも、さつきぶりです。

「いえ、申し訳ありません。疲れが溜まっていたようです……」

先程のことの解説をしよう。

俺は今まで能力で疲れを失くして来た。

だが、さっきの台詞により、能力で能力の否定——つまり、上書き保存をしたのだ。

その結果、今まで排除してきた疲れが、一気に体に襲ってきて——ショックで倒れた、

というわけだ。

だが、これはマジで最終手段だった。

下手すると、そのシヨックで死、なんてことも有り得るからな。

さすが俺！皆にできない事を平然とやってのけるッ！

そこにシビれる！あこがれるウ！

なんか、虚しくなってきたな……

「あ、直ぐに……クツ」

本当はもう、動けるくらいには回復しているが、わざとらしく体調が悪いという様子を見せ付ける。

俺のそんな様子を見て森近さんは諦めたように溜息をした。幸せが逃げていきますよっ。

「一日だけなら、ここにいてもいいよ」

「え？それは願ってもないことですが……いいんですか？」

「僕にも人並の罪悪感が有るしね……動けない君を、無理矢理追い出す、なんてことは出来ない」

「そ、それはそれは。有難うございますー!」

俺は心からお礼を言う。

いやあ、常識的な対応してくれる人で良かった。

まあ、いきなり行つて、「泊めてください!」なんて言うのがまず、常識的ではないから、その返答に常識もなにも有つたもんじゃないけども。

「いやいや、別に」

森近さんが言い終わる前に、俺は「どっこいしよういち」と、おっさん臭く声を漏らして立ち上がる。

「え?」

「いやあ、疲れた疲れたー」

そう呟きながら、手をぶんぶん、と振り回す。肩が痛い。

「き、君、動けるじゃないか!」

ん?何を言ってるんだ、この人。

「俺、一言でも『動けない』とか『元気がない』とか言いました?」

疲れが溜まっていたとかは言ったが、そんな直接的表現を使った覚えはない。

「だ、だが僕は……動けないんだらうと思つて、許可したんだ!君だつて、動けないとー」

「だから言つてません。俺は自分から『動けない』なんて言つてませんし、貴方の動けないという発言への肯定もしていません。貴方が勝手に思い込んだ、だけでしょ？」

「う、動けるならもう」

「出て行きませんよ。貴方が勘違いしていたとか、そんなものはどうでもいいんです。大事なのは、貴方が泊めると、許可した事実だけ」

「だって、そうだろう？ 普段から、人と人つていうのは、何を考えているか分からずに話すものなんだ。」

「結果話が成立している——ように、見えるだけ。実際は、全く噛み合つてないのかもしれない。」

「だが心のうちが見えずとも、人は人と共存する——それが、普通だ。」

「俺は嘘は言つていません。疲れたのも本当ですし、道に迷つたのも本当ですし、森を来たから、瘴気が体に侵蝕していたのも本当です」

「まあ、実際はそこまで侵蝕しなかつたわけだけでも。」

「貴方がそれだけの言葉から、勝手に推測し、勝手に許可を出したんです。なら俺は、勝手に貴方からの許可を有難く頂戴します」

「……ハアツ」

嘆息。森近さんの幸せがどんどん逃げていく。

「君、変わってるね」

「俺は一般人ですよ」

変わってなんかないし、変わろうともしていない。

「俺は普通に平凡に常識的に一般的に平和的な日常を送ることを信条としてるんですよ」

久しぶりに言ったな、この台詞。

「そうか……いや、言いたいことはまだ有るが、いいよ。泊まって。許可、したんだからね」

森近さんの表情は、諦め、悲しみ、疑念が入り混じってはいるが、吹っ切れたような……満足気な表情だった。

*

「——何ですか?これ」

「ああ。そのお札?それには霊力が籠っていてね、力同士を反発させることで……まあ、簡単に言うると、相手の攻撃を相殺出来る優れものだよ」

まるで、出来のいい子供を自慢する父親のようである。

それで？相手の攻撃を相殺、だっけ？

「これって、誰でも使用できるんですか？」

「ああ、誰でも使用可能だよ。人間でも、妖怪でも、使おうと思えば、零歳でも、百歳でもね」

流石に零歳には無理だと思ふ。

だが随分と便利な品物だということには違いない。大量に余つてはいるが。

「これ売れないんですか？」

「そうだね、売れることはないかな……まあ、売れたら売れたで寂しいんだけどさ」

商売人らしからぬ発言を聞いた気がする。

「言つておくけど、商品までただで渡すことは出来ないからね？」

「それは流石に……気が引けますし」

逆に遠慮してしまつて受け取れなさそうだ。

それにしても便利だよなあ、欲しいなあ……ハッ、衝動買いする人つて、こんな気持ちなのだろうか？

欲しい、が。金がない。

俺の今の持ち物は『きのこ』、『写真付き きのこ大百科』——

「後は、このケータイだけか……」

電子マネーでも使えればいいが……流石に無理だろう。

「ん? な、なあ君。ちよつとそれを見せてくれないか?」

森近さんが指差したのは、俺のケータイだった。

今からルーミアの「そーなのかー」ボイスをリピートして楽しもうと思っていたんだが……ま、いつか。

「はい、どうぞ」

俺は特になにも考えず、森近さんに手渡す。

「……電話、か」

分かるんだろうか? 幻想郷にもケータイとか有るのかな?

森近さんがケータイを凝視している様を横目で見ながら、俺は大きな欠伸をした。

「今、何時だ?」

辺りを見回すと、時計があつた。それが指す時刻は、十二時。

もうこんな時間だったのか。えつと、昼飯を食べてから暫くしてきのこ狩りへ行つて

……で、迷つて……ルーミアと遭遇……なんとかやり過ごし……香霖堂に来て……泊め

てもらえることになつて……描写はないけど飯を食べて……それから暫く、つてああ、

今日は色々なことが有つたんだな。そりゃあ時間も遅いわ。

「——ねえ」

不意に森近さんが話しかけてきた。

「はい?」

「お願いが有るんだ。この、携帯電話を、僕に譲ってくれないか?」

「しよによ?」

変な声が……絶対おかしい。今のは誰がなんと言おうとおかしい。

「ですが、それは大事なもので……」

「お願いだ、僕に出来ることならするから!」

近づいてこないでください、顔が近い。男とのこんなイベントいらぬ。

「そんなに欲しいんですか?」

「ああ」

直球。幻想郷の生物は、直球発言が大好きなようで。

「仕方がありませんね……」

「譲ってくれるのかい?」

「ええ。そんなに欲しいんですたら」

「ああ、ありがと「ただし!」……?」

「条件が有ります。それを吞んでくれたら……ですけどねえ」

「それは、なんだい?」

「はい。ここに有るものの中から、三品!俺に譲ってくれないでしょうか?」

俺は手を広げ、店の商品たちを指差しながら言う。

「こつちがこれ一つなのにそれに対して、三つもかい?」

「ええ。先程も言いましたが……それはとても大事なものです。とても、ね」

特にルーミアの「ソーなのか」ボイスとか。

「ですから、これでも妥協に妥協を重ねたのですよ? 僕のととても大切なものを渡すというのですから、三品くらいいいではないですか」

「いやしかし……ううむ……」

森近さんは顎に手を置き、考え始める。

「——三つ、だね?」

「ええ。三品。それ以上は要求しません」

「……分かった。好きなものを言ってくれ」

「——有難うございます」

優しい人である。

「ではまず……このパソコンを」

俺は店に有った中から、なるべく最新の方のものを指差して言う。

森近さんは少し複雑そうな表情をした後――

「分かった。一つ目はそれね」

承諾した。

「では、二品目はこのお札を――」

「ああ、やはり来たか」

来るだろうと思っていたのだろう。先程まで俺は、この札を凝視していたからな。

「この札を――これだけ」

そう言つて俺は、札を一気に掴む。

「ええ!? ちよ、ちよつと。明らかにオーバーしてるつて!」

森近さんは慌てて言う、が。しかし。

「森近さん。この札、数えてください――」

俺は徐に自分が取つた札を森近さんに渡し、数えさせる。

「……十枚、十一枚、……全部で十二枚、だね」

完全にオーバーしているんじゃないかというように森近さんは告げる。

「はい、一品でしよう?」

「え?」

「十二枚で一ダース。一品です」

俺はバツ、と森近さんの手から札を取って言う。

「なに!？」

「俺は、一品と言ったんですよ?一枚で、とか言ったわけじゃない。一ダースだって『一品』ですよね?」

「そんなのは屁理屈だろう!」

「屁理屈が、理屈じゃないとでも?」

森近さんはそれ以上言ってこなかった。何を言っても、屁理屈で返されると分かったのだろう。

それでも、断固反対すれば、なんとなかったかもしれないが……面倒になったのかもしれない。

「三品目、選んでくれ」

「はい、どうも」

俺はお辞儀をして、既に決めていた三品目を指差す。

「最後は——それで」

俺が指差した先に有った物は。

「な、携帯電話!?!」

俺が森近さんに譲った、ケータイだった。

「はい、最後はそれで」

「いやいや、渡せるわけないだろう」

「何故ですか？」

「これはさつき君に貰ったもので……」

「ハアツ……森近さん。話聞いてました？」

「な、何をだい？」

「俺は別に『商品の中から三品』なんて言ってません。『ここに有るものの中から三品』と言ったんです。俺があげたとか、非売品とか、関係ない。それはここに有るものですから、俺には貰う権利が有る。違いますか？」

「な、な……」

驚愕。呆れからくる驚愕の表情をしていた。

「屁理屈だね……」

「それは俺もよく分かってますよ」

森近さんは、やられたという表情で、俺にケータイを渡す。

「どうも」

軽くお辞儀をして受け取り、中からメモリーを取り出す。

「それではどうぞ」

「え?」

俺はメモリーカードを抜いたケータイを森近さんに渡した。

「え、え?」

「森近さん……俺、ケータイを貰います。なんて言いましたか?」

森近さんは記憶を辿るように頭を抑える。暫くして。

「言っていないね……」

「でしよう?」

「でも、それだけで、どうするつもりだい?」

そんなの決まっている。

俺は最初に貰ったパソコンを持つ。

『普通』電源が点かなければパソコンなんて意味がないでしょう」

そう言うと、パソコンの電源がピツ、という効果音と共に入った。

俺はパソコンの横の挿入口にメモリーを差し込む。

「はい、これでOKです」

平然とそう告げる。森近さんは口を開けて呆然としていた。クールな感じの人が呆

然としている様は中々に面白い。

「君は変わって……いいや、君はなんなんだい？」

呆れた様な苦笑を浮かべながら聞いてくる。

「俺は——普通の人間ですよ」

そう呟いて、笑みを零した。

次回！一体どうなる！……大丈夫どこいった。

普通過ぎる番外編

『八雲家のその後』

「——まさか、生の身に何か」

森の中。大妖怪である『八雲紫』とその式『八雲藍』は、一人の人間を心配していた。強大な存在である二人が心配するような人間——その話だけで、一体どんな恐ろしい人間なんだと、普通なら身震いしてしまう程だろう。

だが恐らく、その本人に聞けば「俺は恐ろしくなんか無い、普通の人間だ」なんて、回答が返ってくるだろう。

「その可能性は……有るわ」

「……」

二人が何故その人間を心配しているか——

その人間、日常生は、行方知らずになっていたのだ。

普段ならば、普通ならば。紫の能力『境界を操る程度の能力』で見つけ出すことは、容易い。

だが――

「駄目だわ……反応がない」

日常生がどこにいるか、分からない。

それはやはり……二人とも考えるのは避けている様だが。

それはやはり、日常生の『死』を現している可能性が高かった。

「一度、家に帰りましょう」

提案をしたのは、藍だった。

「……そうね」

紫には拒む理由もなかった。

それは、受け入れてしまったからかもしれない。

もう、日常生が見つかることはない……受け入れたから。

*

トントン、と。包丁で刻む音が響く。

それ以外の音がない空間が、暫く続く。

「――どうぞで」

藍は先程採ったきのこで作った料理を、主人の前に出す。

藍は虚勢を張っていた。

出逢つてからの期間は短い、その中で、とても濃厚な日々を過ごして来た仲間、というよりは家族になってきていた存在。

それが、余りにも突然に、忽然と、姿を消したのだ。

悲しく、寂しいに決まっていた。

だが、主人の前で、弱い自分を出すわけには行かなかつた。

紫だって、悲しくない筈はないのだ。

どんなに長生きをしても、どんなに精神力が強くても――

他者の『死』というものは、途轍もなく重い。

「紫様、冷めますよ?」

わざと大きな声で言う。

紫は、その声を聞いて、一拍置いてから、食べ始める。

「美味しい、わね……」

藍はとても料理が上手だものね。と誉めて上げることは、今の紫には出来なかつた。

「紫様が、頑張つて採つたものですから。尚更です」

自分で収穫したものは美味しく感じるといふ通説が有る。

それはやはり、気分の問題であるだろう。

気分が重い今は、その通説は、意味を成さなかった。

「ええ、そうね……」

空返事。上の空。

紫が本気を出しても見つからなかった日常生。

本当なら、そんなことは有り得ることではない。

何故なら紫の能力というのは、冥界だろうが、天界だろうが届く筈のものなのだ。

だが、見つからない。

それは、『死』という感覚より、文字通り『消えた』という方が近い気もした。

「きつと、大丈夫ですよ！」

藍の心無い、根拠ない励まし。

それがどんなに無意味なものかは、紫も、言った本人である藍も、分かっていた。

分かっていたからこそ――

「ええ、きつと大丈夫よね」

励ましあつた。

嘘の励まし。

その嘘は、とても、とても、温かいもので。

目から温かい雫が零れ落ちそうになったが、必死に堪えた。

大丈夫だと、信じていたから――

別れ、そして新たなる出会い！……なんか終わりみたいだな。

「——なんでいるの？」

その言葉は、唐突だった。

「別に唐突でもないと思うけど……」

「心読むな。で、なんでいるの、とは？」

「いや、だってもう——君、三日もここにいてるよね？」

「今日もお客来ませんねえ」

「そうだね……って、話の逸らし方が露骨過ぎる！」

オマケに、店に対しての台詞としては失礼だ！と、喚く霖之助さんを見て、欠伸をす
る。

「暢気だなあ……」

「暢気じゃないと、生きていきませんよ。日常はね」

呆れ気味の霖之助さんに、素気なく返す。

それにしても、眠い。退屈だ。

——あれから三日。

進展なし。紫にも藍にも逢えず、帰る場所が無い。

「仕方がないでしょう?来る筈の迎えが来ないんですって」

あいつらは、仮にも大妖怪なので、具体的な名前は避けておく。

「それでも……ここに泊まるのは一日だった筈だろう?」

「おやおや、霖之助さん。そんな台詞「言ったよ」……あれ?」

記憶を辿る。

「一日だけなら、ここにいてもいいよ」——あー、ちゃっかり言っている。

こうなると、弱い。もう反論の余地はない。全面的に悪いのはこちらになってしまった。

反論の余地が無い時は——

「暇ですねぇ……」

「また話を……」

——反論しない。

俺は無駄なこととはしない性質だからな。

「そもそも、その迎えっていうのは、本当にここに来るのかい?」

香霖堂の緑茶を勝手に淹れ、啜っている俺を半眼で睨みながら聞いてくる。

「それは、どういう意味ですか？」

「だから、迎えが来る場所を間違えているんじゃないか？」

——残念だが、それはない。

奴の能力が有れば、どこへでも来ることが出来る筈だ。

まあ、そうなる、今ここに紫が迎えに来ていない理由が分からなくなるけどな、普通は。

「若しくは——迎えに何か有ったか」

「それこそ、有り得ません」

あいつ等に何か有った？

そんなことが起こる筈が無い。たった、1週間程の仲だが分かる。殺したって死なないような奴らだ。何かしら強力な能力を持つ者なら、別だが。

「信頼しているのかい？」

「畏敬の念を抱いているのかも知れませんが」

若しくは、崇拜とか。

「君が畏敬の念?」

「俺だつて、誰かを敬うことくらいしますよ?」

力が完全に上のものには、しっかりと、従順なのさ、俺は。

いやまあ、俺でなくても、殆どの人間はそうだろうけどね。逆らわず生きる。これだけで、意外と全うな人生が送れるものだ。楽しい、とかは別物として。

「それはもう神様のようにな!」

俺は大袈裟に腕を広げた後、神に祈るように手を合わせる。

「ふうん……」

「おや、信じてないんですか?」

「いや、君って神とか信じてなさそうだから」

「信じてますよ。少なくとも存在は」

ランジエとか、間近で見ちゃったしね。

というか、この幻想郷には神が存在するんだろう。確か。

「まあ、『信仰』とは別ですが」

居ると分かっているのであつて、居ると信じているわけではない。

その二つは、全く別物だ。

「———で?」

「で？」

「元々、そんな話はしていなかっただろう！」

ああ、バレテェーラ。

「どんな話でしたっけ？」

俺はわざとらしく肩を竦める。

「早く出て行って話」

あるえー？何か表現きつくなつてませんか？

「……今日もいい天気ですねぇ」

「話を逸らさないでくれ」

「嫌です」

「即答?!」

いつも直球ドストレートやられてるからね。偶にはこっちからも投げさせてもらわないと。

「全く……融通の利かない方ですねぇ」

「随分と利かせた方だと思っただけど」

俺はか弱い一般人なんだから、もつと大事にしてくれてもいいんじゃないか？

「ハアツ……全く我儘……いや、いいですよ。もう」

「何故僕が悪いみたいなの雰囲気にな?」

「出て行きます。俺は大人ですから」

「僕が大人じゃないみたいなの!」

いやあ、一々突っ込むとは律儀な人だ。

「——って、出て行く?」

「はい。俺、嘘吐いたこと一度もないんですよ」

どの口が言う。俺の口か。

だが、出ていくというのは本心で言ったものだ。

「本当?」

「信じてくださいって。霖之助さん——俺としても、いつまでもここに居るわけにもい
かないし」

霖之助さんは安堵したような呆れたような悲しそうな微妙な表情を——

って、『悲しそう』?

「——もしかして、霖之助さん……俺が居なくなるのが寂しいんですか?」

俺はニヤけ、からかうように言う。

「なっ、そんな訳無いだろう!」

「男のツンデレとか、誰得ですか」

俺は鼻で笑って、口端を吊り上げた。

霖之助さんは不満そうな顔で、立ち上がった俺を見上げた。

「霖之助さん」

「……何だい」

少し苛立ったような声を出す霖之助さん。

「もし、迎えが来たら——俺は人里に行ったと言ってください。多分来ませんが」

「人里へ向かうのか？」

「じゃ、俺はもう行きますね」

俺はサツ、と後ろ向いて呟く。

霖之助さんが後ろで何か言っているような気がするが——無視した。

「ちよつと、生！」

「霖之助さん」

「……？」

「有難うございました」

霖之助さんは少し驚いたような顔をしていた。

「……君もお礼を言うのか」

「そこっ!?俺も人並には他者に感謝を示しますよ」

失礼な。お礼はちゃんとしましょう! って、小学生でも知ってるぞ。

俺の常識は小学生以下と思われていたのか。

「こちらこそ、楽しかったよ」

「その台詞、物凄く恥ずかしいですよ」

「なっ!?!」

本当に反応がいいな。この人は。

「それじゃあ。また」

「ああ……また」

俺はゆっくりと歩を進めていった。一度も振り向くことはない。

「——随分と静かになるなあ」

そんな声が、どこからか聞こえた気がした。

*

「さて、と……」

俺は今、魔法の森にいた。

人里に行く為に、ここを通る必要性はない。遠回りというか、寧ろ逆方向だ。

「別れは済んだの?」

突如、背後からの声。

普通なら驚くが——身構えていたので、そこまで驚きもしなかった。

俺が振り向いた先に居たのは、つい先日『お友達』になった——

「よ、ルーミア」

「別れが長いわ」

手厳しい。別れを惜しむくらい誰しもが持っているのだから、長引くのは寧ろ当然というものだろう。

「あんたがそんな心を?」

「……何故、幻想郷の住人は心を読むんだ?」

というか、鼻で笑ったよこいつ。

なんだ? 霖之助さんといい、失礼な奴らしいいな。

「じゃあ、行きましようか」

「どこにだ?」

俺は首を傾げ、手を肩の横で平行に広げながら訊ねる。

「あんたの行きたい所」

「——解った」

少し間を置いた後、返答する。

ルーミアは俺の返答と同時に、森の中を歩き始める。

俺も付いて行こう——と思い、再度香霖堂を向く。

「有難うございました」

そして、すいません。

届きもしない言葉を吐いた。

直ぐに、風に飲まれていった。

*

「着いたわよ」

俺とルーミアがいたのは、大きな池。

近くにはまた大きい山。

「これが——妖怪の山か」

俺達は『妖怪の山』にいた。

「あんだ、瘴気は？」

到着の感慨に浸る暇も無く、ルーミアが問う。

「ああ……『普通』長い時間森にいたんだ。耐性が付いてるだろ」

「随分適當ね……」

「平凡と言ってくれ」

呆れた様なルーミアに、笑みを零しながら返す。

「じゃ、私はもう行くわ」

「おや?もう行くのかよ」

「暇人じゃないのよ」

そりや、暇『人』じゃないだろう。お前は。

「そっか……綺麗な景色を眺めながら、俺と愛を語り合ったりはしてくれないか」

「あ、愛!?!」

「冗談だ」

ルーミアは怒ったように俺を睨む。

だが俺は、自分には関係ない。というように、その目線をスルーした。

「私は、あんたが怖いわ」

「俺、じゃなくて『八雲紫』だろ?」

「いえ、あんたもよ」

何を言ってるんだ、こいつ?

俺のような一般人、ルーミアにとっては、取るに足らない存在だろう。

「妖怪の私に冗談を言ったり、妖怪の山で暢気に景色のことを言えたり、ね」

その行為は、怖がられるようなものなのか？

単なる、友人とのスキンシップと、新たな地へ来た瞬間の感想じゃないか。

「あんた……本当に人間？」

拳句の果てに、人外を疑われるって……

「俺は極普通の人間だ」

もう、この台詞を使うのも慣れてきたな。

「嘘ね。少なくとも『普通』ではない」

これ以上何を言っても、納得してくれそうにないので、俺はルーミアの言葉を無視した。

「ハアツ……じゃあね」

「じゃ、な」

素気ない別れの挨拶。このくらいが、程々で良い。

ルーミアの気配が無くなるまで、俺はその場から動かなかった。

徐々に、徐々に薄れていく気配。俺はその変わり行くものを、のんびりと楽しみながら、空を見上げた。

——どれくらい時間が経ったか？

そんなには、経っていないだろう。

ルーミアの気配が完全に消えたところで、俺は歩を進め、山を登っていく。

「おーい」

どこからか声が聞こえた気がした。

「おーい」

気がした、じゃない。どこからか、声が聞こえている。

「おーい」

……ポルターガイスト？

本当にそうだったら、どうしよう。

返事をしたら、どこかに連れて行かれるとか……

「おーいおーい」

増えた。

「おーいおーいおーい」

トリプル入りましたー

と、ふざけていても、状況は進まないの、俺は声のする方、気配の有る方を向いた。

「はーい」

投げやりな感じに返事をする、何も無かった、空間に、いきなり女の子が出現した。ウエーブのかかった青い髪を、結んでいる。そして……出たよ帽子。何故か東方キャラが被っていることが多い帽子。

「……幽霊?」

「誰が幽霊だっ!」

幽霊も、突っ込みをするものなんだな。勉強になった。多分、普通に生きていくには全然必要ない知識だが。

「だから幽霊じゃないって」

「だから心読むなって」

なんなんだよ、この天井ネタ。もういいよ、流行ってんのか。

「私は谷カツパの……」

「あ、待ってください。河童?」

どこかで覚ええが有る。つまり、こいつは原作キャラだ。

何故、こいつも悉く原作キャラに出逢うんだ。確立おかしいだろ。

「あー少し待ってください」

えつと……河童、河童。思い出せ。誰だっけこいつ——

「そうだ。お、値段以上!」

「にとり♪」

そう、彼女の名前は『にとり』だ。

思いついた。確か、河童というとお値段以上、だと覚えていたんだ。

「私のこと知ってるの？」

「ええ、御尊は兼兼」

「そう？ 照れるな」

よし。こいつちよろい！

「それで、何の御用でしょうか、にとりさん？」

「うん。単刀直入に。帰ったほうがいいよ？」

……は？

何言ってるんだこいつ。

「申し訳ありませんが、俺は帰るわけには……」

「なら力付くでも！」

「おい！ おいおい、待て待て！」

「何なんだ、いきなり!？」

「俺も、ここに用事が有るんですって！」

「問答無用！」

「話聞いてくださいよ河童さん!!!」

クソツ!今日は大丈夫で終われると思ったのに!

『妖怪の山』 ってネーミングだけで近づきたくないよね
お値段異常な河童物語。

「——問答無用！」

「話聞いてくださいよ河童さあん!!!」

いきなり戦意を出してきた河童から逃げるため、俺は山の木々の中を走って潜り抜けていく。

「な、何故突然……」

俺を喰う為に、か？

いや違う。にとりは俺を帰そうとしていた。俺が目的ではなく、俺が山に入ろうとする——その行為の妨害が目的。

何の為に？その目的を彼女が達成するメリットはなんだ？……駄目だ。分からん。情報が少な過ぎる。

木々の中を暫く走ってから、俺は巨大な樹木の裏に腰掛け、情報の整理を始めることにする。

にとりが俺を発見するのも、時間の問題。

彼女は妖怪だ。攻撃を受ければ——少なくとも、大怪我は免れないと推測される。それは……当然だが、困る。

「そ、そうだ」

俺は霖之助さんに貰った鞆の中から、携帯と取引で貰った『アレ』を取り出す。

「御札。一ダース……」

素手だろうが、能力を使ったものだろうが、ロボットのビームだろうが——『力』というものには、絶対的発射をする。それがこの、札の効果である。

「いざという時はこれを……」

使うしか、無いだろう。

だが出来ることなら、それは避けたい。

完全な安全を確保するまでに、どれだけの時間が掛かるか分からない。

それまでに、妖怪に襲われることも少くないだろう。

だが、御札は無限ではない。十二枚しか無いのだ。

そう、安易に使えるものか。まあ、死んだら本末転倒なので、本当に使わなくてはいけない、という時までだ。

「近づいて来てるか……？」

先程、間近で目撃してしまった。

彼女——にとりは、どんな手段を使っているのかは知らないが、姿を消すことが出来るのだ。

先程は気配や音は有ったが——それだって、消せる可能性が有る。

周囲に強い注意をしながら、俺は鞆から、もう一つのアイテムを取り出した。

「OK。頼むぜ、パーソナルコンピュータ……！」

パソコン。

俺の能力に依って、立ち上げる事は出来る。

無駄に強力なこの能力のお蔭で、充電しなくても、年中起動出来るというおまけ付きだ。

後は——

「『普通』パソコンなんだからネットに繋げるもんだろ？」

そう呟いて、インターネットというカーソルをクリックする。

すると、パソコンは大型検索サイトgoogleに繋がる。

俺はどちらかと言うなら、yahoo派なのだが……まあ、繋がったんだからよしとしよう。

慣れた手付きで『東方 にとり』と検索する。

「出てきたー！」

フルネームは『河城にとり』というらしい。苗字有ったんだな。

「えつと何々……？きゆうりを渡して開放された例が有る？きゆうりなんか持っていないから！」

もつと、有益な情報は無いのか……？

なんか、どうでもいいことしか出てこないんだが。

「『水を操る程度の能力』？」

どこが『程度』だ、どこが。という突っ込みは今更か。

待て。水を操るって、最強じゃないか？どこまで操れるんだ？

血液だって操れるし、空気だって操れるじゃないか。制限が有るなら良いが……

「一体どういう……」

呟いた瞬間。俺の腰掛けていた樹木の直ぐ隣の木に、弾丸が撃ち込まれた。

「は……？」

穴の開いた木を触ってみる。

「濡れてる……」

「見つけた！」

水弾丸が発砲された方を見ると、そこには仁王立ちをするにとりの姿が有った。

「やばっ！」

俺は鞆を持ち、パソコンを抱えながらさらに逃げていった。

「あ、待て！」

「誰が待つんですか！」

俺が見ていたパソコンのページには『実際にどこまで出来るかは不明』と、能力の詳細が書いてあった。

「今分かったよ。少なくとも弱くないってことがな！」

誰に言う訳ではないが。鬱憤を晴らすように叫ぶ。

「もっと、もっと情報は！」

走りながらパソコンを使うのがこんなに大変だったとは。普段こんなことしないから知らなかった。

いやまあ、しないのが普通なんだが……

「下にスク水を着てる説が有る？え、マジで————つて、とことんでもいいわ!!!」

一瞬興味を引かれかけたが、直ぐに吹っ飛ぶ。詳しい情報は後でゆっくり出来る時に調べるから、今は、現在。必要な情報が出てくればいいんだ！

——だが。ネットというのは、どうでもいい情報の宝庫である。

旨く行かないものだ。

「検索、検索、検索、検索!!!」

有益な情報、有益な情報。

やはり、きゆうりを渡すしかないのか……？

「だから待つてえ！」

「だから待ちません！」

流し読みしていた河城にとりの情報の中から、俺は一つの情報に目を止める。

「人間の盟友？」

どこがだ。なんで盟友を攻撃してるんだよ。

——いや、実際どうなんだ？

俺、攻撃されてるのか？

実際、彼女が本気を出せば、俺なんか取るに足らない存在なのだろう。

だが——俺は無事だ。

更に彼女は、透明になれる技術を持ちながら、それをしようとしな。

本当に彼女は、俺を狙っているのか？

いや違うだろう。俺を狙っていないことは、最初から分かっていた筈だ。

彼女が潰したいのは俺じゃなく、俺を森に入れさせること。

それをする、メリットが不明だったが——人間のことを、盟友と思っているなら——それなら、説明をすれば大丈夫、か？

「ま、待てー!!!」

駄目だ。彼女はもう完全に躍起になって動いている。

彼女の気を完全に引くことが出来れば——

「よしー」

目的変更。

逃げるでもなく、攻撃されるでもなく——

話をするだけでいい。

「……説得、か」

俺はデスクトップに表示された彼女の情報の一部を見て——

——ニヤリと笑った。

*

「——待ってって!」

疲れたような声が聞こえた。彼女が近づいてきている。

まず、説得というのは『入り』が大事なのだ。

その入りの状況を作る為のチャンスは、一瞬。

「はっ、はあっ……くっ！」

彼女が俺に先程の水弾丸を放つ。

俺は眼前にそれが来るまで、ジッと体を止め、直撃の直前。

一瞬。

御札を一枚。弾丸へ放った。

力と力がぶつかり合い——激しい音と、煙が辺りに広がった。

「——え？あ、当たった!？」

攻撃したのは自分だというのに、驚き過ぎである。

「……って、いない?」

煙が晴れたそこには——何も、なかった。

「ま、まさか全部吹っ飛んで……いや、そこまで強い攻撃じゃなかった」

意外と、冷静に分析出来る人、いや河童のようだ。

「じゃ、じゃあ——」

「お見事です」

「ひゅい!？」

これまた、みよんな奇声を上げるな。

「おや。驚かせてしまいましたか。申し訳ありません」

「あ、貴方……!？」

驚いたように目を見開くにとり。

今だ。話す隙は与えない。

「このパソコン」

「え?？」

「俺のパソコンは少々特殊でして……幻想郷の『外』の情報を得ることが出来るのです」

「外の情報!？」

ああ、にとりの情報もね。

神様製能力の賜物だ。

「どうですか、にとりさん?パソコンを、とは言えませんが……これを使って情報を得る、なんてことは、許可しても良いですよ?」

「ほ、本当!？」

先程から、よく驚くなあ。

「本当です。ですが、勿論条件は有りますがね」

「な、なに？」

目がキラキラしてやがる。

「俺を、見逃して貰えませんかねえ？」

「！そ、それは……」

「出来ません、か。仕方が無いですね。この件は無しで」

「え！えつと……」

「では追いかけてこの続きと行きましようか。俺、逃げますんで」

「ちよ、ちよつと！」

「じゃあ、よーい、ドン!!!」

「ま、待ったあー!!!」

「……どうしました？」

「その条件、呑もうじゃないか」

OK。落ちた。いや寧ろ堕ちた、と言った方が正しいな、これは。

だが――

「いえ。いいです。無理させるつもりはないので」

「え!?!」

「それじゃ」

「待つて待つて待ちんしゃい！無理してないから！」

「嫌です」

「何故!?!」

「気分が変わりました」

「ええ!?!」

俺はつい、少し噴出してしまふ。

運よくばれなかった様だ。危ない危ない。

手に入りそうなのに、後少しで手に入るのに――

どうしても、手に入らない。

そんな限定感のようなもの……感情や意思有るものは、それに弱い。

押しても引いても駄目なら――

押しと引きを同時に。

要するに――相手を掌中で弄べ。

それにはまってしまった者は――玩具とやら変わらぬ。同じ感覚に支配される。

先程、河城にとりの情報に書かれていたのはこうだ。

『技術者として、好奇心や探究心が強い』

好奇心と探究心というのは、抑えるのが途轍もなく困難だ。
皮肉なことに、彼女は溺れた。

水を操れる能力を持ち、河童という存在で有る彼女は——
俺の掌の中で、『自分』という底無し沼に——

溺れていった。

*

「俺を、助けようとしていたんでしょう？」

「え？」

無邪気にパソコンを触る彼女に、俺は既に解決済みの疑問を問う。

「河童は人間の盟友だから——危険な山の中に、俺を入れることを止めようとした」
なんと不器用なことだろう。

攻撃で止めてくるとは。もっと方法が有っただろう。

「それが——好奇心に負ける程の心配ですか」

「うっ」

にとりは胸を押さえた。俺の言葉が突き刺さったようだ。

「ま、いいですけどね……」

申し訳無さそうなにとりに、俺は何でもないように笑う。

「この程度、気にしてたら普通に生きるなんて出来ませんよ」

「……普通？」

「俺は普通に平凡に常識的に一般的に平和な日常を送ることを信条としてるんです」

「これでも、割と寛容な心を持つてるんだ、俺は。」

「そ、そういえば！」

「はい？」

「妖怪の山に用が有る、って言ってたけど……何なの？」

「ああ、それですか……」

「そういえばそうだった。」

「さつきからドタバタしていて、忘れてしまっていた。」

「いえ、ね……とある方に、用がありまして……」

「へえー」

「興味なさそう！」

もう彼女は完全なるパソコンの虜だ。

「ハアツ……」

ゆっくりと溜息を吐くと、体がとても疲れていることに気付いた。

途轍もなく、長い時間走った気がする。

「ハアツ……」

ああ、幸福が逃げる……

この疲労で、『これから』大丈夫だろうか……？

鴉天狗と普通の少年。

——無邪気。

邪な気が無い。と書いて無邪気である。

人間、または人間の様な『知恵』を持つ者は、皆少なからず邪な心を持つ。それが普通だ。

逆に、長く生きていて、邪な心が無い——俗に言う、『聖人君子』の様な人間は普通ではない。

妖怪なんてチャチな物でもない。化物だ。

例え話。もし、化物が目の前に居たら、どうする？

困る？泣く？逃げる？戸惑う？叫ぶ？

化物は恐ろしいものだ。

そんな化物が化物染みた感情の者が——

「なあ、これ分解していいか？」

「駄目に決まってるでしょう」

いま、俺の前にいた。

敵意を持たない分、本物より厄介である。

ああ、そんなに落胆しないでくれ。俺は悪くない筈なのに、無意味過ぎる罪悪感に襲われるだろう。

「俺、この後用事が有るんですよ」

飽くまでにこやかに、話しかける。

「へえー……」

無関心。

こんなあからさまな無関心は、寧ろレアもの。Sレアである。

「ここは、良い景色ですねえ」

「へえー……」

「最近良い事有りました？」

「へえー……」

「……胡瓜食べます」

「有るの！」

何故、そこは異様に喰い付くんだよ。

「……『普通』、初対面の相手には御近付の印を、ね」

俺はにとりの掌中に胡瓜を出現させる。

にとりは、俺の能力に驚くこともなく、即座に胡瓜を口に放り込んだ。

「……つて、一口!?!」

「これだけ?」

しかもおかわり要求してきやがった。

「俺もう行つていいですか」

「行つてらっしゃーい」

「いや、俺が言いたいのはそうではなく……」

「ん?……ああ!」

やっと気がついたか。そうそう、俺が言いたいのは。

「お土産は胡瓜でいいよ!!」

「おい」

そうじゃねえよ。誰が態々お土産買って来るんだ。というか、さつき食べただろ。

「そうじゃなくて、パソコン返してくれって言ってるの!」

読者には伝わってないけど、もう軽く一時間以上はあれから経ってるんだよ。

俺は敬語も忘れて、にとりに要求する。

「後五分ー！」

「寝起きの学生じゃないんだから」

しかもそれフラグだよ。少なくとも俺は、その台詞を言っつて五分で済んだ奴見たこと無いよ。

「解つた。じゃあ、少しだけでいい。パソコン貸してくれ」

「ええー。しようがないなあ。少しだけね？」

「図々しい、つて言葉しつてる？今のあんたの状態だよ」

俺はにとりから渡されたパソコンをネットに繋ぎ、調べたいワードをタイピングしていく。

OK。勿論ブライントタッチだ。俺の密かな特技の一つ。え、誰でも出来る？失礼しました。

俺は調べた結果の中から、必要な部分だけを覚え、にとりに返す。

「じゃ、俺が戻ってくるまでは使つといていいから」

「おおー！太もも！」

それを言うなら太っ腹だ。

「腹が太いね！」

良い笑顔で言うな。貶してんのか。

にとりつてこんなキヤラだっけ？まあ、良く知らないんだが。

疲れてきた……こいつと話していたからか。久しぶりの突っ込み担当だからか。

俺は一つ溜息を吐いてから、ゆっくり歩いていった――

「お土産、忘れないでね――！」

「買って来ねえよ！」

振り返らずにそう叫び、後ろから聞こえてきた不満の声を無視して、今度は足早に進んでいった。

*

右足を出して、次に左足を出す。

歩く。それだけなのだが、体が重い。

「山登りなんて、久しぶりだしなあ……」

そう、山を登る機会なんて有るものか。ただでさえ、運動は得意じゃあないのに。

どれくらい、登っただろう？多分まだ全然なのに、先程から、気にしてしまう。

つまり。もう歩きたくないのだ。

「ちよつとここら辺で休憩TIME！」

近くの岩に腰掛、空を見上げる。

「いやあ……山から見る太陽は綺麗だな。サンだけに」

暫し見つめていたいが、目が痛いので止めて置く。

それにしても……登って来たは良いものの……一体全体どこにいるんだよ、おい。

ああ、駄目だ。このままでは干からびる。干からびて最悪の場合死に至るよこれ。

これからどうするかを考え、苦悩していた時である。

ふと、どこかから、音が聞こえた気がした。

「……誰かいるんですか？」

音が聞こえた方に話かけてみる。

——返事がない。ただの気のせい

「待ちなさい」

——気のせいのような。では、済ませられなかった。

「貴方、侵入は——ってあれ？」

「……ん？何だ。射命丸か」

俺の目の前にいた少女に、俺は見覚えが有った。

——射命丸文。

鴉天狗という妖怪であり、東方Projectのキャラクターの一人である。

「あやややや。何だ、生さんでしたか」

彼女と俺は、面識が有る。

出逢ったのは、香霖堂で、だ。

あれは、確か——

*

「——ん？これ……新聞ですか？」

店の中を漁っていると、一枚の新聞を見つけた。

この世界にも、こんなものが有るのか——いや、新聞くらい有るか。江戸時代にも、瓦

版とか有ったんだし。

「ああ、それは僕が取っている新聞でね」

「へえ……ふみあや。新聞？」

変な名前の新聞だな。

「ぶんぶんまろ文々。新聞、だよ」

「どっちにしろ、変な名前ですな」

「変な名前とは何ですか——！」

「え？」

背後から声が——

と、振り向いた瞬間。俺の腹にとても綺麗なキックが極まる。

「ゲ、ハアツ！」

思わず変な声を出して、吹き飛ぶ俺。

「噂をすれば、か」

「号外ですよ！号外！」

「有難う」

「ちよつと待てや、ゴラア！」

人に強烈な蹴り咬ましといて、何、暢気に話し続けてるんだよこいつら！

「あやや？お客さんですか？私、射命丸文と言います！」

「あ、ご丁寧にどうも。俺はここに泊めて貰ってる日常生と——って、待て待て待て！」
何、ご丁寧な自己紹介してるんだよ！つい返しちゃったじゃねえか！

「何で俺のこと蹴ったの!?!」

「私、生さんのこと蹴りましたっけ？」

「覚えてない!?!鳥頭か！」

とうるか、もう名前呼びかよ。

「私、鴉天狗ですから！」

「本当に鳥だった—!!!」

皮肉も嫌味も機能しなくなっちゃったよ！

「冗談ですよ。私の新聞の名前を悪く言ったから——」

「あ……それは、ごめん」

思い入れが有る新聞だったんだな。俺が軽はずみなこと言ったから……

「まあ、それは関係ないんですけど」

「関係ないの!?!」

今のシリアスな雰囲気返せよ！

「ぶっちゃけ、なんとなくです!!!」

「元氣いっぱい何を理不尽ほざいてるんだあんた!？」

「まあまあ。それよりも、ウチの新聞取りませんか？」

「何故この流れから商売をはじめめるんだ!？」

「今ならペットボトルのジュース——の、『キャップ』も付けますよ♪」

「全力でいらないよ!寧ろ何故その特典で釣れると思ったのかなあ!？」

「生さんなら、或いは——」

「いや、有りませんからあ!？」

初対面の奴に変な期待を抱いてるんじゃないよ!

「へえー。今度人里で祭りかあ。まあ、行かないけど」

「霖之助さん!?! 貴方は話に絡んで来ないと思つたら、何、暢気に新聞読んでるの!？」

「……え、何か言つたかい?」

「駄目だこいつ……早くなんとかしないと……」

「そうですよ!この清く正しい射命丸を見習つて!」

「どこが清く正しいだ、どこが。あんたはもう俺の中で子供に見せたくない奴『N o .

1』だよ」

「そんな、生さんの中で『N o . 1』だなんて……ポツ」

「誤解を招く部分だけ切り取るな」

頬を赤らめるな。自分で擬音を口にするな。気色悪い。

「生さん」

「こんどは何だ。」

「責任取って、私と結婚してください！」

「何の責任だよ！」

「おめでどう」

霖之助さん!? 何でこんな時だけ混じってくるの!?

「おめでどう」

「何で射命丸までやってんだ！」

「おめでどう」

「おめでどう」

「おめでどう」

「……有難う」

幻想に、ありがとう。

現実には、さようなら。

そして全ての一般人に——

おめでとう

*

「——というのが、ファーストコンタクトでしたね！」

「おい待て。捏造すんな」

先程の回想はフィクションだ。

厳密に言うくと、最後の部分は全て。

「あ、あれー。そうでしたっけ？」

「わざとだろ」

「ふ、ひゅー、ひゅー♪」

「口笛、吹けてないけど」

全く、と。一度嘆息して、文を見直す。

「射命丸。少し、話が有るんだけど」

「何ですか？……！まさか」

まさか……？何を思つて。

「やめて！私に乱暴する気でしよう？エ○同人みたいに！エ○同人みたいに！」

「……違う。少し、頼みが有るんだ」

俺のシリアスな雰囲気を感じ取つたのか、文は、真剣な顔になつて俺を見つめる。

「頼み、つて？」

「実は——」

「それは……私にも、沽券とか、ポリシーが」

「解つてる。分かつてて、頼んでるんだ」

全て『調べた』からな。

「何故、理由を聞いてもいいかしら？」

それは、記者としての好奇心や探究心。そして、長年生きる妖怪としての、義務も込

めた——

そんな詰問だった。

「単純なことだ」

「単純？」

「俺には信条が有るんだよ」

決して破ることの無い、信条が。

「どんなものか聞いても？」

「ああ、勿論。隠す道理も見つからない」

決して変わることを無い、信条。

変えることの出来ない信条。

「俺は、普通に平凡に常識的に一般的に平和的な日常を送ることを、信条としてるんだ」

「……普通、ね」

普通以外に、何が要るんだ？

生きることに、普通でなくなる必要が、有るのか？

そんな俺の、俺自身への問いは、俺の心の中で——

渦巻いて、消えた。

*

「——へっくしょん！」

「おー。大きいくしゃみだなあ。全く」

「ん？あ、帰ってきたの？」

俺の声を聞き、にとりが振り返る。

「一つ、頼みが有る」

俺はにとりがこちらを見るのを確認して、頭を下げる。

「ど、どうしたんだ？突然」

「そのパソコン。暫くは貸してやる」

「本当!？」

その姿は、まさに今にも飛び跳ねそう——

というか、飛び跳ねていた。

「ああ、だから一つ」

「一つ？」

「寝床を——提供してくれないか？」

大丈夫だ。事は順調に——進んでいる。

物欲には好物を。

「——ホームレス？」

「……まあ、そんなところだ」

遠慮しない奴……今更か。

「苦労してたんだなあ」

まあね。実はまだ、幻想郷こゝろに来てから、二週間も経ってないんだが。

期間なんて関係ないさ。大切なのは、苦労した、事実だろう？

「そうかそうか、頑張ったんだな！」

んー……苦労したってだけで、努力した訳ではないんだがな。まあ、話が有利に進み

そうだし、黙っておこう。

「それで寝床、というか家を……」

「えー……」

無理難題を言っているのは分かるが。何とかならないか？

「ううん……」

物凄く、渋い顔してるよこの方。

「用事はもう終わったのか？」

話逸らされた。

「一応、ね」

まあ、射命丸には逢えたし、成果としては充分過ぎるほどだ。

つと。そういえば――

「はい、これ」

俺は、大きな紙袋をにとりに手渡す。

「何これ？」

中を見ろよ。中を。

「見たらいきなり『ウワァー!!!』とか」

その『ウワァー!!!』が何なのかは分からないが……

まあ、にとりが考えているものは、変なことだということとは分かる。

にとりは俺の視線から否定を読み取ったのか、そろり、と袋を覗き込む。

「ふ、これは――!?!」

そう、察しの良い人なら――いや、そんなに良くない人でも気付いているだろう。

中身は。

「胡瓜だよ」

「いただきます!」

間髪容れろよ、もう少し。

「食い意地の張った奴だ……」

「ひやつへえ……ひゆきはからすあ」

物を口に入れて喋るんじやありません。

「……ごつくん。だって、好きなんだよ!」

「……胡瓜、物凄く好きなんだな」

「それはもう!!!」

予想通りの解答どうも。

「料理して食べたりとかはしないのか?」

「するけど……やっぱり丸齧りが一番だね!」

まあ、分からなくはないな。味噌とか付けたりして食べると、凄く美味しいし。

後は——そうだな。漬物が好きかな。

浅漬けでも、糠漬けでもいいが……やはり、日本人と言ったら、漬物だろう。

昨今は、若者の漬物離れがドンドン進んでいるらしい。

全く、嘆かわしいことだ。

知らないのか、ご飯と、漬物の絶妙の相性の良さを。

ご飯と漬物は、嫌う人もいるが、俺は好きだ。

そこに味噌汁なんか有ると正に『日本に生まれて良かった！』と染み染み思う。

漬物というのは、誇れる文化なのだ。

誇りは、称え、大事にするものだ。

蔑ろにするものでは、決してない。

無理に食べるとは言わないが……今の若者、まあ俺も若いんだが。

そういった人達は、それ以前の気がするんだよな。

『漬物』という存在自体を敬遠してるといっか……

嫌悪感は抱いていないんだろが。やはり、『古いもの』という感覚が有るんだろがな。

そう、何と言うか——自分達の文化として認識出来ていないというか——もしかして、家で糠漬け作ったりしてないのかなあ？作者の家は、まだまだ現役で作ってるのに。

ああ、こんなことを考えていたら漬物食べなくなってきた。

「なあ、その胡瓜漬物にしたり——」

「もう全部いただきました！」

「嘘っ!？」

バカな……早すぎる……

「え、というか本気で早いな」

「えっへん！」

誉めとらん誉めとらん。

まあ……早く終わったならいいか。

「美味しかったか？」

「とっても美味でした！」

殴りたい、この笑顔。

「——ああ!？」

「ひゅい!？」

その驚き方しか出来ない呪いにも掛かっているのだろうか。

いや、どうでもいいんだが。

「何てことだ、河童さん！」

「……何がだ？」

「大切な胡瓜食べてくれちゃって！」

「え？いや、お土産でくれたから——」

お土産？何を言っているのだろうか？

——誰が、そんなこと言った？」

「いやお前が」

「言つてないよ？」

何を勘違いしているのだろうか？

何を思っているのだろうか？

何を履き違えているのだろうか？

「俺は言つてないよ。ただ、紙袋を渡しただけ」

「あれはお土産じゃあ——」

「違う。あれは、俺のものだ」

窃盗だ。強奪だ。食い逃げだー！つてね。

「お土産だとも、食べていいとも、一言も口にはしていないのに。河童さん……お前が勝手に食べただけだ」

「いや、あの渡され方だったら勘違いするだろ！」

おや、挙句の果てに言い訳ですか。河童というのは随分と卑怯で卑劣なんだね。

おお、怖い怖い。

「俺もねえ……胡瓜好きなんだよ」

「そ、そうなのか」

「同じ胡瓜好きである河童さんなら分かるでしょう？今の、俺の、気持ち」

好きなものを目の前で盗られたんだぜ、俺？

しかも笑顔で『美味でした！』とか言われるし。

「俺は全く悪くないよ？ただ、胡瓜の入った袋を渡しただけ。それだけなのに、中身全部

食べられちゃったんだぜ？」

もし、そっちが俺の立場だったらどうだろう。

好きなものを手に入れて、ウキウキ気分で帰ってきて。

その後、少し持ってももらったら、全部食べられました——

信じられないし、耐えられないよな。

「うう……（めん）」

追い込まれたか。素直っていいよな。簡単で。

「いや、今回の件は、俺の説明不足にも非があった」

俺はにこり、と笑い。

「今度は、一緒に胡瓜食べようぜ！」
と、手を出した。

「あ、ああ！」

にとりも笑って、俺の手を握る。

所謂、仲直りの握手ってやつか？

「ま、それはそれ」

「ひゅい？」

「ごめんで済んだら、警察はいらんわ！」

「ええ!？」

関係の修復と、関係の改善が別物のように――

仲直りは、謝罪の気持ちを求めないってことじゃないんだ。

「ど、どうすれば……」

「お嬢さん！」

「お嬢さん!？」

「ここに一つ耳寄りの情報が」

にとりは、戸惑いながらも、受けの姿勢でこちらの話に耳を傾けている。

そんなにとりに、屈託の無い笑顔を浮べた後。

「こちらの、好きなものを盗られた不憫な少年！」
まあ俺なんだが。

「とても困って——助けを求めているのです」

「助け……?」

よし、釣れた。

「E x a c t l y (そのとおりでございませす)」

「へ? 何て言った?」

気にするなよ。突っかかるなよ。

「この少年! 今! 家が無い!」

「うっ。それはもしかして……」

頭の良い河童さんなら、もう気付いてるくせに!

「OK! 寝床でもいいから欲しいなあーなんて!」

「そ、それは……」

「ああ! お腹減ったな! 誰かさんの所為で!」

実際胡瓜食べても、空腹が紛れるのかは微妙だが。

「——うう」

小さく、呻き声のようなものを上げるにとり。

「分かった、分かったよ！負けた！寝床を探せばいいんでしょ？」

「おや、宜しいので？いやあ、お優しい方で助かりましたよ」

「よく言うね……」

口だけはよく回るのですね。

力も、経験も、妖怪には程遠い人間だが――

「知恵は中々だろう？」

「良くない知恵はね」

悪知恵ね。まあ、そちらの方がよく働くって人間の方が、普通に考えて圧倒的に多いのだろう。多分、俺もその部類だしな。

「まあ、頼みますよ。河童さん」

「一度言ったしなあ。河童に二言はない！」

おお、元気がいいことだ。

「それじゃ、景気付けにどうぞ」

俺は後ろに置いてあった、もう一つの紙袋を渡す。

「何だこれ？」

「胡瓜だが」

そう、中身は胡瓜。それも、十本二十本なんてものじゃなく——

「こ、この数……私が食べたものより圧倒的に多い!どうしたの、これ?」

「言つてなかつたか?俺、能力で胡瓜出すことなんて容易いんで」

「え、ええ!?!それじゃ、別に私が食べても良かったんじゃないか!」

何を言つてるんだ。

「許可を取つてなかつただろう?」

「そ、それにしたつて」

「河童さん」

にとりは、俺の言葉で文句を言おうとしていた口を閉ざす。

「河童に二言はない——だろう?さっさと寢床用意してくれ」

にとりは「なつ」と、不満を漏らそうとしたであろう口を閉ざし、代わりに溜息を吐いてトボトボと歩いていった。

暫く歩いていったところで、遠くから振り返り、俺を見つめる。

付いて来い……つてことか?

俺は、ゆつくりと、にとりの後を付いて行くのだった——

OK、大丈夫！妖怪の山での寝床ゲットまで後少しだ！

小猫と小耳と迷った小物。

「——迷った」

人は迷いながら成長していくのだと、偉い誰かが言っていた気がする。

だが、きつとその偉い誰かは元より天才的で、迷わず、前に、進んで行けたのだろう。そう考えるだけでどうだ？ 全く、良い言葉とは思えなくなってきたな。

まあその程度の先入観で崩壊するような言葉は、元々、良い言葉とは掛け離れた、無責任なだけの言葉だったのだろう。

「どうでもいいよ」

独り。自分で自分に突っ込みを入れる人間とは、実に虚しく、寂しく、最悪的だとは思わないか？

そんなことを幻想リアルでやる元高校生の姿がそこにはあった。というか、俺だった。

「それより、まずは戻ることが先決だな」

迷った時は、焦らず慌てず後ろ向き——

来た道に戻れば良い。変に進むから、変なイベントが起こるんだ。

と、ここまで語ったはいいのだが……肝心な解説。そう、何故俺が突然、前振り無く、道なんぞに迷っているのか言っていないなかつたな。

何、簡単単純明解だ。

にとりに付いて行つた俺は。

「暫く待つててくれ。寢床は、用意するから」

という命令を受けた。

寢床を用意してもらう身で、どうこう言う事も無いので、当然普通に許諾した。

した——ところまでは良かったのだが。

ただ待つているのも暇。

ということ、妖怪の山を散策することにした。

「——その結果がこれだよ！」

どうやら俺は、道に迷うという、厄介な運命のレッテルを貼られているようである。

全く迷惑だ。今直ぐ神に抗議したい、『呼びましたか？』呼んでない、帰れ。

知り合いの神もあんななので、神には碌な奴がいないのだろう、と。どこかの誰かに怒られそうな事を勝手に考え、俺は道に戻って——

——かなかった。

理由は恐ろしく解り易いものである。

「俺、何処から来たんだっけ？」

当然ながら、覚えていたらこんな発言はしないわけで。

当然ながら、つまり、全然覚えていないわけで。

当然ながら、もう何度目かも分からない程のピンチなわけで。

「……ハアツ」

とりあえず、これまた何度目か分からない溜息。

ふと思つたんだが——溜息にはなんとなく、安心感が有ると思わないか？

確かに、溜息は不幸、というか不安的象徴であるという様な風潮が在る。

だが、このようには思えないだろうか。溜息は不安其の物であると。

つまり、溜息を漏らす、ということは、不安を吐き出すことと同義であり——

溜息は、不満を退き、幸福を残す為のものであると。

そう考えれば、どうしようもなく不安な時。抗いようもなく不幸な時。溜息が、『つ

い』出てしまうことの説明にはならないか。

ああ、分かっているさ、こんな考案は字稼ぎ、元い現実逃避であると。

俺はこんなことを考えながら、一步も動けないでいた。

動ける筈が無い。無闇な無意味は創らない方が良い。こういった場面での行動とは、何処であろうと、悉く死亡フラグに繋がるからである。

例えるなら、料理下手が料理を失敗させるのは、目分量に頼ったり、自己アレンジを加えるからである——というようなものだ。

料理がレシピ通りにやれば失敗しないように。

人生もテンプレ通りに生きれば、敗北はしないんだ。

それが、絶対的な勝利やメリット。HAPPY ENDに繋がるかは分からない、が、敗北も勝利も無ければ、人生は引分組だ。

実際それは『悪くない』。

だから俺は常に、引分を目指すのだ。

「この場合は無意味だがな！」

この場合、行動しないという行動にも意味がない。

何故なら、助けが来る確率が0になった瞬間、死という確率が確立するからだ。

つまり、助かるかは分からないが、助からない確率は普通に有る、ということだ。

では逆に、行動した場合——適当にでも、動いた場合は？

まず、死という確率は、100とは言わずとも極端に上昇するだろう。これは回避不可能だ。

だが同時に助かる可能性も上昇する。

射命丸かにとりに逢えれば大吉。

俺が分かる道に来れば中吉。

言葉が通じる相手に見つかれば小吉。

言葉の通じない妖怪に見つかれば大凶、といったところか？

要するに俺が何を言いたいのかというと。

「とりあえず……歩くぞー！」

前に後ろに右に左に斜めに。

俺はのんびりと、歩き始めた。

まさかこの後、あんなことになるとも知らずに……

「おい誰だよ、不吉なナレーション追加した奴!？」

*

出れねえー……進んでいるかも解らねえー……

どれほど歩いたかは分からないが、長く歩いていることは分かる。

それでも全く景色の変化が見られない気がするのはどういうことなのか。答えは明確だ。やはり俺は方向音痴なんだ。

救いの無さ過ぎる答えに、自分自身呆れていると、どこからか物音が聞こえた気がした。

その時の俺の感覚は言うならば完全なる『デジャヴユ』。

そして元より殆ど無かった安心感が崩れ去っていくような気がした。

「あれ、こんなところで珍しいね」

草を掻き分け、俺の元にやって来たのは一人の少女。随分とフランクである。

……その猫耳は萌えでも狙っているのだろうか。

俺としては、猫より犬派だが。

「ああ安心してください。猫も好きですから」

「何の話？」

「さて、ここでクイズです」

優勝賞金商品は、無いけど。

「突然だね」

「俺は何の話をしているでしょう？」

「はい！」

はいどうぞ、猫耳少女。

「解りません」

「おや奇遇ですね。俺もです」

「ところで貴方、道に迷ったんでしょ？」

中々鋭いね。

「ここにいるって、そういうことだから」

「ここは何処なんですか？」

「迷い家」

迷い家、ね。

ここに迷い込んだら、もう帰れないなんて展開は勘弁してもらいたいな。

「ここに迷い込んだら、もう帰れないけど」

「驚異的なフラグ回収の速さですね」

同時に俺の感情も壊れていくよ。

「まあ落ち着いて」

「落ち着けませんよ、普通はね」

俺達二人——というか、一人と一匹の方が正しいのか？

まあいい。俺達二人を、沈黙が包んだ。

別に、居心地の悪い沈黙ではなかったが、決して、良い空気ではなかった。

沈黙を破ったのは——

「これからどうするつもり？」

猫耳少女だった。

「人生は常に迷い道ですよ。迷い家程度では狂いません。だから……別にどうもしませんよ」

猫耳少女は何も言葉を返さなかった。

そして、再び二人の間に沈黙が流れる。

今度は——長い。

どちらも動かず、表情を歪めることすらしない。

安心出来る緊張感——この沈黙からは、そんな感覚に陥った。

先程、どうもしないと云ったが……俺は馬鹿でも完璧でもない。多分いつかはどうかする。

今はその時を待つ。時が流れるのを待つ、というのも。中々良いものだ。

だが、俺のそんな感情は、破られる。

「ねえ」

またしても沈黙を破るのは猫耳少女だ。

これは——会話の主導権を、相手に渡しているように思える。

「貴方、名前は？」

その質問は、予想外だった。

俺の名前を聞くメリットが見つからない。俺が彼女を打ち負かすわけもないし、時間稼ぎも有り得ない。

その微々たる動揺を、一切顔に出さず、言葉だけを濁す。

彼女の言葉は正しくただの『質問』だった。

とても強制力の有るものじゃない。彼女自身も、強制を求めるような雰囲気ではない。

彼女の能力も分からないし……

ここは、言わないのが正解だろう——

「おや、これはすみません。俺は、日常生というものです。お見知り置き——は、求めませんが、宜しくお願いします」

俺は、正解を選ぶ程、ぬるくない。

正解だろうが不正解だろうが。俺が求めるものはいつだって——

普通だ。

「知ってるよ」

じゃあ聞かないでくれ。

「——え、知ってる?」

もしかして——

「ストーキングの趣味は無いけど」

「人の台詞の横取りは、良くないですよ？」

「私は橙」

橙？どこかで聞いたことの有るような名前だ。

まあ、覚えやすくて良い名前じゃあないか。

「心にもないことを」

「心で思ったことなんですが……」

「私は八雲藍様の式だから」

なんだ藍の知り合いか。

大方、あの二人のどちらかが話したのだろう。道理で。

「八雲家で、俺の事を？」

「聞きもしたけど。見たから」

あれ？俺は逢った記憶がないんだけど……

「前、家に行ったらいたのよ」

それで見えず知らずの俺の事を紫か藍に尋ねたと。道理で。

「道理で、沈黙の中に安心感が有る筈です」

「私は別に貴方に敵意はないし」

有ったら困る。

「藍様の友人だし」

「そうだよ。俺が死んだらあいつ等悲しむ……それは自惚れか。だが、ある程度は慕われていと思う。」

「でも、ここに迷い込んだらもう脱け出せないのでしょうか？」

「いや、別に」

設定はどうした。

「設定とは、変える為には有るんだよ！」

力説すんな。というか、その理論を認めたら、色んな人に怒られる気がする。

「帰りたい？」

それは勿論——と、言い掛けて。口を紡ぐ。

「……くっくっ」

生唾を、飲み込んだ。

「どうしたの？」

「少し、御願いを聞いてもらっても宜しいでしょうか？」

「お願い？」

「そ、その耳！弄らせてもらえませんか？」

デジャヴユ再び。

どうやら俺は、結構動物好きらしい。勘違いしないでいただきたいのは、動物好きであって、そういうプレイが好きなのわけではない。絶対に。

「えー……」

軽く引かれた気がする。実はここまで、初会話から十分程である。

「お願いしますー！一生のお願い！ここで使用するのでー！」

相変わらず、軽い一生だ。などと嘲笑う者がいるかもしれない。

変態!!変態!!変態!!変態!!などと、軽蔑する者もいるだろう。

「だけど、ここで引けない覚悟が有るんです！」

「そこまで!？」

俺は橙の突っ込みを無視して、戦闘体勢——土下座に入る。

「……何で?」

何故、かと聞かれれば。理由は無い。

理由は無いが。猫耳は有る。

そして何より——

「そこには愛が有る!!!」

「会話が成立しない！」

言語の成立なんて、実に曖昧なものだ。本当に通じているのかなんて、誰にも分からない。

「いや、小難しい話にしても納得しないから！」

「チツ……」

「舌打ちされた!?!」

俺は何度も来る突っ込みを避けながら、土下座を崩さず、頼み込む。

「お願いします橙さん！少しだけで、いいですから!!」

本当は一時間有っても足りないが……もう、やらせてくれるなら文句はない。少しだけ！先っちょだけでいいから！

「じゃあ……少しだけ」

やった、意外とすんなり！

「やっぱり駄目！」

「ど、どうしてですか!?!」

一度言ったことを覆すなんて！人、いや猫としてどうよ!?!

「今、『計画通り』みたいな顔してたから！」

なあっ！ここ、ここに来て、表情を変化させてしまうとは……不覚ツ！

「それじゃ、私はこの辺で。あっちの方を真直ぐ歩けば帰れると思うよ！それじゃ！」
橙は帰り道を指差して、忽然と姿を消してしまった。

「いや、消えた。というよりは……高速移動って感じか？」

まあ、どちらでもいい。

とりあえず、これでやつと帰れる——

それでいいのか？

このまま、帰って、お仕舞いか？

もう逢えるかも、分からないのに。

俺のやろうとしてることは——逃げじゃないのか？

いや、ここで帰れば全てが終わる。

それならそれで——

終わらない。

『未練』が残るから。

『後悔』に囚われるから。

終われない。

「ああ、そうか……」

単純なことだ。

俺は触りたいんだよ。あの耳が。

「なら、諦めるなんて後味悪すぎだろ……!」

俺は、大きく深呼吸して、綺麗な空を見上げた。

輝く太陽は、俺を、応援してくれているように感じた。

そんなことは無いのだろうが——そう思ったのだ。

なら、それでいい。

俺は、ニヤリ、と口端を吊り上げる。

そして、ゆっくりと——

『『普通』一度した発言を覆すなんて良くないだろ?』

希望を、呟いた。

*

「——ふう。ちゃんと帰れたかな？」

「すみません。少し寄り道がしたくなりまして」

「え？——ええ!？」

何故、ここに？疑問で埋め尽くされた表情を浮かべる橙。

「いえ。やはり……一度、頷いたのだから、実行に移さないと、俺の気が済まない——澄まないので」

「い、いやというかどうかやって付いて……」

まあ、どうでもいいじゃない。それより触らせてよ。

「……ハアツ。まいった。じゃあ少しだけ」

遂に、橙が落ちた。どうやら、俺の熱意に根負けしたようだ。それじゃあ思う存分——

「いただきます！」

礼儀は大事だよな。

しつかりと挨拶を済ませ、さっそく、可愛らしく震える猫耳に優しく触れる。

「ひゃっ！」

甲高い声を上げる橙。

だが、その声に拒絶の念は入っておらず、受け入れてくれていることが分かった。それなら、もつとしっかりと臨まないと逆に失礼だ。

「もう少し、激しくしても宜しいですか？」

「う、うん……」

許可を貰ったところで、俺はスツ、と息を吸ってから、耳を優しく撫でていく。

「ふっ、ううん……んっ」

撫でることに慣れて来たところ見計らい、俺は少し力を強めてみる。

「んんう！……はあ、はあっ……」

少し、藍を思い出す。

彼女も可愛らしく声を上げていたなあ、と。

ああ、いけない。今は彼女との時間だ。

俺は暫く耳を撫でた後、ふと思ひ立ち、ふうっ、と耳に息を吹きかける。

「ひやうんっ!?!……ひゃ、あ、ああん……ちよ、ちよつとそれは……」

「嫌でしたか？」

「駄目ですか？つて聞かないところに悪意が無い？」

「いえ、好意なら兎も角、悪意なんて有り得ませんよ」

まあ、嫌だ。とはつきり言わない感じからして、嫌ではないのだろう。

「でも、触るだけなんて言ってますし……息を吹きかけるのも、弄るのうちに入りません？」

「でも、少しだけ。って言ったし。そろそろ終わりでいいんじゃない？」

怪訝そうな顔で言ってくる橙。

それに対して俺は。

「終わった方が、良いんですか？」

「……質問に質問で返しちゃ駄目って、教わらなかった？」

「質問返しに質問で返すのは、良いんですか？」

俺はにこやかに返し、返答を待つ。

「……貴方って、意地が悪いわね」

だから、俺は一般人だと、何度言ったら分かるのだろう。

よしここは、旨く丸め込んで――

「……さーん」

「ん？」

どこからともなく、聞き覚えの有る声が聞こえた。

自分の耳を頼りに、声がある方を振り向くと。

「生さーん！」

「ああ、射命丸か。悪いが今いそが……ひでぶつ!!」

デジャヴユ三度。いい加減にしてくれ。

俺は、見事に蹴りがクリーンヒットした腹を撫でながら、ゆつくりと立ち上がる。

「いつてえ……何しやがる射命丸！」

「なんとなくです！」

「もうその台詞は聞き飽きた！常識を学べ！」

全く、俺は今、これ楽園タイムだというのに……

ギャーギャー五月蠅い射命丸を無視して、橙の方を振り向く。

さて、さっそく交渉の再開を……

「あれ？」

橙がいない。

前にも後ろにも右にも左にも斜めにも。

「おい、射命丸。橙はどこに行った？」

「あやや？最初から生さん一人でしたよ？」

俺一人だった？まさか、そんな筈は……

「もしか、逃げられたか？」

いや、もしやも何も、そうだろう。射命丸に気を取られている間に逃げたんだ。

能力を使えば、追いかけられないことはないだろうが……止めて置こう。気分も萎えたし。これ以上追いかけて行ったら、犯罪者になりかねん。

俺は軽く溜息を吐いた後、騒音に目を向ける。

「で?」

「で、とは?」

「いや、何の用だ?」

「何も有りません!見かけたので!」

「消滅しろ」

「機嫌悪っ!」

主にお前の所為だ。

「ハアツ……お前は大吉じゃなく、大凶だったか」

「何の話です?」

「いや、お前に一生不幸が降り掛からないかなーという話だ」

「私何か悪いことしました!?!」

「悪いことはしてないが……生まれてきたのは、失敗なんじゃないか?」

「存在否定!?!今のは冗談でも許されませんよ!」

「ああ、すまない、言い過ぎた。お前にも価値は有るよ」

「例えばどんなです？」

「……どうでもいいけどさあ」

「話逸らしに来やがりましたね」

「ティツシユの箱の構造を考えた人は天才だよなあ」

「確かにそれは思いますけど、本当にどうでもいいですね」

「まあ、冗談だよ。お前は良い奴だと思うよ」

「……本当ですか？」

「嘘だ」

「そこは嘘でも最後まで徹してくださいよ！」

仕方がないことだ。

人というのは、嘘吐きだからこそ成り立つんだよ。

嘘を吐かない人間はいない、というのは確かにその通りだが――

寧ろ、人は嘘を吐かなくてはならない。の方が良いと思う。

そうして初めて、人間として成立するのだから――

「格好付ければいいと思つてません？」

「そういう、お年頃なんですね」

高校生なんて、そんなものだろ。

これでいい、これが普通だ。

「あ……喜べ。お前にも価値が出来たぞ」

「何ですか？」

「俺今、道に迷ってるんだよ……案内してくれ」

「豪く上からですね」

「お願いします。射命丸様！」

「よし、じゃあまずは足をお舐め？」

「消えろ」

「もっとオブラートに包んでください！」

「これでも頑張ったんだぞ？オブラートに包まず言ったら、お前がショックで死ぬかもしれない」

「そこまで!?そんな酷い暴言なんですか!?逆に聞いてみたいですよ！」

言つてやろうか？

「怖いのでパスです」

意気地無しだな。

「無意味な意気地は要りません」

「それもそうだ」

「じゃあ、行きましようか」

「おお、道案内は任せたぞ」

「任せました！」

何だか——橙にはまた逢える気がするな、なんとなく。

と、ここでフラグを建てて置けば、まだチャンスは有る！俺は、諦めないぞ！
そうして、どうでもいい時間はまた、過ぎて行く——

あ、寝床ちゃんと用意出来てるかな、大丈夫かな？

普通つばい番外編

【八雲紫と日常編】

空は青い。

雲は白い。

水は冷たくて、お湯は熱い。

これは、俺でなくとも、小学生でも基本的に誰でも知っている様な、自然の常識である。

それこそ、こんな事は動物だって知っている。

人を殺したら捕まる。

小、中学校は義務教育。

だからと言って、高校や大学も出ていて損は無い。

これは、人間——もう少し詳しく言うなら、日本人の作られた固定の常識である。

気儘に生きる野生動物には関係無いし、このくらいの事は、学ぶ気が無くても日本人

なら基本知ってる。

それが——常識。

「まだ有るわよ？常識」

「……心を読むのは、世界的常識に反していると思うが」

「口に出してたけど」

え、本当かよ。考える事に没頭し過ぎていた気は無かったんだが……気を付けるようにしよう。

「まあ、嘘だけど」

こいつの言葉を鵜呑みにするのは金輪際止める事にしよう。

先ず、疑って入るのが、こいつに対しては良さそうだ。

「ああ……で？他の常識とは？」

外国人の常識や動物の常識。妖怪の常識も有るなんて言わないよな。そんなことは当然の様に知っているぞ。

「個人の常識よ」

「例えば？」

「そうねえ例えば……『目玉焼きには何をかけるか』とかね」

随分とシヨボイ例だ。だが、確かに解りやすい。

醤油にソース。マヨネーズにケチャップ、塩。人夫々、皆違う答えや同じ答えが返ってくるだろう。

その答えの中にも「基本は醤油だけど他でも良い」とか「ケチャップ以外は考えられない」とか、様々だろう。

「だが、それを常識というには無理が無いか？」

そんなの、感性や感覚の違いだろう。出るのは当たり前だ。

「どうして？人間のルールだって何処かの個人のモノで、それが広まっただけでしょう？」

「それとは訳が違うぞ。例えば、俺がお前に命令してもお前は俺の言うことを聞かないだろうが、お前より強いものが命令したら聞く、少なくとも考えるだろう？そういう事だ」

「私は生の命令聞くわよ？」

「ほう？なら俺に個人の常識とやらを納得させてみる！」

「いいわよ？それじゃ」

紫は呟くと、いきなり俺の肩を掴んで座っている自分の膝に乗せた。

「……何のマネだ？」

「意外と冷静ね？ドキドキしたりしないの？」

「物凄くドキドキしてるが、表面上に出していないだけだ」

「器用ね……まあそれより、こういう事よ」

何が？

「膝枕に貴方はドキドキしてるみたいだけど、膝枕にドキドキしない男性だっているでしょう？これが個人の常識——というか世界かしら？そういうモノよ」

「——否」

断じて否。

「膝枕に興奮しない男はいない」

「流石にそれはないでしょう」

「有る」

俺は膝枕をして貰っている体制の儘、キメ顔で話し続ける。傍から見るとシユールかも知れない。

「膝枕とは母性の象徴なのだ」

「母性の象徴？」

「そう、膝枕に詰っているのは『温かさ』そして『優しさ』」

小さい時、泣いた子供を慰めてくれたお母さんの、あの時の抱擁。

「それに通ずる、温もり」

少しバランスが悪くて、寝辛いけど、でも温かさを感じる。

「愛」

そう——真心。

「柔らかな掌で、頭を撫でてくれたりなんかしちゃった日には、俺の鼓動が決壊するね」

「結局何が言いたいの？」

「膝枕は素晴らしい——」

*

【八雲藍と日常編】

楽しい時間とは、過ぎ去るのが早く感じるものだ。

逆に、苦しい時間や辛い時間程、過ぎ去るのが遅く感じる。

たった、一分。平等な一分という時間でも考え方に依つては、一秒にも一時間にもな
りえる。

「ふと思つたんだが」

「思わなくていいよ。面倒だから」

人をそんな口を開けばよく分からないことを言う脇役みたいに。

「その表現、微妙に分かり辛いな」

「例えば——人は生きていると同時に死んでいるのです。そう、それは感覚や感情等が
齎す、錯覚かも知れません。ですが、死んでいる事が錯覚なのではなく……生きている
事、我々が、今現在、歩んでいるこの人生こそが錯覚だったら、と考えると——中々興
味深いですねえ。こんな感じ」

「あー……なんとなく分かった」

矛盾ばかり表現として出していれば中二病っぽくて格好良いなんて思つたら大間違
いだ。実際それはかなり寒い。暇潰しに読んでいたライトノベルや、なんとなく見たア
ニメなんかで『生きている意味は何か?』なんて意味不明な哲学やられても、面倒なだ
けだ。

まあ、この小説はやるけどな。意味不明な哲学。

昨今の小説なんて——それも、駄作者が書く駄文的二次創作なんてそんなもん。

「生。それ以上は流石に」

「ああ御免。予想以上にキーボードを打つ手が張り切った」

「それで、さっきの話は？」

「さっきの……ああ。いやふと思っただがな『時は金なり』という言葉が有るだろ？」

「TIME. is. Moneyか」

「何故英語表記にしようと思っただのかは分らんが、それで合ってる」

「有名な諺だな。それがどうした？」

「ああ。この諺を考えた奴って幸せだったんじゃないかな、と思つてさ」

「何で？」

「だって辛かったら、時間早く過ぎろよ、時間なんていらないうもんじゃないから結構幸せな人生で、時間が過ぎるのを早く感じてたから大事だ。とか言っただけじゃないかなって」

「中々、面白いけど……実際どうでもいいな。いい言葉だから現代まで残ってる訳だし。それに、お前風の言葉を使うなら『普通、幸福と不幸は平等』だろ？それを時間の中で如何に有効活用出来るかが問題なんだ」

「今、俺風と言ったがそれは違うな。俺的に言うなら『幸福よりも不幸が人生』だ」
「何故そう思うんだ？」

「間違えない生物なんて存在しないからだよ。百の人生の間、五十の幸福と五十の不幸が与えられるのかも知れないが、幸福というのは少しの間違えて充分不幸に成り得るし、逆に不幸を幸福へ変換するのはとても難しい。だから元の平等が有れど、不幸の方が誰も絶対的に多くなると、俺は思う」

俺の言葉に藍は少し考える素振りを見せる。

「うーん……思ったことを其の儘言うならそうかも、いやそうだな」

他にも何か言いたそうだな？

「ああ。別にそれで良いんじゃないか？」

「何故だ？」

「そう言われると難しいけど——そういうモノだと私も思うし」

何が、言いたいのか自分でも分からないというように、藍は頭を抱える。

「……でも」

そんな藍を見て、俺は微笑を浮かべながら語り出す。

「小さな幸福で大きな幸福の様に喜べたり、不幸から幸福を見出せたりしたら、良いかも
な」

「……それもそうだな。ところで私達、何の話してたんだっけ？」

「時間の話だけど……もういいや。それより、晩飯作ろうぜ」

「おつ。今日は何だ？」

「ううん……何にするか？」

「私から一つ要望が有るんだけど、いいか？」

「何だ？」

藍はにっこりと、笑い、俺の顔を覗き込んで。

「ゆっくりと時間を掛けて沢山の美味しい料理作って……紫様を驚かせよう!!!」

*

【香霖堂の平凡な日々】

「そんな、生さんの中で『No. 1』だなんて……ポツ」

「誤解を招く部分だけ切り取るな」

頬を赤らめるな。自分で擬音を口にするな。気色悪い。

今俺は、香霖堂で射命丸文という鴉天狗の妖怪と対峙している。

ボケて突っ込んで——という日常生活での漫才は突っ込み側からすると疲れるだけで何ら楽しくない。

「で、新聞いかがですか?」

「だから要らないって」

「ペットボトルも差し上げますから!」

「飲み物か……それなら考えても」

「空ですけど!!!」

「そんなオチだと思ったよ!」

「知らないよ! 誰が好き好んでリサイクルに出すもの貰うんだよ。自分で買ってにリサイクルしてろよ。」

「そんな?! いろ〇すですよ!」

「だから何!?!」

いや確かに、ボコボコ、って潰すの物凄く楽しいけどさ。

俺も初めてあの空きボトル潰した時「何だこれ！新時代の幕開け!？」とか思ったけどさ。

というか、幻想郷にいる○す有るのかよ。

「じゃあじゃあ特別に——」

「いやいい。もうその手には乗らん」

「そうですか？幻想郷の事が載った本を差し上げようと思っただけですが……」

「——!」

幻想郷の情報。

それは、ここに來たばかりでこれからの当ても無い俺には喉から手が出る程のモノだった。

パソコンで有る程度調べる事は出来るが、ガセかどうかも判別できないし、そもそも幻想郷の外。というかゲーム世界の外である現実の情報よりも、現地の情報の方が当てるのは当たり前だ。

「ううん……」

「いえ？無理しなくても良いんですよ？ええ、良いんです。一冊しか有りませんからねえ……他の人にあげちゃいますか」

一冊しか無い。

この言葉が真実かどうかは解らないが、確実に射命丸は俺に揺さぶりを掛けている。これに乗ったら、相手の思う壺——それは解っているのだが。

「先ず、金も無いしなあ……」

「そこはご安心を！今払って頂かなくても後払い受け付けますから！」

以外にも良心的だ。いや違う。俺を安心させて緊張感を解した後。

「でも要らないんじゃないや仕方が有りませんね！」

一気に揺さぶりを掛ける——

駄目だ。

俺はこんな作戦には屈しない。決して屈しないぞ——

*

「まいどあり——！」

あれから二分。あっさり屈した。

自分の精神力の弱さには、困ったものだ。

因みに面倒なので、金は今一括一年分払った。

え？どこから？そんなの——

「君って、鬼だよね……」

抜け殻の様になっている霖之助さんが呟く。

前の商品の時の件で脅した。この店に有るものだから、この店ごとでも良かったんですけどねえ？とか言つて。

反論すれば充分論破出来るのに、払つてくれる当たり、結構良い人だよな。感謝感謝。金は返さないが。

「じゃあこれ…生さんにもー」

文が先程持ってきた号外を俺に渡す。

さつと眼を通すと大きな記事は人里の祭りの事——さつき霖之助さんも少し言つていたな。

「これって、誰でも出店が出来るのか？」

「はい、ちゃんと許可を出せば、ですがね」

ふうん………脳内に留めて置くか。

まあ、それよりも。

「そら、早く」

「あやや？何がです？」

「何がじゃないよ！幻想郷の事が書かれてるって本！」

「冗談ですよ！はい！」

文が手渡してきた本は、薄めで表紙にはカラフルに色々な事が書かれていた。

其の中で、俺はその本のタイトルを見た瞬間。固まる。

自分の中で時間が止まった気がした。

「これ——」

プルプルと震えながら声を絞り出す。

「これ、グルメ雑誌じゃねえか！」

表紙には『里のおすすめグルメ』の文字。

「幻想郷の事の雑誌ですから！嘘は言ってません！」

「ぬう……」

それを言われると反論出来ない。

「私の勝ちです！」

「クソツ、やられた！」

俺は雑誌を床に投げ付けて、悔しさを表すように地団駄を踏んだのだった。

「というか、今回の一番の被害者は僕だよね?——」

*

【人喰い妖怪と人乞い人類】

「——キャラ」

「は?」

魔法の森付近で、俺はふと、ルーミアに呟いた。

「キャラ変えてみないか?」

「藪から棒にどうしたのよ?」

ルーミアは途端に怪訝そうな顔付きになる。

「いやさ。一回も『わはー』とか言ってくれないなあと思つて」

「漫画の読み過ぎじゃない？そんなの現実で言つてる生物が居たら妖怪ですら引く」

ルーミアの冷静な突っ込みに苦笑しながらも、話を続けていく。

「俺の中のルーミアはそういうイメージなんだよ」

「あんだつて……そういうところ変だよ。『そーなのかー』なんて台詞に執拗に執着したり」

まあ、本人からしたら意味が分からないか。

例えるなら、芸人に逢つた時、普段やつてくれるネタを披露して欲しい感覚というか——分かりにくいか。

というか、『そーなのかー』なんて台詞の場合。割と誰でも使うし、意識して遣つてる訳ではないだろう。余計に、か。

「その……手を異様に広げてるのはキャラ付けなのか？」

ルーミアのパツと見無邪気さが溢れていそうなポーズを指差して問う。

「聖者は十字架に磔られましたつて言つてるように見える？」

「十字架クロスを好む中二病——という感じに見えるな」

というか、質問の答えになつて無いんだが。

「別にキャラ付けじゃない。というか、キャラ付けて意識してやるモノ？」

「意識してやる奴も居るだろ」

「んー……」

ルーミアは顎に手を置き考える様な素振りをしたが……それ以上は、何も言わなかった。

——沈黙が流れる。

案税制の保障された沈黙なので、緊張感はない。緊張感はないが、何とも言えない気まずさは有る。

「……ツンデレとか？」

とりあえず沈黙を破ろうと、前振り無くルーミアに話を始める。

「何が？」

「キャラだよ、キャラ」

「まだ考えてたのか……」

それは、一度始めた話だから少しくらいで止めるのは勿体無い。

「ツンデレって……」『べっ、別にあんたの為にやったんじゃないんだからね！勘違いしないでよね！』「みたいなのやつ？」

「グハアッ!?!」

余りの破壊力に吐血——は、しないが、吐血した様に倒れる。

「良い、感じだぜ……」

「付いていけない……」

ただ、一つ言わせて貰いたいことが有るとすれば。

「現象的ツンデレも見たいな」

「現象的ツンデレ？」

「元の方のツンデレだよ。つまり、今みたいな感情の二面性じゃなくて、感情の変化を表すツンデレ」

「例えば？」

「ううん……挙げづらいけど。ずつとツンツンしていた相手が、時間の積み重ねで打ち解けて言つて、最後にはデレてくれたら、それはもう破壊力満点なんてレベルじゃない」

「どんな感覚なの？」

「——兵器だ」

「そんなに!?!」

ツンデレで世界征服も夢じゃない。一瞬本気で思うくらいにはヤバイ。

「でも、今実演するのは難しいかなあ……?」

「出来たら実演させられてたの!?!」

惜しいが、ルーミアのツンデレ的台詞が聞けただけでもよしとしよう。

「ちゃんと録音もしたし」

「いつの間に!?!」

俺はパソコンを取り出して、先程のツンデレボイスをルーミアに聞かせる。

「一体いつ録音起動を……」

「ああ俺、ルーミアとの会話は全部録音するようにしてるから!」

「気持ち悪い!!キモいじゃなく、純粹に気持ち悪い!」

全力で引かれてしまった。

「友達だろ♪」

「親友にも家族にも恋人にだってしないから!そんな奇行!」

ルーミアが口で言わずも視線で消去を要請してくる。

その視線は殺気の塊。正に虫どころか弱い人間くらい殺せそうな視線だった。弱い人間である俺はもう死にそう。

「甘いぞルーミア!このパソコンはルーミアの記録は完全バックアップが作られ、完璧なるセキュリティが施される仕組みになっている!具体的に言うと、俺ですら全データ消去は不可能!」

「無駄過ぎる技術力!?!」

まあ、能力を使えば消去出来るが……消去するつもりなんて全然無いし、黙って置こう。

「それよりルーミア——あの台詞、終わりに頼むよ」

「えー……」

「この通り！」

昔から大得意だった華麗なる土下座を見せ付けて頼み込む。

「じゃあ、一回だけ……」

「よし来た！」

俺はまるで、これから戦争でも始まるような緊張感で台詞を待つ。

「わはー。そーなのかー」

沈黙が流れた後、静か過ぎる森には、一つの単調な音が響き渡った。

『録音しました——』

柁舞うとき鐘は止む。

聞くところに依ると、空というものは青いらしい。

そして、夕方には赤く染まり、夜になれば、一面の黒になるらしい。

多分、空というのはおしやれ好きなのだろう。一日、同じ格好で居る事が耐えられないのだ。

だが毎日同じものをローテーションしていると考えれば、実はずぼらなのかも知れない。

実際のところ、空がどんな性格かなんて知る術は無いので、妄想するしか無いのだが。

まあ、空に性格なんて有る訳が無い。だって、空なんだから。とでも言ってしまうと、この妄想はそこで終了である。

だから俺は、そんな意味無き意味不明議論を繰り広げたいのでは無く、ただ、昼は空が青く、夕方は赤く、夜は黒い——

その常識だけを伝えたかったのだ。

俺の上は、今現在、闇に包まれていた。

厳密に言えば、完全なる闇では無く、所々に光も有る。それは星だ。

この事実から推測するに、今は夜なのだ。

夜の、妖怪の山を——俺は回っていた。

比喩とか、言葉遊びとか、そういうのでは無い。

『文字通り』、俺は回っていたのだ。

別に、地球は常に自転しているから、俺達も廻っているんだ。なんて理論としても機能しないような戯言を吐くつもりは無い。ただ俺は、端的に現在の状況を述べただけである。

「——道に迷った」

俺は山を周っていた。

何故何故何故何故何故こんな事に？

それは当然ながら俺の油断。

あの時射命丸シャメイマルに——

『分かる所まで来たから、もう大丈夫だ』

なんて言葉を発したのが原因なのだ。

甘かった。自らの方向音痴運命を甘く見ていた。

分かる道なら迷わないなんて誰が決めたんだ。誰も決めてない。俺が決まっている
と思っただけだ。

俺の所為だから、誰にも文句は言えない。

空に輝く星は、自分を嘲笑っているように感じた。

「射命丸」。河童さん。橙^{チエン}さん」

この辺りの、どの辺りかには居るだろう知り合いの名を呼ぶ。

だが、返事が返ってこないから迷っているのだ。もし返事が返ってくる状況ならば、
こんなところで彷徨ってはいない。

山の地理は把握し辛いらしい。だから仕方の無い事だと、自分を慰めつつ、歩いてい
く。

もう、どれだけ歩いたか。もう駄目だ。誰にも会えず、道も分からない——

こんなフラグの様な台詞を考えても、ここは現実。状況は変化無し。

もしこの世界が俺の人生が、御都合主義やHAPPY ENDに塗れた現実^{幻想}なら、ここ
で何かしらのイベントが発生するのだろう。

だがリアルは俺に優しくはないらしい。

俺には主人公補正も御都合主義も、そして勿論難聴や蹟き屋等というラブコメ属性

も、皆無である。

それは普通である。普通であるから仕方の無いことなのだが……柄にも無く、フラグを建てたくなる。

失敗フラグも死亡フラグも要らないが、成功フラグ恋愛フラグ——エトセトラエトセトラ。

「——それが自由に出来たら苦労しないんだが」

諦めた。そんな馬鹿げた事を考えている様な余裕が有るならば歩く方が良い。

小さく息を吐いて、俺は歩を速めた。

にとりも待たせているだろう。心配掛ける事は、なるべくしたくはない。

もう既に夜なので、手遅れだとは思うが。

「辿り着いたら居ない、とか無いよな……？」

そんなのは、とんだドツキリにも程が有る。

だが有りそうで困る。

そうならない為に俺はただ、歩くしかない。

無心になる様に、俺は道を進んでいった——

*

先程も言ったが、山の地理は把握し辛い。自分が何処まで歩いたのか、見当も付かない。

ただ、前に行ったり、曲がったりを繰り返して、体を疲れさせているだけの現状である。

能力の御蔭で疲れは無いのだが。

しかし、気力が回復している訳ではない。

最早俺の中では知り合いの名前を叫ぶ気力も余力も、残ってはいなかった。

「おーい。誰かー」

もう、知り合いで無くとも良いから、誰か人語が通じる相手に有れば良い。

最悪、野宿でも良い。そこを通った誰かが気付いてくれる可能性も有る。

現在、この状況に限り俺が求めているものは、普通では無くとも良い。変化だ。助かる可能性だ。それさえ見出せれば、後はどうとでもなる。どうとでもする。可能性に縋ったり、擦寄るのは、得意なんだ。

もう。何を考えているのか、自分でも理解出来ない様な事を考え始めたその時だった。

御都合主義が、起こった。

「——あれは……？」

人影。

人かは判らないが、そう見える影。

それが視界に入った瞬間。俺はそちらに向かった。全力で歩いた。

もう走る気は起こせなかったが、それでも、続ける事はするしか無かったので、なんとか、歩を進める事が出来た。

「あのっ。そこの……あ、れ？」

俺は確かに影を追った筈だが、俺が向かった先には、何も無かった。

少なくとも、人影に見える様なものは、何も。

見間違えか。幻覚か。そう思った時だった——

背筋が、凍った。

まるで、俺の後ろの世界が、全て、氷付けになった様な感覚に襲われた。

咄嗟に足を前に遣るが、動けない。

疲れて動けないのでは無い。首筋に、冷たさを感じてしまつて、動けなかった。

鉄の冷たさ。俺の首筋に当たっていた物が、刃物で有る事を理解出来るまで時間は掛からなかった。

が。それを理解出来ても、何故、突然に、刃を当てられているのかなんて分かる筈も無い。脳をフル回転させ、必死に自分の状況を考えながら、身体を硬直させていた。

どれだけ時間が経っただろう。時間が止まっている気がした。それくらいに、状況に変化が無かった。

刃が俺の首を切り落とす事は無く。ただ、俺が何か行動を起こせる筈も無く。雲が流れる様子を、なんとなく、観察していた。

やつとの思いで、少しの反抗と言う様に、口を開く。

声は出ない。何を言つて良いのかが分からない。

軽い調子で詭弁を吐いて遣りたかったが、そんな余裕を見せても、相手の逆鱗に触れたりして、刃を横にやられたら、そこで終了だ。

迂闊な事は出来ない。迂闊な事は言えない。

何も出来ない。少し顔をずらせば、相手の顔が見えるかも知れないが……いきなり、刃を突付けて来る奴だ。勝手な動きをすれば、どうなるか分からない。

分らない。勇気が出ない。だからと言つて、何も行動しない訳には行かないが、如
何せん遣る事も無い。

非常識な奴に対して、必死に常識を考えても仕方が無いかも知れない。でも、俺は何をすれば良いんだ？

……そうだな。清水の舞台から飛び降りる覚悟で話でも振ってみるか。清水の舞台から飛び降りる覚悟と言う表現を初めて遣うのが、刃を首筋に当てられた時になるとは思わなかった。

まあどうせ、一度は失った命だ。それに、この儘彷徨っていたら、いつかは死んでいったんだ。

そうして、自己暗示を繰り返す。

ここに来てから、何度死掛けた。転生者である俺に取って、死は軽いものでしか無い。よし。それなら、成る様に成れ。

「あの。俺に何の用でしょう？」

命が目的だ。なんて言われたらどうしようか。どうしようも出来ないね。チエツクメイトという事にして諦めよう。『次回作にご期待下さい！』とでも入れて置けば大丈夫だろう。

俺の言葉に反応して、少し込めた力。刃物を持つ力が強くなった。初っ端から選択肢を誤ったのだろうか。

「——解っているだろうか？」

女性の声。何だ？俺の二回目人生は女難に塗れているのか？そんなオプシヨン設定は頼んでいない。

というか、今のは最悪な返しだ。

解るか、そんなもん。俺が何をしたと言うんだ。転生して色々有って迷っているだけだ。

そもそも、解っていたらこんなに苦労してない。こんなに時間を開けてから口を開くなんて面倒な事して無いよ。

「……さあ？見当も付きませんね」

「……惚けているのか？」

酷い言い様だ。この状況で惚ける奴は多分居ないだろう。少なくとも、そんな奴はまともな人間では無い。

「まあ良い。だが、私の事は忘れたと言わせない」

え。知り合い？

顔が見えていないから判らないが、言っている事を聞く分には知り合いらしい。

でも、こんな声。聞き覚えが無いんだが……

「顔を見せてくれたら、思い出すかも知れませんが」

「剣を退かせば、お前は逃げるだろう」

信用されて無いなあ。一体、何をやらかしたんだ俺は。

「貴方の声は美しい」

「ん？」

「きつと、いや当然、必ず、貴方自身も美しいのでしょね。ああ！そんな人の事を忘れてしまったなんて。罪な人間です。俺は」

「お前……またか！」

また。またって何だ？

いや、前に有った事がもう一度繰り返される様。なんて言葉としての意味では無く。俺はこの女と知り合いらしい。前に会った時も、こんな話し方をしていたという事か？
おいおい。本当に誰だよこいつ。

「すみません。俺は語彙が貧困なもので。似た様な話になってしまうのです。ですが、この気持ちは本当です。俺は貴方の顔が、貴方の美しい顔が見たい！」

もう良い。この儘で良い。俺のペースで持って行ければ後はどうとでもなる。

「嘘は吐きません。それに貴方も、この儘、俺が思い出せず話が進まないのは本意では無いでしょう？俺は今、走って逃げられる程の体力も有りません。大丈夫逃げません。保障します」

「……分かった。こちらを向け。剣は退けない」

チツ。まあ良い。今はとりあえず、この女の顔を見て思い出そう。話を進めるしか無さそうだ。

劍が少しだけ首筋を離れる。だが、警戒は解けるどころか、寧ろ強まったようだ。

俺はゆつくりと、後ろを向く。するとそこには、背にピツタリとくつ付いた、白髪の女の姿が有った。

女は俺の目を、キツ、と睨み付ける。どうやら相当に恨まれているらしい。

そこで気付く。ああ。彼女は人間では無いらしい。

何故なら、人間には犬耳なんて附いていないからな。

そして気付いた事はもう一つ。俺は彼女を知っている。

「犬走、柎、さん？」
イヌバシリモミシ
 犬走 柎。

説明を一応少し。

初登場時は東方風神録四面中ボスキャラで、確か種族は……白狼天狗。

山の見回りをしていて、天狗の中では下っ端らしい。

能力は『千里先まで見通す程度の能力』。内容は文字通りである。

こんなところか。俺だって、ある程度は勉強してきているのだ。その為、紹介の時に Wiki を引用した様になってしまふのは仕方が無い。そこに文句を言われても困る

からな。建前的に『適當ですみません』と言う事しか出来ないからな。

ここで重要なのは一つ。俺は、彼女の事は知らないという事である。

忘れていた訳では無いと思う。本当に知らない。情報は知っているが、幻想郷で、生で会ったのはこれが初めての筈だ。

だが。ちよつと待ってくれ。彼女はどうかやら俺を知っているらしい。嘘を吐いている訳では無いだろう。詰まるところ、俺は記憶喪失なのだ。

——いや、無い無い無い。

流石にそれはフィクションが過ぎる。伏線も碌に張つて無いのに。

別の可能性が有るとすれば。

「ストーリーキング……？」

「……」

「冗談です！ 冗談！ だから剣に込めた力を弱めて下さい！」

完全に振り被つていた。一瞬で持つて行くつもりだった。ハアツ……解つてはいたが、幻想郷には、常識人や常識妖怪はいないのか？ ああ。この分じや居ないな。今後登場が期待される、幽霊や妖精。後は、鬼なんかに淡い希望を持つて置く事にしよう。

それで。変質者ストリーカーでも無いと。まあ、変質者と言うなら、性質が変わつて、狂つているという部分で一致しているだろうが。

「申し訳有りません。俺は、貴方の事を思い出せません。一体、どこで逢ったんでしたっけ？ああ。でも。美しい方だと言う考えは間違っていないなかつた様です。いえ。想像よりも遥かに美しい。そういう意味では読み間違えていたかも知れません」

「黙れ」

「解りました。ああ。僕は何故こんな美しい方の事を思い出せな——」

「黙れ」

「……分かりました」

圧倒的。圧倒的にこちらが不利。さらに、未だに相手の素性も目的も掴めない。と来たもんだ。素性は掴んでるけど。

「私の事を知らないのなら、何故、私の名を知っている？」

「……」

「……おい。何とか言え」

「あ。喋って良いんですか？さっきは殺気を放って『黙れ』とか言っていたのに」

あ。冗談です。冗談抜きで冗談ですから。だから斬るのは勘弁して下さい。俺なんて倒しても、何のアイテムもドロップしませんし、経験値0ですし。斬るだけ無駄ですって。本当。

危ねえ。死ぬところだった。『命なんて軽いものでしか無い』とか不道徳的に格好付

けたけど、そんな事遣るものじゃあ無い。

「お前が私の事を覚えていないのも無理は無い」

おい。忘れていたとは言わせないとか何とか、先程の台詞は撤回ですか。この野郎。

それにしても、どういう出逢い何だ一体？忘れていても仕方が無いけど、斬りかかる程のドラマが俺と犬走椀の間でどう起こったんだよ。

「天魔様」

「え？」

「天魔様と、話をしに来ただろう」

ああ。行ったよ。

天魔が妖怪の山のトップだと聞いたから、というか調べたから、文を使って挨拶に行っただが。

「私はその話を聞いていたんだ」

まあ。実際、行ったところで挨拶なんて出来る筈も無かった。そもそも、妖怪と人間とは交わるべきでは無いのだ。

確かに、行った時には天魔以外にも多くの天狗が居た。天狗以外の奴も居たのかも知れないが、見分けが付かない。

「へえ……で。俺は一体、天魔様と、どの様な話を？」

流石にそれくらい覚えていて。というか、今日の事だ。信じられないかも知れないが、妖怪の山編は、まだ一日経っていない設定なのだ。

だが、覚えていて惚ける。忘れていてで突き通す。理由なんて一つだけ。

「……」

犬走柎は怪訝そうに顔を歪めた。

そう。理由は一つ。犬走柎の反応を楽しみたい。

ここまで話を引つ張つて来れたんだ。後は何とかなる。何とかならなくても、未来の俺が何とかするだろう。

だから、現在の俺は、未来で自分から恨まれる事となつても、直感で欲望で生きて行く事にしようと思った。

「実は俺。記憶喪失かも知れません。覚えていないのです。ですから、教えて頂きたいなあ、と」

「……分かった」

私が見たのは。と、犬走柎はありがちに話を始めた。

知っている話を、他人の視点で聞くと言うのも、案外良い物だ。

「聞いているのか？」

「え？ ああ。ちよつと考え事してました。もう一度初めからお願いします」

「ハアツ……仕方が無い。私が見たのは——」

*

「——大好きです！」

「ハア？」

告白した。

生は密かに、告白って、こんなに軽い物だっけ？と溜息を吐いた。勿論、顔は一切歪めずに。

「いえ、すみません！つい、思った事を言ってしまった。自分に嘘が吐けないタイプ何です。私」

生は、それが嘘だ。と、少し前にどこかで思った様な台詞を心の中で抑えていた。

一方の、突然に、告白された、天魔と言うと。

「え、ええ？」

戸惑っていた。

妖怪の山なんて言う、物騒な名前の山のトツプとは思えない、無様な慌て様だった。だが、そこは流石トツプを勤めている者という事か。それか、歳の所為か。顔に出すという事も無く、心も直ぐに落ち着かせて、生を見ていた。

「ですから。今の言葉は真の意味です！ 貴方の様な美しい方を見るのは初めてだ。西洋の人形の様にも可愛らしく、一面の花畑の様にも可愛く、季節の移り変わりの様に美麗で――」

「これでもかと言うくらいに、相手を褒めまくる。辞書を引いて目に留まった言葉を適当に言っている様なくらい意味が解らない。解るのは、飽きる程に褒め称えているという事だけ。」

だが、もう慣れたのか。天魔は殆ど戸惑わなかった。

「ああ。自己紹介が遅れました！ 興奮してしまつて。私、ニテツネシヨウ 日常生活という旅の者です」

パンを銜えながら自己紹介をする主人公の様に、要するに爽やかに手早く自己紹介を終わらせる。何時の間にか、ジョブが旅人になつていた様だ。

「という訳で、お願いします！」

どこから出したのか。能力で出したのか。大きな花束を天魔に向けていた。

「どういう事で!?! 私は何をお願いされてるの!?!」

限界が来て突っ込んでしまった様だ。突っ込み欲には、流石の天魔も勝てない様だ。

逆に生は思った。勝った、と。このままギャグパートとして進めば、危険な目には遭わないと。

「紅い薔薇の花言葉は『熱烈な恋』。一目惚れに、相応しいでしょう？全部で、108本有ります。知っていますか？薔薇は本数で花言葉が変わるんです。108本は……『結婚しよう』。そういう意味です」

「一目惚れなんて、惚れるのが速いだけ。冷めるのも、速いものよ……」

ギャグパートの雰囲気流されたのか、それとも、昔に何か有ったのか。天魔は達観した様に、生を諭す。

「108本の薔薇には……」

「え？」

天魔の声を無視して、話を続ける。

「108本の薔薇には、まだ、花言葉が有るんです」

「……」

天魔は何も言わず、ただ、生から目を背ける事もしなかった。

『『尽きる事の無い愛』。この気持ちは、一生、変わる事が有りません。どうか、私。いや、俺の手を、握ってくれませんか？』

そっと、生は右手を差し出した。

引き寄せられる様に、天魔は左手を出す。

そして、丁寧に、寶石の付いた綺麗な指輪を、天魔の薬指にはめる。

天魔が戸惑っている、生は、ニコッと微笑んで、

「有難う。これから、宜しく」

と呟いた。

*

「——天魔様を誑かすなど！」

「誑かす？ 誑かすって何の事ですか？」

それにしても、胡散臭いし行動が鼻に付く奴の話だ。その男は碌な人間じゃあ無いな。

「申し訳ありません。本当に記憶喪失の様で、本当に分からないんです」

「なつ。そんな嘘を！」

「本当です。証拠と言う訳では有りませんが、こんな夜に妖怪の山を彷徨う人間は居な

いでしよう?」

昼でも居ないだろうけど。

「俺、道が分からずに、迷っているんです。本当に、ここがどこか分からないんです」

「何故、私の事を知っていた?」

「何となく、名前が出て来たんです。多分、記憶が錯乱しているのだと」

嘘は吐いていない。俺は迷っているし、顔を見た時、考えるより先に名前が出たのも本当だ。

「……」

ああ。信じてないな。これは。少しは可能性として有るかも知れないと思っている程度か。

「ですが。他人事として聞くと、それは可笑しな話ですね」

「どういう事だ?」

まあ、ノリがギャグだけど。その男の台詞は戯言の塊だよ。

「だって。その男は薔薇を渡して、薔薇の花言葉を教えて、指輪をあげて。それだけですよね?」

「どう考えても求愛行動——」

「違います。花言葉は『結婚しよう』でも、『結婚して下さい』と言った訳じゃあ無い。左

手薬指は結婚指輪を嵌める位置ですが、そこに普通の指輪を嵌めてはならないという決まりは無い。『美しい』というのは、単なる社交辞令の様なものと捕えれば、どうでしょう？」

挨拶しに行つて、社交辞令をかましながら、御近づきの印として、プレゼントをしただけだ。

「そんな理論が通る訳無いだろう！」

「でも、通す馬鹿が居るんですよ。この世には」

馬鹿みたいな奴が。嘘は吐いていないし、世界の決まりも無視していないと、自己を正当化したがる奴が。

もう、犬走柎は俺が記憶喪失なんかでは無いと、断定しただろう。そして多分、天魔にこの事を伝えるだろう。

だが、今のところはそれでも良い。彼女は天魔に伝える事を優先するだろうから、この場は逃れる。そして、彼女が向かった方向が天狗の拠点だ。その場所は何となく覚えていたから、それで自分の居る位置を割り出せば良い。何だ。バツチリじゃないか——

刹那——視界が暗転した。

目が眩んだのだ。痛みで。目を開けていられなくなったのだ。

俺の身体が、ゆっくり倒れるのを感じる。微かに見えるのは、紅。紅。紅。血だ。血に塗れている。

俺は、斬られた？声が出ない。喉をやられたのか。痛みを感じている様な、何も感じていない様な、よく分からない感覚。

何故。斬られた。ここで。読み間違えた。失敗した。

簡単な話だ。俺は——死んだ。呆気無く。情緒無く。遠慮無く。俺の存在を無にする為に。

犬走椀が息を荒げている。もっと冷静な奴だと思つたが、カツとなつてやったというものか。きつと、純粹に尊敬していたのだろう。天魔を。だから、抑えられず、許せなかつたのだ。

そうか。遠慮もしていたんだ。躊躇もしていたんだ。理解もしていたんだ。ただ、許せなかつただかなのだ。

なら、俺は、笑うしか無い。笑つて許すしか無い。

意識が遠退く。ああ。早いなあ。人生の終り。調子に乗つて遊び過ぎたか。

ここは、切り抜ける場面だよ、普通。転生者が、こんなギャグパートで死亡とか、普通じゃない。異常的だ。

……ああ。そっか。フラグ、建つてたのか。フラグを考えても建たないとか言つてたけど。

俺、言つたじゃないか『死亡フラグは要らない』って。それ完全に、死亡フラグだろ。でも、最期くらい、普通で良いのにな。こんな時なのに呆れる様に苦笑していた。幻想郷は、最期まで、異常だった。

そして——意識が途絶えた。大丈夫かどうかなんて、考える間も無く、死んでいた。